

木ノ沢楯跡

発掘調査報告書

1999

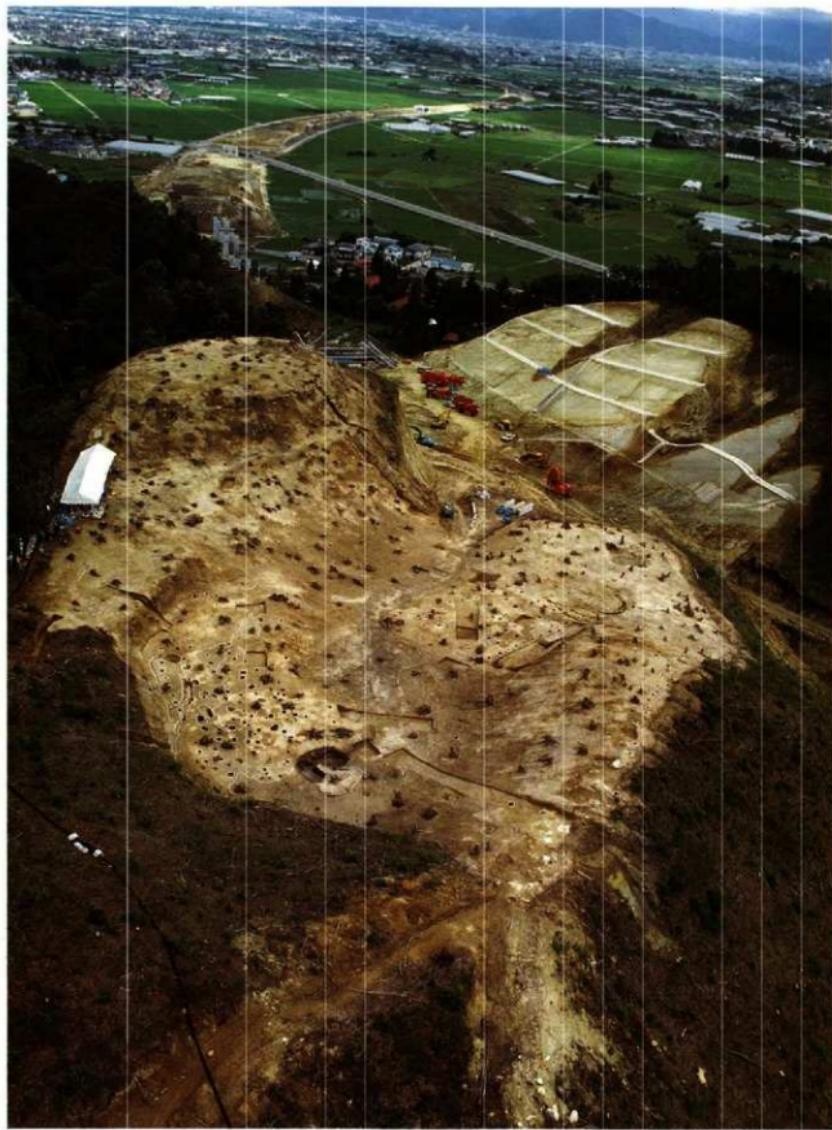
財団法人 山形県埋蔵文化財センター

木ノ沢楯跡

発掘調査報告書

平成11年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区全景（西から）



郭4整地層土層断面（北東から）



ST150出土土器

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、木ノ沢楯跡の調査成果をまとめたものです。

木ノ沢楯跡は、山形県のはば中央部に位置する寒河江市にあります。寒河江市は、西側に月山、朝日連峰、葉山などの山々がそびえる出羽山地が連なり、南、東、北を山形県の母なる最上川と、寒河江川の両河川に囲まれています。市内の所々には果樹園が広がり、さくらんぼの生産地として全国でも有名になっています。

この度東北横断自動車道酒田線(寒河江～西川間)の建設工事に伴い、工事に先立って木ノ沢楯跡の発掘調査を実施しました。

調査では、中世に寒河江一帯を支配下においていた大江氏に関連すると思われる、15世紀代の楯跡の全貌が、ほぼ全面にわたって明らかにされました。県内で発掘調査によって山城の構造が明らかにされた貴重な例といえるでしょう。

また、平安時代の堅穴住居跡も5棟見つかっています。この集落と、近接する奈良・平安時代の平野山窯跡群との関連が注目される遺跡もあります。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成11年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場 清耕

例　　言

1 本書は、東北横断自動車道酒田線建設工事に係る「木ノ沢楯跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は、日本道路公団東北支社山形工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記の通りである。

遺　　跡　名　木ノ沢楯跡（C S G K S）　遺跡番号　平成7年度登録

所　　在　地　山形県寒河江市大字柴橋字木ノ沢

調　　査　主　体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

受　　託　期　間　平成8年4月1日～平成11年3月31日

現　　地　調　査　平成8年5月8日～平成8年7月26日

調　　査　担　当　者　調査第一課長　佐藤　庄一

主任調査研究員　阿部　明彦

調査研究員　伊藤　邦弘（調査主任）

調査研究員　菅原　哲文

調査員　志田　純子

整　　理　担　当　者　調査第一課長　佐藤　庄一

主任調査研究員　阿部　明彦（平成8年度）

主任調査研究員　佐藤　正俊（平成9・10年度）

調査研究員　伊藤　邦弘

調査研究員　菅原　哲文

調査員　志田　純子（平成8年度）

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団東北支社山形工事事務所、寒河江市教育委員会、山形県教育庁文化財課、山形県寒河江建設事務所、西村山教育事務所の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

5 本書の作成・執筆は、伊藤邦弘、菅原哲文が担当した。編集は須賀井新人、丸山晶子、森谷昌央が担当し、全体については佐藤庄一が監修した。

6 委託業務は下記の通りである。

基準点測量については、株式会社寒河江測量設計事務所に委託した。

地形測量・遺構の写真測量・実測については、アジア航測株式会社に委託した。

7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

S B …掘立柱建物跡・礎石建物跡	S T …竪穴住居跡	S A …柵（柱）列
S K …土坑	S D …溝跡	S X …性格不明遺構
E P …ピット	E L …カマド	
R P …登録土器・陶磁器	R Q …登録石製品	R M …登録金属製品
S …石	P …土器・陶磁器	

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆基準は下記の通りである。

- (1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、磁北に合わせてある。
- (3) 遺構実測図は1/40・1/50の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中の砂目は焼土を、網点は石を表わす。
- (4) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/2・1/3・1/5で採録し、各々スケールを付した。
- (5) 土器観察表中の（ ）で示した計測値は、図上復元による推定値、石器・石製品観察表中の（ ）で示した計測値は残存値である。
- (6) 遺物図版は、1/2・1/3・1/5の縮尺で採録した。
- (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものである。遺構挿図中に図示している遺物も同様である。
- (8) 遺構覆土ならびに遺物観察表の色調について、1997年度農林水産省農林水産技会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 中世の遺構と遺物	
1 郷の概要	4
2 建物跡	8
3 柱列	10
4 溝跡	12
5 土壘	12
6 堀切	12
7 その他の遺構	12
8 遺物	18
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物	
1 奈良・平安時代の遺構の分布	22
2 穫穴住居跡	22
3 土坑	39
4 溝跡	39
5 性格不明遺構	40
6 グリッド出土の遺物	40
V 館文時代の遺物	53
VI 調査のまとめ	
1 中世の遺構と遺物の年代	59
2 奈良・平安時代の遺構と遺物の時期について	59
報告書抄録	66

表

表1	遺構観察表(S T)	24
表2	遺構観察表(E L)	24
表3	遺構観察表(S K・S D・S X)	43
表4	出土遺物観察表1	55
表5	出土遺物観察表2	55
表6	出土遺物観察表3	56
表7	出土遺物観察表4	57
表8	石器・石製品観察表	58
表9	出土銭貨計測表	58
表10	出土遺物分類表(1)	61
表11	出土遺物分類表(2)	62
表12	出土遺物点数表	62

挿 図

第1図 遺跡位置図	3	第22図 S T 151	35
第2図 調査区概要図・縄張図	5	第23図 S T 151出土遺物(1)	36
第3図 遺構配置図(中世)	7	第24図 S T 151出土遺物(2)	37
第4図 郭3遺構配置図	9	第25図 S T 151出土遺物(3)	
第5図 郭4遺構配置図	11	S K 155出土遺物	38
第6図 S B 1	13	第26図 S K 155・156・159・162・163	41
第7図 S B 30	14	第27図 S D 154・S X 158	42
第8図 S B 30土層断面図	15	第28図 S X 160	43
第9図 S B 50	16	第29図 S K 162出土遺物	44
第10図 S B 272	17	第30図 S K 163・S D 154出土遺物	45
第11図 整地層・土墨土層断面図	19	第31図 S D 154・S G 164・27	
第12図 中世の出土遺物	21	S X 158・グリッド出土遺物(1)	46
第13図 遺構配置図(平安)	23	第32図 グリッド出土遺物(2)	47
第14図 S T 28	25	第33図 グリッド出土遺物(3)	48
第15図 S T 149	26	第34図 グリッド出土遺物(4)	49
第16図 S T 28・149出土遺物	27	第35図 グリッド出土遺物(5)	50
第17図 S T 150	30	第36図 グリッド出土遺物(6)	51
第18図 S T 150土層断面図	31	第37図 グリッド出土遺物(7)	52
第19図 S T 150出土遺物(1)	32	第38図 石器・石製品	54
第20図 S T 150出土遺物(2)	33	第39図 遺物分類図(1)	63
第21図 S T 150出土遺物(3)	34	第40図 遺物分類図(2)	64

図 版

- 卷頭図版 1 調査区全景
- 卷頭図版 2 郭 4 整地層土層断面
S T 150出土遺物
- 図版 1 遺跡遠景・調査区近景
- 図版 2 表土除去・郭 1 の測量
平安時代遺構の精査
調査説明会・面整理作業
- 図版 3 郭 1 遺構検出状況
郭 2 遺構検出状況
- 図版 4 郭 3 遺構検出状況
- 図版 5 郭 4 遺構検出状況
- 図版 6 調査区全景
調査区空中写真
- 図版 7 S B 272検出状況
S B 272空中写真
- 図版 8 郭 3 遺構掘り下げ状況
郭 4 遺構掘り下げ状況
- 図版 9 S B 30空中写真
S B 50空中写真
- 図版10 E B 66・78・E A 108・113
E B 99石臼出土状況
- 図版11 S F 239土層断面
郭 3 整地層土層断面
- 図版12 平安時代遺構検出状況・S T 28
- 図版13 S T 149・E L 169
- 図版14 S T 150検出状況
S T 150土層断面
- 図版15 S T 150掘り下げ状況・E L 165
- 図版16 S T 151検出状況
S T 151土層断面
- 図版17 S T 151掘り下げ状況・E L 157
- 図版18 S K 155・S K 156
- 図版19 S X 158・S X 163
- 図版20 中世陶磁器
- 図版21 古銭・石製品
- 図版22 S T 28・149出土遺物
- 図版23 S T 150出土遺物(1)
- 図版24 S T 150出土遺物(2)
- 図版25 S T 150出土遺物(3)
- 図版26 S T 150出土遺物(4)・151出土遺物(1)
- 図版27 S T 151出土遺物(2)
- 図版28 S T 151出土遺物(3)
- 図版29 S T 151出土遺物(4)・S K 155出土遺物
- 図版30 S T 150・151出土遺物
- 図版31 S K 162・163出土遺物
- 図版32 S K 163・S D 154出土遺物(1)
- 図版33 S D 154出土遺物(2)
- 図版34 S D 154出土遺物(3)
- 図版35 S K 162・S D 154出土遺物
- 図版36 グリッド出土遺物(1)
- 図版37 グリッド出土遺物(2)
- 図版38 グリッド出土遺物(3)
- 図版39 グリッド出土遺物(4)
- 図版40 グリッド出土遺物(5)
- 図版41 グリッド出土遺物(6)
- 図版42 グリッド出土遺物(7)
- 図版43 出土石器

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

今回の木ノ沢楯跡の発掘調査は、東北横断自動車道酒田線(寒河江～西川間)の建設工事とともに実施されたものである。本遺跡は、平成5年に実施された山形県中世城館跡調査によってその存在が把握されたもので、「寒河江市史便り」には、その内容が詳しく紹介されている。

その後、平成7年7月13日に、地元の方から遺跡が高速道路用地内に入るという情報が寄せられ、同様の連絡が寒河江市教育委員会からも入った。翌14日には、山形県教育庁文化財課と寒河江市教育委員会により現地の確認を行ったところ、遺跡の大半が高速道路予定地内に入る事が確認された。平成7年11月20日に、楯跡のさらに詳しい状況を知るために、山形県教育庁文化財課により遺跡詳細分布調査が行われた。その結果、楯跡の他にも奈良・平安時代の遺構や遺物が発見されたことから、中世と奈良・平安時代の二つの時期をもつ複合遺跡であることが明らかになった。この分布調査の内容をもとに、日本道路公団仙台建設局(現東北支社)山形工事事務所、山形県教育庁文化財課、財団法人山形県埋蔵文化財センターの関係機関で遺跡の取り扱いについて協議した結果、日本道路公団仙台建設局山形工事事務所の委託を受け、財団法人山形県埋蔵文化財センターが緊急発掘調査を行ない、記録保存することになった。

2 調査の方法と経過

発掘調査は、平成8年5月8日から7月26日までの実質58日間で実施した。調査面積は、上層が3,200m²、下層が900m²の合計4,100m²である。

調査の経過であるが、5月8日に調査事務所を開設、機材の搬入を行い、翌9日、鍵入れ式を行う。その後、楯跡の様相を把握するために、9ヶ所のテスト・トレンチを設定し、遺構面およびその深さを検討し、5月13日から16日にかけて、バックホーを使用し表土を除去した。表土の除去と並行し、人力による面整理作業を行い、中世の楯跡に伴う遺構の検出を行った。

グリットは、5m四方で設定し、グリットの南北軸は磁北に合わせた。グリットの番号は、東西軸は、西から東へ、南北軸は、南から北へ、1から順にアラビア数字をあてた。呼称は、南西隅の杭を基準とし、例えば東西軸が1、南北軸が5であれば、1-5と表記した。

中世の遺構の一部については、もともと山の斜面であった所を削り、奈良・平安時代の遺構を埋めて整地し造成された平場の上に作られていることが判明したため、遺構の精査は、これらの平場上のものを優先して行うことになった。これらの遺構は、登録した後に、注意深く掘り下げながら遺物の登録・取り上げ・土層の断面の観察などの精査作業を行い、写真撮影・図面の作成・写真測量といった記録作業を行った。

楯跡の記録が終了した後に、7月1日から中世の整地層を重機で除去し、その下の奈良・平安時代の遺構面を検出した。下層の調査面積は、900m²である。7月2日以降、奈良・平安時代の遺構と、楯跡の主郭や、周囲の柵列などの調査に入った。これらの遺構についても、精査と記録作業を行った。7月16日に、現地説明会を開催した後に、7月26日に調査を終了した。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

木ノ沢楯跡は、寒河江市大字柴橋字木ノ沢に位置する。本遺跡の所在する寒河江市は、山形県のほぼ中央部に開けた山形盆地の北西に位置する。約140km²の面積の内およそ三分の二を山林が占める。市内の南部を流れる最上川は、上流の大江町左沢で大きく蛇行し北から南西に流れを変える。寒河江市内を横切った後、中山町三軒屋付近で再び北に流れを転じ、北部を流れる寒河江川と合流する。この二つの河川の間に形成された平野に市街地を形成する。平野部は主に、寒河江川の扇状地と最上川が作り出した段丘からなる。標高は東部で約90m、西部で約130mである。市街地の周辺には、水田や果樹園が広がる。寒河江市の周辺は、東に天童市、南には東村山郡域、北西には標高1,000mを超える葉山や月山などの山々が連なる。

本遺跡は、寒河江市南西端の舌状に張り出した山の尾根上に立地する。標高は約190mで、平地との標高差は60mあまりである。西側は標高258mの山頂まで尾根が続き、南と北は急峻な斜面が谷まで落ちる。東側には幾分緩やかな傾斜の尾根が伸び、登山道となっている。遺跡を含めた周辺部には杉や赤松、雜木が繁り、緩斜面は畑地や果樹園に利用されている。

2 歴史的環境

木ノ沢楯跡が所在する寒河江市は、和銅5年(712年)に出羽国が建国されるまで陸奥国に属していたが、出羽国建国後は出羽国最上郡に編入された。仁和2年(886年)には最上郡を2郡に分けて村山郡が成立する。寒河江市は仁和2年以降、村山郡に入ったと考えられている。『和名類聚抄』によると、村山郡には、大山・長岡・村山・大倉・梁田・徳有の六郷からなっており、この中で、寒河江市は長岡郷に比定する考えが有力である。その後、12世紀の初頭には摂関家領荘園として成立していたことが『殿暦』からうかがえる。さらに寒河江荘は、文治5年(1189年)に「奥州合戦」の論功行賞によって大江廣元に与えられた。大江氏は鎌倉時代の地頭から室町時代の在地領主へと勢力を伸ばし、南北朝の動乱を経て寒河江氏と名を変えながら、約400年間に渡って寒河江領を支配してきた。しかし、天正12年(1584年)最上義光に攻められ、18代高基が自刃したことにより寒河江大江氏は滅亡し、最上氏の支配下におかれた。

木ノ沢楯跡の周辺には、旧石器時代から中世まで数多くの遺跡が確認されている(第1図)。本遺跡と同じ横断自動車道関連の遺跡では、旧石器時代の富山遺跡、縄文・奈良～平安・中世の高松Ⅱ遺跡、旧石器～中世の高瀬山遺跡、縄文・古墳・奈良～平安・中世の三条遺跡などが路線内に点在する。特に本遺跡と密接な関連を持つと考えられるのが、本遺跡の北東の緩斜面に広がる奈良～平安時代の窯跡の平野山古窯跡群である。本遺跡は、奈良・平安時代の遺跡としては山上にある特異な立地にあることと、供給されたものとは考えにくい出土遺物などから、むしろ平野山窯跡群の一部に捉えても過言ではないと考えられる。一方、中世の城館跡では、北東約1kmに左沢楯山城跡、南東約3.5kmに柴橋楯跡、高松楯跡、同5kmに寒河江城跡、北約3kmに白岩館跡等、いずれも大江氏関連の城館が点在する。



- 1 木ノ沢遺跡(奈良～平安・中世)
 2 平野山古窯跡群(編文・奈良・平安)
 3 左代城跡(南北朝～元和)
 4 富山遺跡(田石器)
 5 富山2重窯(奈良・平安)
 6 向原遺跡(編文)
 7 金谷原遺跡(田石器)
 8 高松I遺跡(編文・平安)
 9 高松II遺跡(編文・奈良～平安・中世)
 10 高松田遺跡(奈良・平安)
 11 高松脇遺跡(平安)
 12 横堀遺跡(編文)
 13 萩衣長者塚古窯跡(奈良～平安・中世)
- 14 高瀬山遺跡群(田石器・中世)
 15 三条遺跡(編文・古墳・平安)
 16 石田遺跡(編文・弥生)
 17 寒河江城跡(室町)
 18 山岸遺跡(編文)
 19 開揚地跡(中世)
 20 開拓地跡(中世)
 21 開拓地跡(平安)
 22 高松遺跡(中世)
 23 石持原遺跡(編文)
 24 日和田遺跡(編文)
 25 西覚寺遺跡(田石器)
 26 富沢I遺跡(編文・平安)
 27 富沢II遺跡(編文)
 28 白岩遺跡(中世～近世)
 29 中谷洪遺跡(編文)
 30 上谷洪遺跡(編文)
 31 鶴瀬山遺跡(編文)
 32 鶴野福跡(中世)
 33 鶴野道跡(編文)
 34 うぐいす穴遺跡(編文)
 35 平塙経源(總合～室町)
 36 明神山遺跡(田石器)
 37 藤田窯跡(奈良～平安)

第1図 遺跡位置図 ($S=1:50,000$) (国土地理院発行5万分の1地形図「左沢」「寒河江」を使用)

III 中世の遺構と遺物

1 郭の概要

遺跡の主体は、舌状に張り出した一本の尾根筋が二股に分かれる中腹に位置し、その地形は起伏に富んでいる。当然ながら尾根筋から山頂部までの広い範囲を遺跡としてとらえられる。

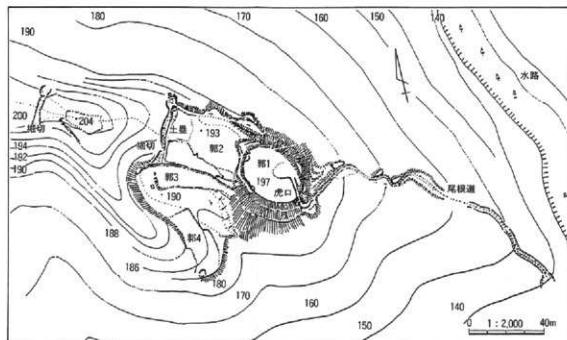
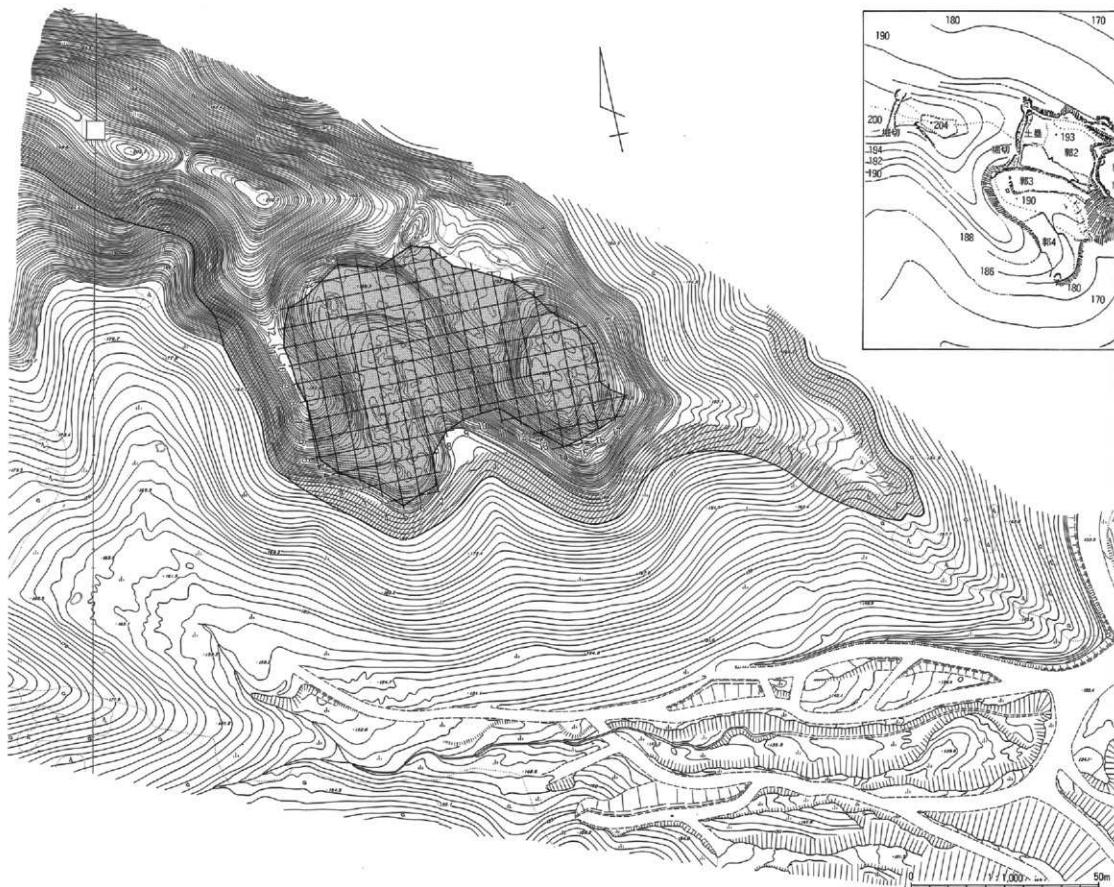
本遺跡は、大きく分けて4ヶ所の郭からなる。尾根筋には3ヶ所に狭い平場が認められ、小規模な郭を構成していたものと考えられる。さらに山頂近くにも狭い平場が設けられている。この中で、今回の調査区の主体をなすのは4ヶ所の郭である。便宜上郭は、標高の高い所から郭1、郭2、郭3、郭4と呼称することとした。各々の面積は、郭1が約450m²、郭2が約600m²、郭3が約270m²、郭4が約280m²である。この内、郭2については直接事業にかかわる約350m²を調査対象とした。それぞれの郭の概要を記した後、主な遺構について述べる。

郭1 本遺跡が位置する山麓の東端部にあり、調査区中最も高い197mを測る。この郭からは山形市から東根市まで一望できる。北側、南側は急峻な斜面、東側には尾根筋が伸びる。山裾からは、約60mの比高差である。平面形は、南北28m、東西20mの長楕円形である。南斜面には小口状に開いた登山道が設けられているが、近年までこの場所には木ノ沢羽黒神社が座しており、その参拝のための参道として切り開かれたものと考えられる。なおこの木ノ沢羽黒神社は、山を降り、民家近くに移転されて現在に至っている。検出した遺構は、神社の跡と考えられるS B 1礎石建物跡、S B 272掘立柱建物跡などである。

郭2 郭1の北西にあり、標高192mである。平面形は、長軸約30m、短軸約25mの長方形である。北西部には土壘と空堀が設けられる。空堀からは尾根伝いに202.3mの最頂点へ達する。平坦面は、腐葉土を10cm前後除去することで地山が表われ、旧地形を削り出して平坦面を設けたものと推測される。東側が約40cm高く、上下2段を形成する。この郭で検出された遺構は、S A 186柵列の他には、径20~30cmのピット45基程である。

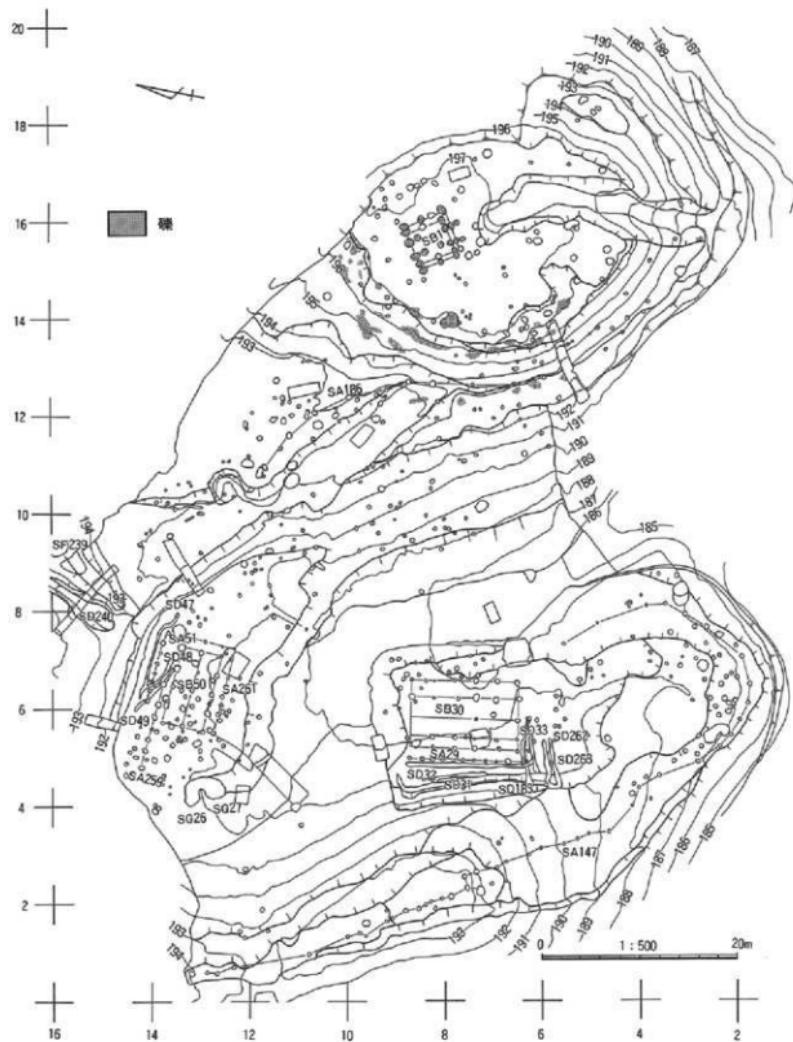
郭3（第4図） 谷部の最も奥まったところにある。平面形は、長軸30m、短軸12mの楕円形である。標高は、189mを測る。北側には急峻な斜面が迫る。郭は8度前後の緩やかな斜面に、崩した土砂を南側に押して整地している。北側約9mは斜面を削りだしたことにより岩盤が露出する。整地層は概ね5層からなり（第11図）、最大70cmの厚さを測る。土質は、炭化粒と山を崩した際の大小の風化礫が混在するシルトである。検出した遺構は、S B 50掘立柱建物跡、S A 51、259、261柱列、S D 47、48、99溝跡等がある。

郭4（第5図） 谷部を挟んで郭3の南側に位置する。東側に谷部、南側に急峻な下り斜面、西側に上り斜面が迫る。平面形は、長軸20m、短軸14mの整った長方形である。標高は、188mを測る。郭3と同様の方法で整地され、平坦部が設けられている。岩盤の露出から、西側斜面を約5m削りだしたことがうかがえる。そのため西側の斜面は、約60度の斜度をもつ。平坦面の旧地形は緩やかで、斜度は12度前後を測る。整地層は概ね7層からなり、最大90cmの厚さをもつ。土質も郭3の整地層と同質のシルトが主体である。検出した遺構は、S B 30掘立柱建物跡、S A 29柱列、S D 31、33溝跡等である。



網張図（高橋慎示氏作図に加筆）

第2図 調査区概要図・網張図



第3図 遺構配置図（中世）

2 建物跡

S B 1 磁石建物跡（第6図）

郭1の北東寄に位置する。南北軸は磁北から約20度西へ傾く。前述した木ノ沢羽黒神社と同じ方向を向いている。規模は、南北2間×東西3間で四面に縁が巡る。南面には中央に1間の張り出しが認められる。礎石の形状は凸形で、破損したものが建物跡の北東寄に1基見られるのみである。根固め石は径10cm前後で、表土を10~20cm掘込み、風化礫を含むシルトでよく締められた上に径約50cmの円形に配される。柱間の距離は、根固め石の中心から測ると、東西は中央が1.6m、両脇が1m。南北は1.8mを測り、一辺3.6mの方形であることがわかる。身舎内の根固め石は、南北の軸線に乗り、南から1.1m、1.6m、1.1mを測る。なお南東の根固め石は樹木により破壊されている。縁は身舎から約50cm離れる。南面の張り出しへは、身舎から1.2m離れる。

S B 30 挖立柱建物跡（第7・8図）

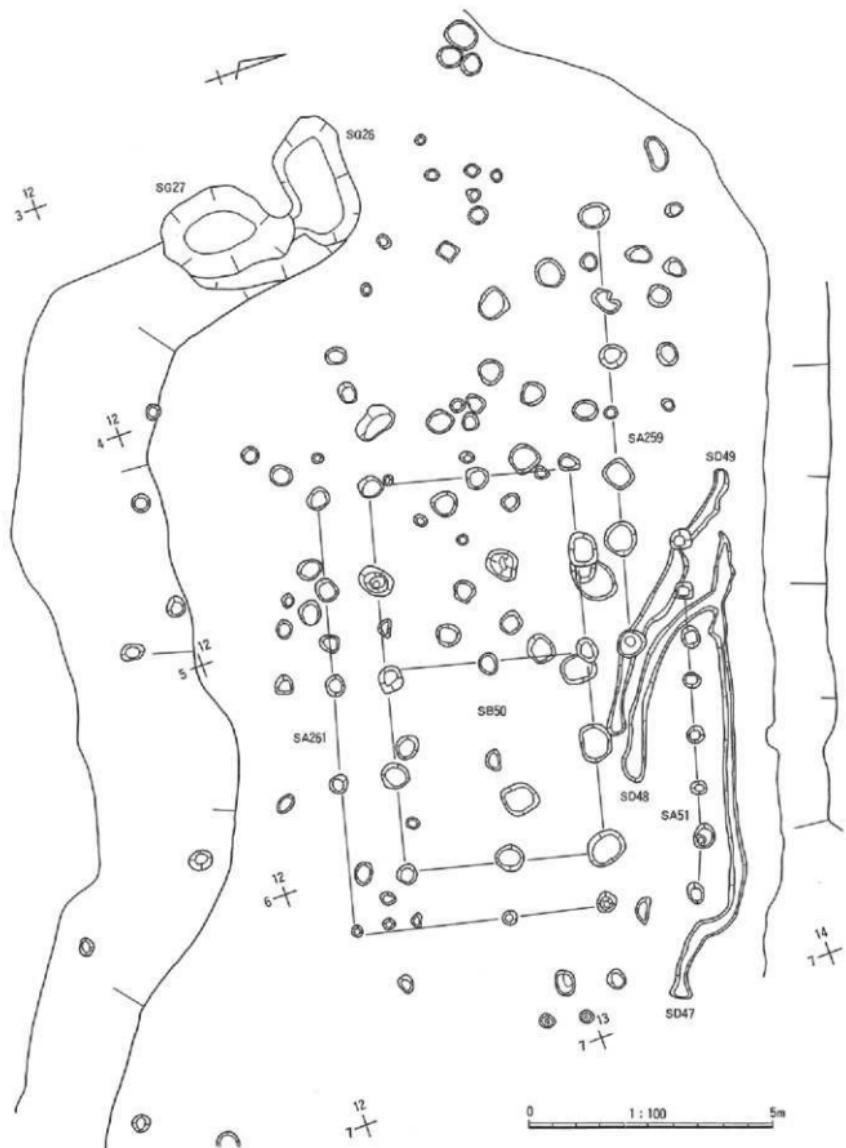
郭4の北東側に位置する。南北軸は、磁北から約2度東へ傾く。規模は、東西2間×南北5間で、東西に庇を持つ。南から2間目の所に、間仕切りの柱穴が1基認められる。柱間の距離は、東西が1.8m（西側）、2.1m（東側）南北が1.8~2.1mである。西面の庇は身舎から1.2m、東面は2.1m離れる。柱穴の検出に際しては、整地された部分について難航したが、周辺より風化礫の粒が幾分小さいことで判断された。柱穴の平面形は、径30~70cmの円形もしくは楕円形である。規模のばらつきは検出面の違いに起因するものである。E B 81、82、97~101は岩盤を掘りぬいたものである。柱穴の深さは、20~50cmを測る。覆土は2~4層からなり、微量の炭化物を含むのが特徴的である。柱穴からの出土遺物はほとんど見られないが、建物跡周辺から中世陶器の擂鉢が出土した他、E B 99から石臼（第12図18・図版10）が出土した。

S B 50 挖立柱建物跡（第9図）

郭3のはば中央に位置する。南北軸は、磁北から約18度西へ傾き、東西面が北側斜面と平行する関係にある。規模は東西4間×南北2間である。中央に間仕切りと考えられる柱穴が1基認められる。柱間の距離は、東西、南北とも2mを測る。柱穴の平面形は、径50~80cmの円形、もしくは楕円形である。深さは30~50cmで、覆土には炭化物を含む。下層のS T 150豎穴住居跡に達するものや、岩盤を掘込んだものも見られる。柱穴からの出土遺物はないが、周辺から青磁碗、香炉片等が出土している。またS B 50の内部や周辺には数多くの柱穴が検出されていることから、幾度か建て替えがあったものと考えられる。しかし現地調査ではこの1棟以外に確認することはできなかった。

S B 272 挖立柱建物跡（第10図）

郭1の北東寄に位置する。南北軸は、磁北から約44度西へ傾く。規模は東西2間×南北3間である。柱間の距離は、東西が1.2m、南北が北から1.5m、1.7m、2.1mとばらつきがある。柱穴の平面形は、径50cm前後の円形もしくは隅丸方形に近い楕円形を呈する。深さは30cm前後で、覆土は微量の炭化物を含む單一層である。S B 1の確認面から約20cm掘り下げた面で検出した。柱穴並びにその周辺からも、出土遺物は見られない。



第4図 郭3造構配置図

3 檻（柱）列

S A29柱列（第5図）

S B30の西面及び南面に位置する。西面には建物跡から1.2m離れて11本の柱穴が並ぶ。その配置は、建物跡1間のはば中央に1基の柱穴がくることにより、柱穴3基で建物跡の1間分を構成する。柱間の距離は1~1.2mであるが、南端部のみ2mを測る。柱穴の平面形は、径30cm前後の円形であるが、10cm程掘り下げたところから一辺18cmの方形になる。いずれも岩盤を垂直に近い角度で掘込んである。柱列は南端部から東へ直角に折れ、さらに3基の柱穴が延びる。なおSD32溝跡が平行する位置関係にあることからS A29柱列とは同時期と考えられ、なおかつ一連の遺構であると推測される。

S A51柱列（第4図）

S B50の北面に位置し、平行関係にある。S B50からは2mの距離をもつ。柱穴は計8基である。配置並びに構造は、柱穴3基で建物跡の1間を構成する点や、円形の平面形から一辺18cmの方形の掘込みになる点、さらには岩盤を掘込んでいる点、平行する溝跡（SD47）などSA29に極めて類似する。これらのことからS A29と同時期の所産と考えられる。

S A147柵列（第3図）

郭4の西側尾根筋から郭4を取り囲むように連なる柱列である。標高では186mから194mに至る範囲で検出されたが、尾根筋は202mまで達することから、さらに延びるものと推測される。検出した柱穴は43基、総延長は89mにおよぶ。柱穴の平面形は、径40~50cmの円形が主体である。柱間の距離は疎のところで3m、密のところで2mが平均的である。標高193mの尾根筋が平坦な地点では柱穴が特に密で、約1m間隔で設けられている。更にこの地点では、柱列が12mにわたって1m程西へ張り出し、何らかの施設があった可能性を示唆している。これらの柱列は尾根筋に設けられた柵列と考えられる。

S A186柵列（第3図）

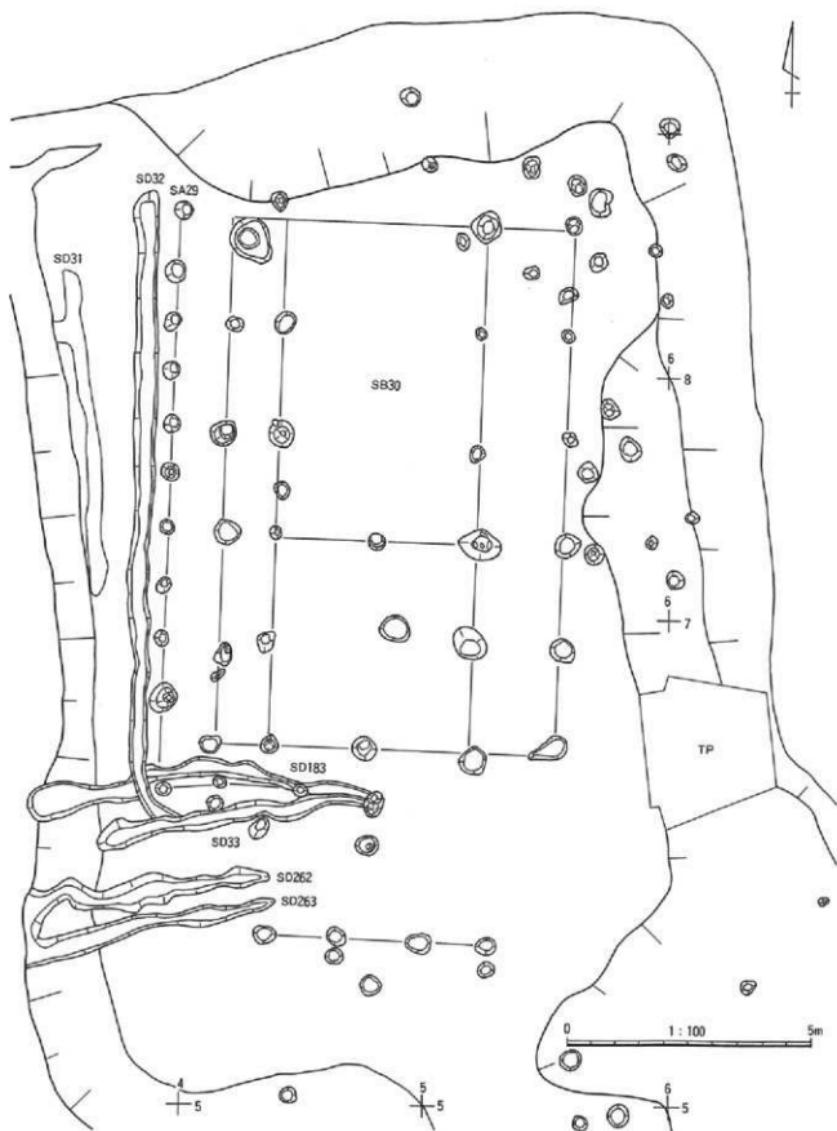
郭1の下部から郭2へ至る柱列である。検出した柱穴は11基、総延長32.5mである。柱穴の平面形は、径50cm前後の円形もしくは梢円形である。柱間の距離は変換点で2.5m、その他は4mを測る。SA147と同じ性格と考えられる。

S A259柱列（第4図）

S B50の北面に位置する。S B50からは1mの距離をもつ。柱穴は計7基である。柱間の距離は1.1~2mで、ばらつきが見られる。柱穴の平面形も径30~70cmの円形や不整形で、SA29、51に見られたような規則性が感じられない。S B50とは平行関係にあるが、配置がずれていることもあり同時期の所産ではない可能性がある。

S A261柱列（第4図）

S B50の南面と東面を覆うような位置にある。S B50からは両面とも1.1mの距離をもつ。柱穴は南面に5基、東面に2基の計7基である。柱間の距離は南東の角から各1本目までが3m、他は2m等間である。柱穴の平面形は径30~50cmの円形である。柱の並びや位置関係もS B50に則していることから、S B50と同時期の所産と考えられる。



第5図 郭4構造配置図

4 溝 跡

S D31溝跡（第5図）

郭4西端部にあり、西側斜面に平行する。長さ6.7m、幅20~30cm、深さは2cm前後である。覆土は多量の炭化物からなる。溝跡と呼べるほど明瞭な掘込みは無く、むしろ炭化物の広がりが土圧によって押された状況である。S A29やS B30に関連するものと考えられるが、その性格は不明である。一方、類似するものとして郭3の北側斜面際にも炭化物と焼土を含む溝状の広がりが約7mにわたって検出された。同じくS A51やS B50に関連するものと考えられる。

S D32溝跡（第5図）

郭4西側にあり、S A29から50cm離れたところを平行する。岩盤上を掘込んだものである。長さ12.4m、幅40~50cm、深さ5cm前後である。断面は浅い「U」字状を呈し、底面には小さな凹凸が見られる。S D33によって壊されているが、南端でS A29を囲むようにほぼ直角に曲がるものと推測される。出土遺物はない。

S D47溝跡（第4図）

郭3北側にあり、S A51から50cm離れたところを平行する。形状はS D32に類似する。長さ9.2m、幅20~30cm、深さ5cm前後である。S A51に沿って東側で屈曲する。出土遺物はない。

S D48・49（第4図）

郭3北側に位置し、2条がほぼ平行する。S D48の長さは4.5m、幅28~50cm、S D49の長さは6m、幅26~48cmである。深さは2条とも10cm前後であるが、北側が浅く南側が深くなる。

S D33・183・262・263溝跡（第5図）

郭4南側にあり西側斜面上から続く東西の溝である。人為的に掘込まれたものではなく、雨水の流れ込みによりえぐられたものと考えられる。

5 土 壕

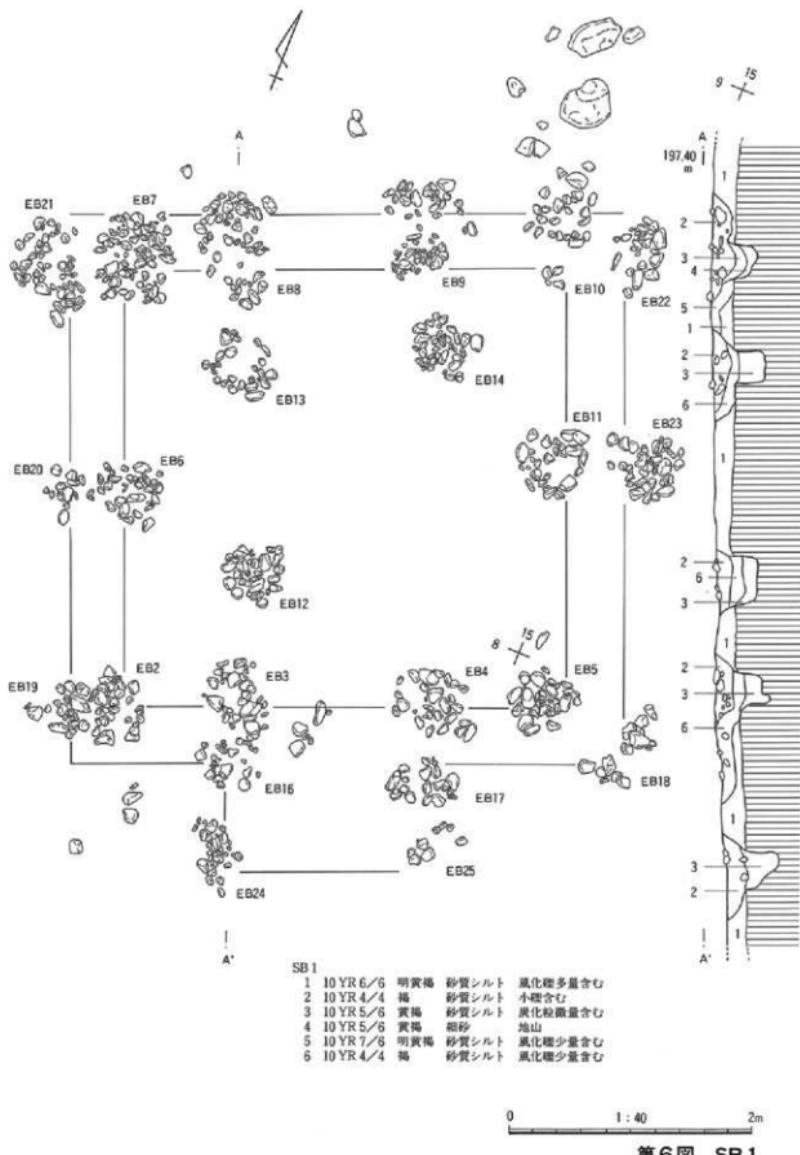
S F239土壘は調査区北端部、郭2の北に位置する。規模は、長さ16m、基底部幅5m、上部幅1m、高さ1.3mである。傾斜角は約30度である。基本的な盛土の層序は5層で、粘性のあるシルトの上に軟質の岩粒を含む砂質のシルトを繰り返し積み上げ構築している。

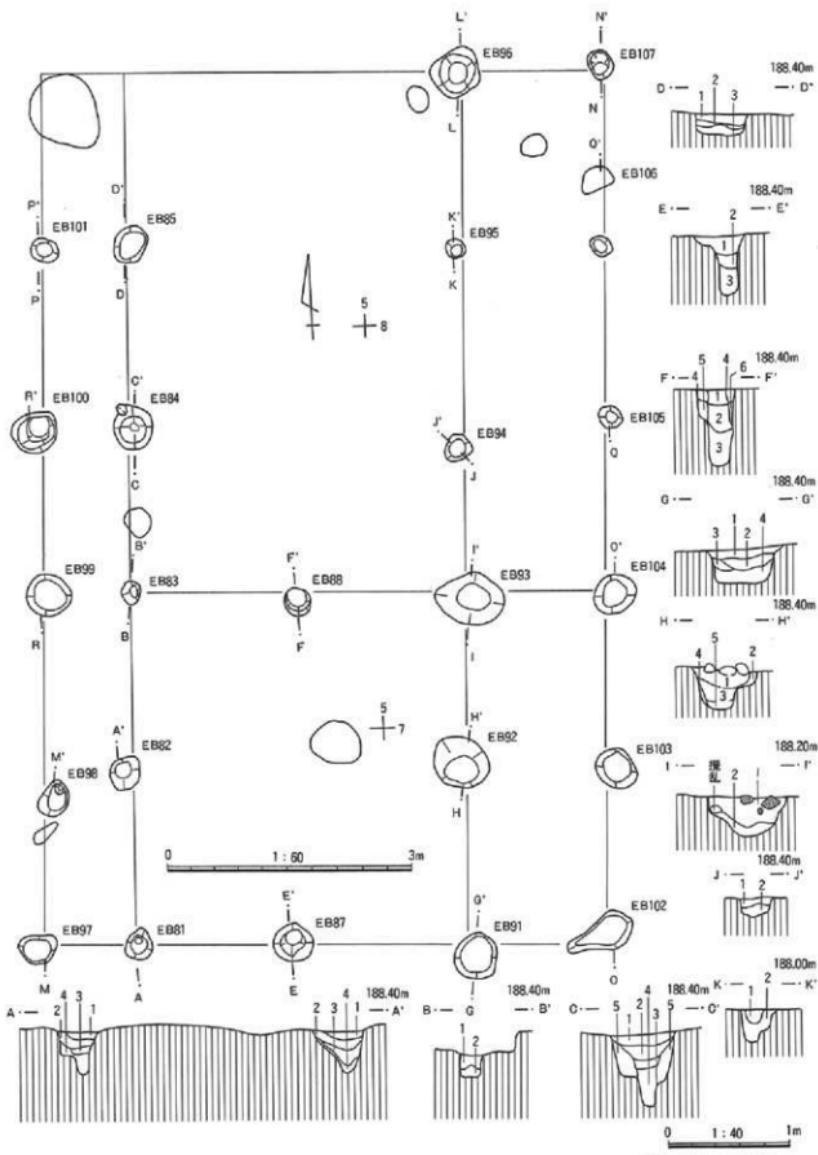
6 堀 切

S F239の北に位置する。北に延びる尾根筋を切ったものである。長さ18m、底面幅70cm、土壘の高さ上での幅4.2m、大きく開いた「U」字形を呈する。なお調査区外であるが、この尾根筋を登り切った西60mところにも堀切が確認される。（第2図）

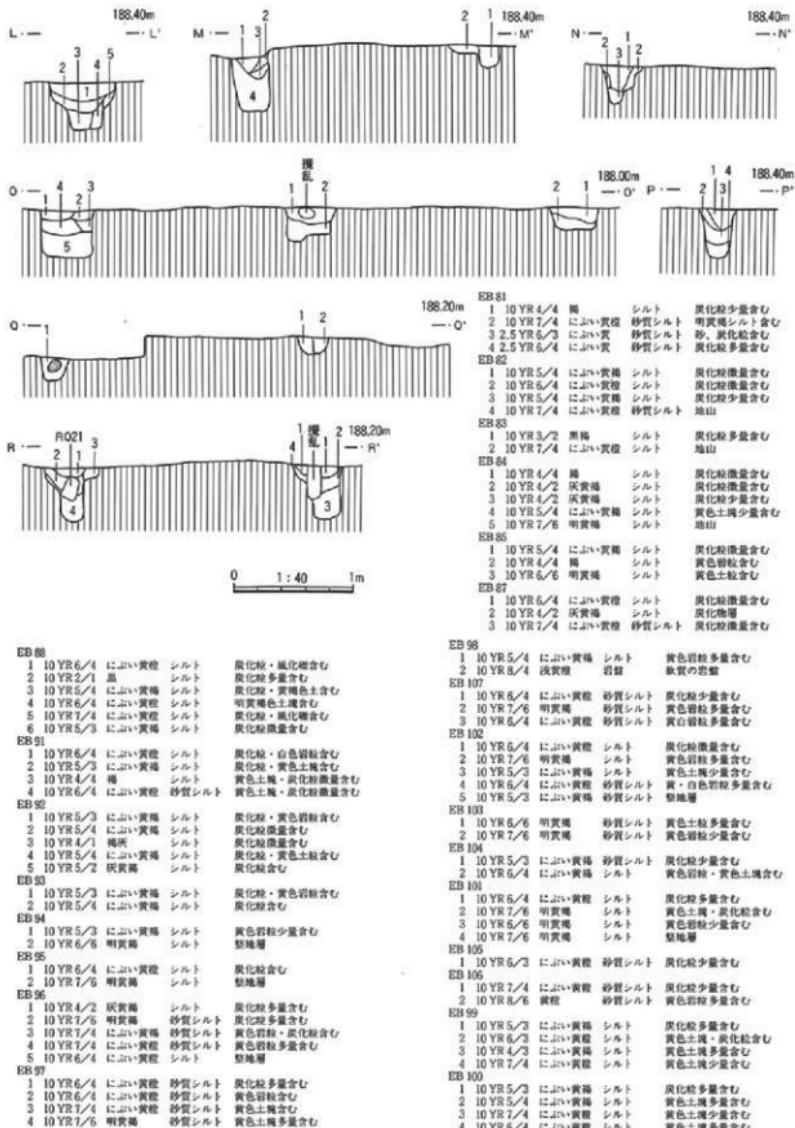
7 その他の遺構

郭2の西端にS G26・27については、調査前から壅んでおり、当初は井戸跡として登録されたものである。長軸2.5m、端軸1.4~1.8mの楕円形を呈する。深さは80cm前後を測る。遺構内と周辺から須恵器、赤焼土器が出土している。性格は不明である。

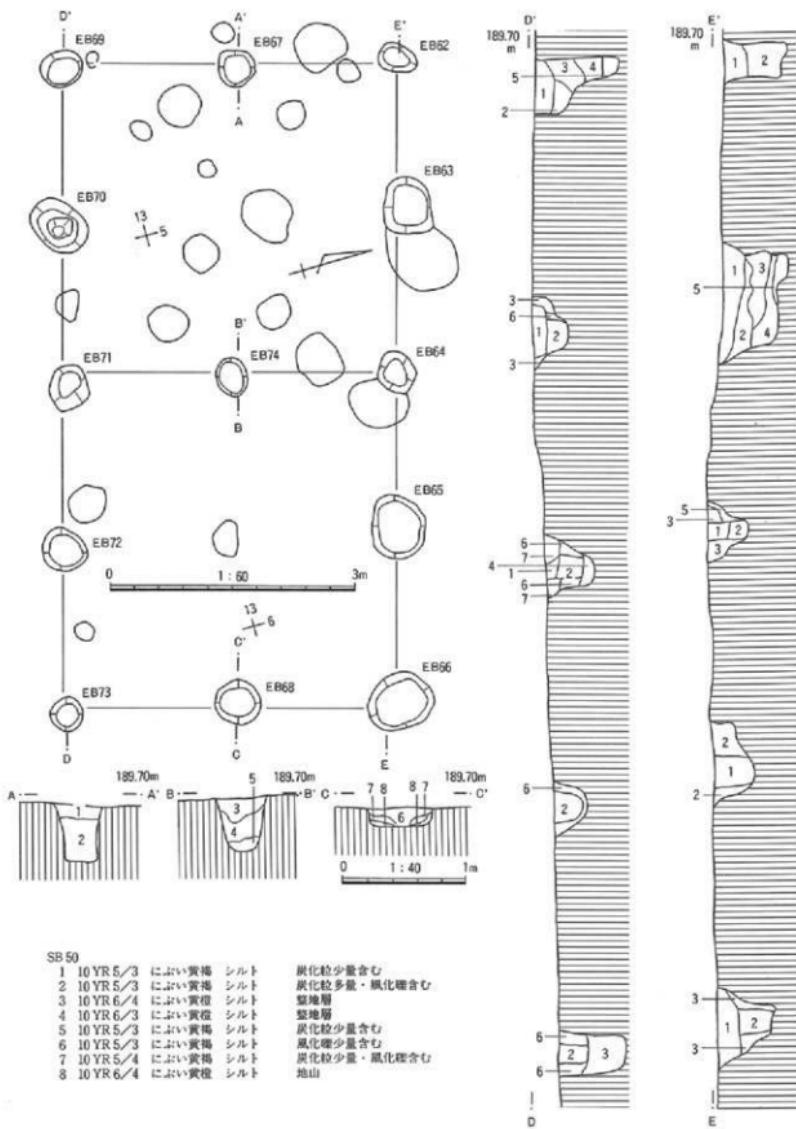


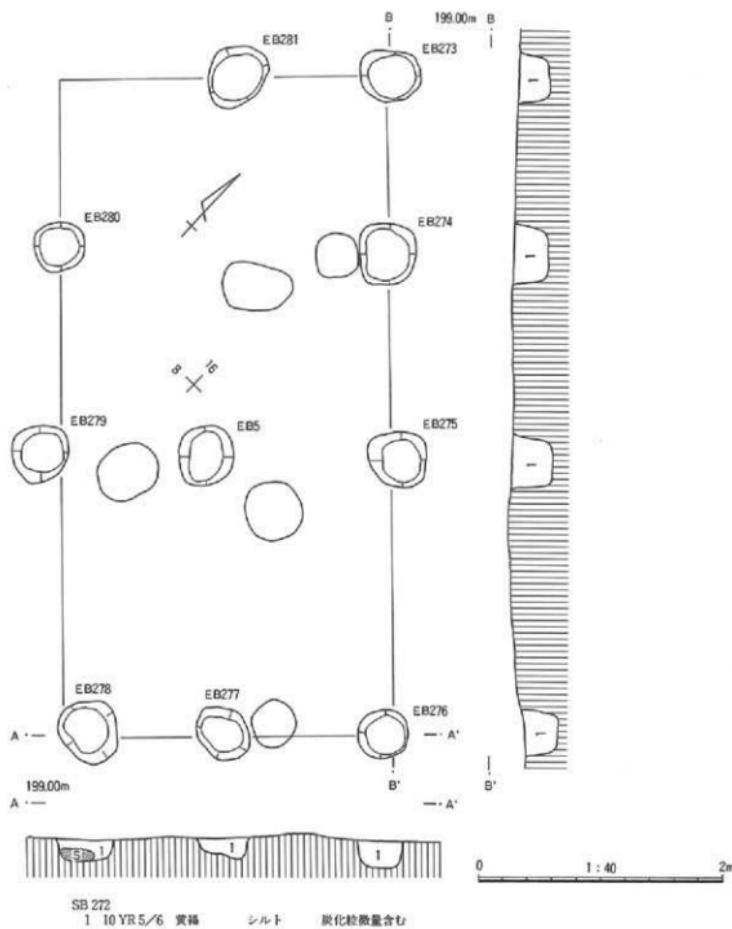


第7図 SB30



第8図 SB30土層断面図





第10図 SB272

8 遺 物（第12図）

かわらけ（第12図1）

かわらけは団化した1点のみの出土である。やや丸みをもつ体部上半から直線的な口縁部に至る。内面は横方向のナデ、外面には不規則なナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内面が灰色、外面が赤褐色である。

須恵器系陶器（第12図2～5）

須恵器系陶器は、団化した4点の他に7点出土している。いずれも鉢で、個体数は2個体と考えられる。2と4は同一の個体である。体部は直線的に開き、内傾する口縁端部には櫛描きの波状文が施される。内面に2.5cm幅で9本のやや細い卸し目が入れられる。外面はロクロナデである。胎土には粗砂と小礫を含む。焼成は良好である。3は片口の一部が認められる。口縁部がわずかに内湾し、内傾する端部には櫛描きの波状文が施される。卸し目の本数は不明である。胎土には粗砂を混入する。焼成は良好である。5は底部資料である。底部は静止糸切り、内面には、幅2.5cmで9本の卸し目が隙間なく施される。内外面とも焼成時のものと考えられる小さなひびが多く見られ、粗雑な印象を与える。胎土には小礫を含む。焼成は良好である。

瀬戸（第12図16・17）

団化した2点のみの出土である。この2点とも灰釉の筒形容器で同一個体と考えられる。16は口縁部内面に1状の沈線がみられる。釉の色調は茶黄に発色し、外面は全面に、内面は口縁部にのみ施釉される。全体に細かい貫入がみられる。胎土は灰黄で緻密。焼成は良好である。17は回転糸切りの底部で、断面逆台形の高台が付けられたものである。高台は、ケズリ調整が施される。底部内外面とも露胎であるが、外面には釉垂れ、内面には灰かぶりがみられる。体部と底部には漆による接合痕が認められる。胎土は灰黄で緻密。焼成は良好である。

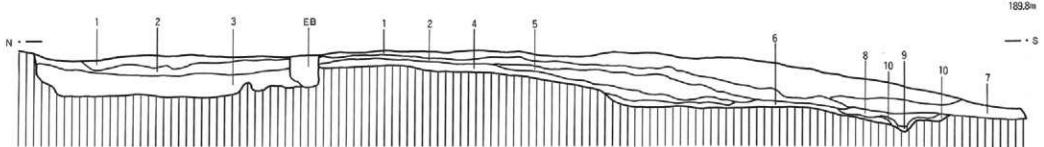
青磁（第12図6～15）

10点の出土のうち8と9、14と15は同一個体と考えられることから、個体数は8点である。6は端部が小さな玉縁状に引き出された碗の口縁部である。釉は薄く、白濁し、大きめの貫入が認められる。胎土は灰白である。7は無文碗の体部である。釉はわずかに白濁し、大きめの貫入が入る。胎土は白である。8も無文碗の体部である。釉はわずかに白濁し、不規則で大きめの貫入が入る。胎土は灰白である。11は碗の底部である。釉は薄く、白濁し細かい貫入が見られる。高台内は露胎である。胎土は褐色である。12は無文碗の体部である。釉は比較的厚く、不規則で大きめの貫入が認められる。胎土は白である。8と9は香炉の体部片である。外面には厚く釉がかかり、内面は下半が露胎である。8は体部中位と思われる。横方向のケズリにより隆帯を作り出している。9は下方が屈曲することから、腰部と考えられる。13～15は口縁部で大きく屈曲し、内面に細い蓮弁状のくぼみを施した盤である。わずかに白濁する。13は大きな貫入が見られ、胎土は灰白である。14・15は細かい貫入が見られ、胎土は灰色である。

その他の遺物

石製品では石臼、磁石がある。第12図18の上臼は火熱を受けており、側面すべて剥落している。他に下臼片が出土している。古銭は22点で、その多くは郭1からの出土である。

郭3整地層



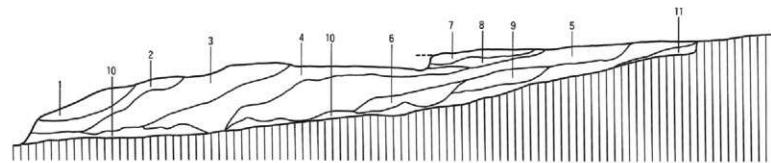
- 郭3 整地層
 1. 10 YR 6/4 に由い黄褐色 砂質シルト 塩化物少量・10mm大の風化粒多量含む
 2. 10 YR 5/2 黄褐色 砂質シルト 塩化物少量・40~70mm大の風化粒多量含む
 3. 10 YR 3/2 灰褐色 シルト ST 150mm覆土
 4. 10 YR 5/2 に由い黄褐色 シルト 塩化物微量含む
 5. 10 YR 6/4 に由い黄褐色 砂質シルト 塩化物微量含む
 6. 10 YR 4/2 灰褐色 シルト 塩化物微量・10mm大の風化粒多量含む
 7. 10 YR 5/2 灰褐色 シルト 塩化物微量・10~20mm大の風化粒含む
 8. 10 YR 3/2 黑褐色 シルト 塩化物・土器片含む、強い粘質
 9. 10 YR 3/2 黑褐色 シルト 塩化物微量含む、強い粘質
 10. 10 YR 4/2 灰褐色 シルト 塩化物微量・風化粒含む、強い粘質

郭4整地層

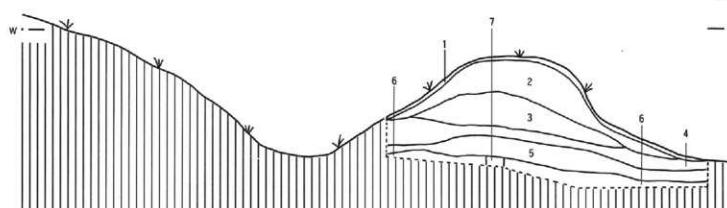
郭4 整地層

- 郭4 整地層
 1. 10 YR 6/4 に由い黄褐色 砂質シルト 5mm大の風化粒多量含む
 2. 10 YR 5/2 に由い黄褐色 砂質シルト 20~40mm大の風化粒多量含む
 3. 10 YR 3/2 淡灰褐色 砂質シルト 50mm前後の風化粒多量含む
 4. 10 YR 5/2 灰褐色 砂質シルト 50mm前後の風化粒多量含む
 5. 10 YR 6/4 に由い黄褐色 砂質シルト 10~30mm大の風化粒多量含む
 6. 10 YR 7/6 に由い黄褐色 砂質シルト 10~30mm大の風化粒多量含む
 7. 10 YR 5/2 に由い灰褐色 砂質シルト 10~30mm大の風化粒多量含む
 8. 10 YR 5/2 淡灰褐色 砂質シルト 5mm前後の風化粒多量含む
 9. 10 YR 5/3 に由い黄褐色 シルト 5mm前後の風化粒多量含む
 10. 10 YR 4/2 灰褐色 シルト 風化粒少量・土器片含む
 11. 10 YR 7/6 明灰褐色 シルト 風化粒微量含む・薄落土
 12. 10 YR 5/2 に由い黄褐色 シルト 風化粒微量含む・薄落土
 13. 10 YR 6/4 に由い黄褐色 砂質シルト 風化粒少量・風化粒多量含む

E • —



土壌

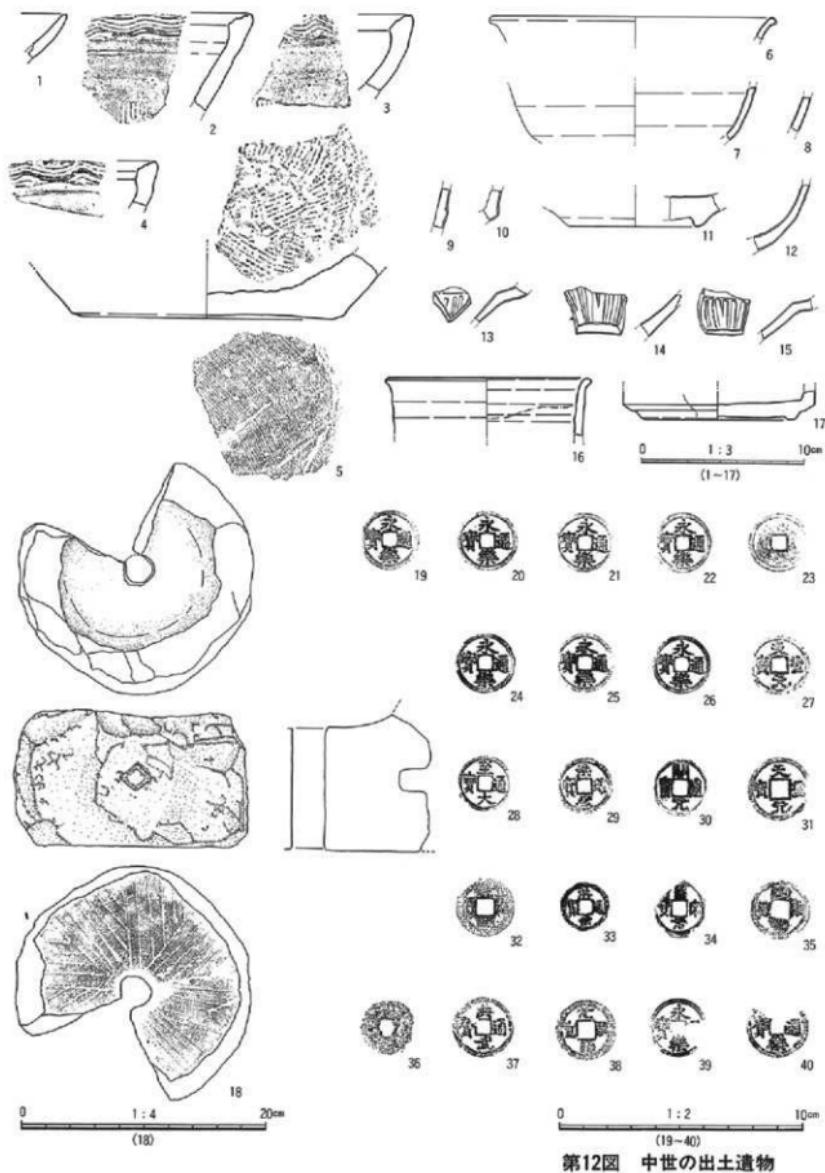


SF 239

- SF 239
 1. 黄褐色 シルト 風化した黄色岩粒・褐色シルト混含む
 2. 10 YR 7/6 淡灰褐色 シルト 塩素含有・弱い粘性
 3. 10 YR 6/4 に由い黄褐色 砂質シルト 塩素含有・弱い粘性
 4. 10 YR 7/3 に由い黄褐色 砂質シルト 塩化物・風化した黃色岩粒含む
 5. 10 YR 6/6 明灰褐色 砂質シルト 黃色岩粒・石英粒含む
 6. 10 YR 6/6 明灰褐色 シルト 5mm大の黄色土粒含む
 7. 10 YR 6/6 黄褐色 粘土 5~10mm大の風化した黄色土粒含む

0 1 : 50 6m

第11図 整地層・土壌層断面図



第12図 中世の出土遺物

IV 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 奈良・平安時代の遺構の分布

奈良・平安時代の遺構の分布には、2カ所の広がりが認められた（第13図）。一つは中世の面で郭3とした場所で、南西向きの斜面の比較的平坦な場所に竪穴住居跡が3棟確認され、住居跡の周囲には数基の土坑が分布し、斜面下の谷沿いには溝跡が確認されている。もう1カ所は、郭4とした場所の南側の尾根筋のやや平坦な場所で、竪穴住居跡が2棟確認されている。それぞれの場所の遺構は、中世に橋が造成された際に、上部を削平されている。

2 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、建て替えが行われたものも含めて5棟確認された。詳細については、24頁の表-1にまとめてあるので、住居跡の簡単な所見と、出土した遺物を中心に述べたい。

S T28 (遺構・第14図 遺物・第16図1~4)

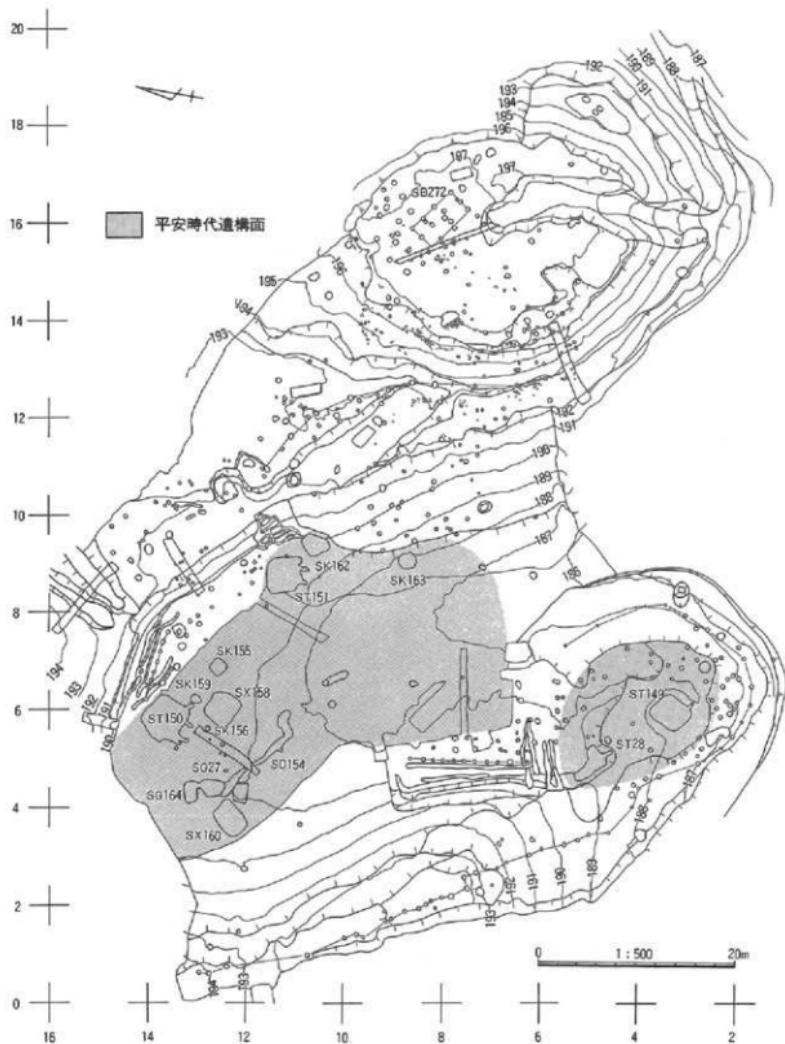
4・5・5・6 Gで検出された。平面形は、残っている部分については長辺3.6m、短辺2.5mの隅丸の長方形状であると推定されるが、住居の東・北辺部分にかけては中世の樋跡を造成する際に削平をうけている。壁は、西壁の方の立ち上がりはゆるやかで、南東壁の方は急である。床面までの深さは11~25cm程度である。柱穴は、E P 270の一基のみ検出された。床は、基盤の岩盤を掘り下げ床を貼っている。カマド（E L 168）は、住居の南壁西寄りに位置し、煙道部分は残りが良いが、カマド本体の遺存状態は良くない。

遺物は、カマド付近から小型の土師器壺（第16図1）が出土している。ハケメ調整が施され、底部には木葉痕が認められる。カマドからは、赤焼土器壺（同図2）、土師器瓶（同図3、4）が出土している。瓶は無底式で外面にタタキ痕が認められる。

S T149 (遺構・第15図 遺物・第16図5~14)

5・6・3・4 Gで検出された。平面形は、一辺3.2m~3.4m程度の隅丸の歪んだ方形である。壁の立ち上がりは急で深さは約30cmを測る。柱穴は、E P 179、E P 180の2基が認められた。床面はほぼ平坦である。カマド（E L 169）は、住居の南壁西寄りに認められる。煙道部分は地山を掘り抜いてトンネル状になっており、本体は直径30cm程度の角礫を袖にしている。住居の東隅からは遺物がまとまって出土している。

須恵器壺（第16図5）は、底径が大きく形が逆台形状で、底部は回転ヘラ切りである。同図6~9は、土師器壺である。6（R P 49）は底部が上げ底気味で器高が低い。カマド覆土からの出土である。7（R P 45）は、やや底径が小さく直線的に立ち上がる。8、9（R P 46）は器高が低く、口縁部が内湾する。8の底部には木葉痕が認められる。10（R P 48）は赤焼土器壺である。底径が小さく体部から口縁にかけて直線的に立ち上がる器形である。11、12は土師器壺である。11（R P 46）は体部にハケメが施され、口縁が強く外反する。12（R P 46）は体部が丸く膨らみ、口縁が緩やかに外反する。内面に板状の工具による調整が認められる。13（R P 34）は土師器鉢で床面出土である。底部に木葉痕が認められる。14（R P 49）はカマド出土



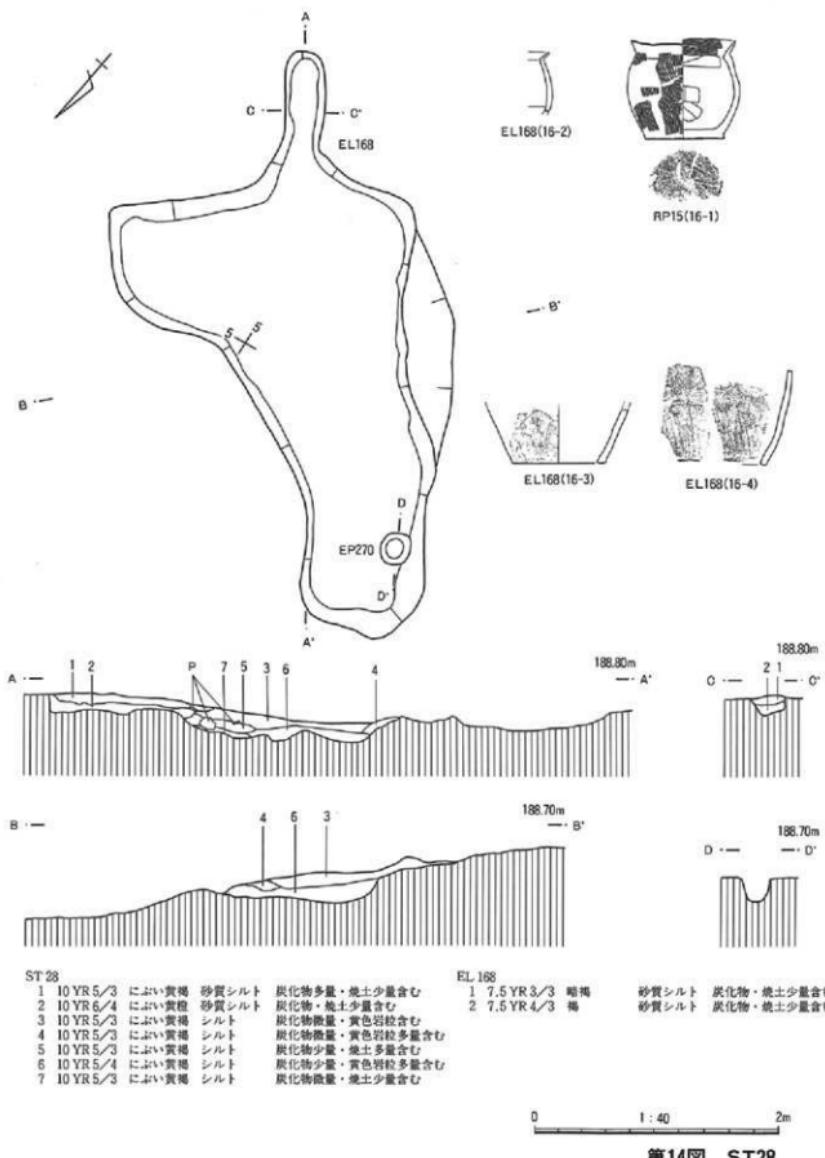
第13図 遺構配置図（平安）

表-1 遺構観察表 (S T)

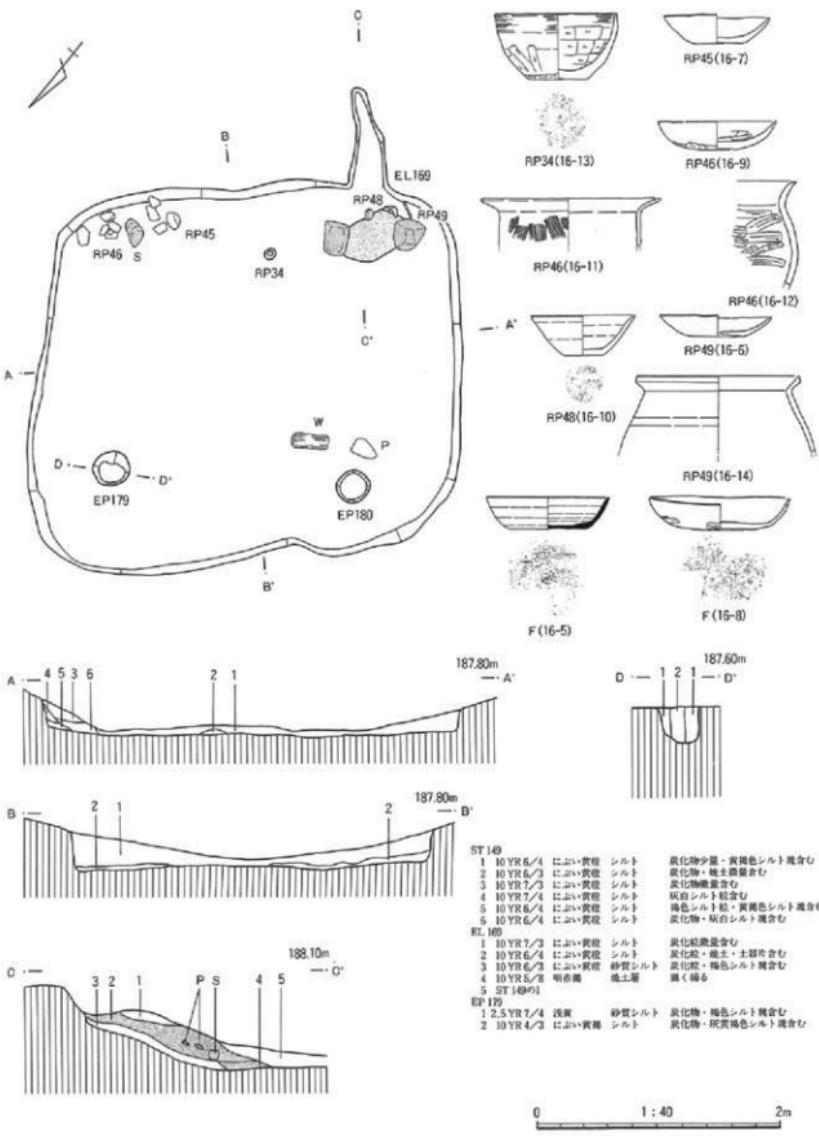
遺構番号	S T28	S T149	S T150 a	S T150 b	S T151
押図番号	14	15	17	17	22
位置 (グリッド)	4・5・5・6	5・6・3・4	5・6・14・15	5・14・15	8・9・11・12
規模 (cm)	東西250 南北360	東西340 南北320	東西330 南北330	東西不明 南北310	東西350 南北360
平面形	隅丸の長方形	隅丸の歪んだ方形	隅丸の歪んだ方形	隅丸の歪んだ方形	隅丸の歪んだ方形
主軸方向	N-42°-W	N-41°-W	N-18°-E	N-42°-E	N-10°-W
遺存状態	不良	不良	良	やや良	良
確認面からの深さ (cm)	10~25	10~33	20~55	20~30	30~70
壁の立ち上がり	西壁緩やか南東壁 急	急	急	急	急、北壁・西壁は 二段になる
床面状況	起伏あり	ほぼ平坦	ほぼ平坦	ほぼ平坦	ほぼ平坦
柱穴	1基	2基	5基	5基	2基
カマド	E L168	E L169	E L165+172	E L166+167	E L157+161
重複関係	なし	なし	ST150 b→ST150 a	ST150 b→ST150 a	なし
備考	西・北辺部は削平 され残存せず	住居西隅から遺物 が一括出土	住居中央部に焼土 塊と炭化物		北東隅に住居内土 坑 (直徑約90cm)

表-2 遺構観察表 (E L)

遺構番号	E L157	E L161	E L165	E L166	E L167	E L168	E L169	E L172
押図番号	22	22	17	17	17	14	15	17
位置 (住居内)	ST151の 南壁東寄	ST151の 南壁西寄	ST150 aの 北壁隅	ST150 bの 北壁西寄	ST150 bの 北壁西寄	ST28の 南壁西寄	ST149の 南壁西寄	ST150 aの 北壁東寄
住居主軸に対する 傾れ	9°-E	20°-E	65°-E	27°-E	9°-E	3°-E	4°-E	5°-E
遺存状態	やや不良	不良	良	やや良	不良	不良	やや不良	不良
煙道長 (cm)	110	80	74	200	84	110	84	104
本体長 (cm)	103	40	102	76		60	64	78
幅 (cm)	96	100	90	102			82	68
袖部	壁面から80 cm張り出す 北側に袖石	壁面から 60cm張り 出す	南東部に 袖石	壁面から 40cm張り 出す		袖石あり	両側に袖石	袖石あり
焼土	燃焼部～煙道	燃焼部～煙道	燃焼部	燃焼部～煙道	煙道	燃焼部	燃焼部	燃焼部～煙道
支脚	なし	なし	あり	なし	不明	なし	なし	なし
備考	煙道先端に 赤燒土器 (RP24) を埋設	煙道から 赤燒土器 (RP29) 出土	E L172→ E L165	E L167→ E L166	E L167→ E L166			E L172→ E L165



第14図 ST28



第15図 ST149



第16図 ST28・149出土遺物

の赤焼土器壺である。

S T 150 a、150 b（遺構・第17、18図 遺物・第19～21図）

5・6・14・15Gで検出された。建て替えが行われたと考えられ、新しい段階の住居をS T 150 a、古い段階の住居をS T 150 bとする。

S T 150 aの平面形は、一辺約3.3mの隅丸の歪んだ方形と推定される。住居跡の平面は、北東、北西、南西側でははっきりしているが、南東側は不明である。確認面からの深さは、20～55cmである。カマドは、E L 165、E L 172が伴うと考えられる。E L 165は、直径10～20cm程度の角礫で袖が補強され、カマド内からは完形に近い2個体の壺、R P 33、R P 50（カマドの支脚と考えられる）が出土している。カマドのなかでは最も遺存状態が良く、遺物の出土が多い。E L 172は、E L 165に一部を切られる。壊されているため、袖の一部分と考えられる礫が残存するのみである。

S T 150 bの平面形は、一辺約3.1mの隅丸の歪んだ方形と推定される。住居跡の南東、北東側の広がりは確認できるが、南東、北西側の広がりは不明瞭である。しかし、S T 150 aの南西、北西辺の内側に一段落ち込むプランが認められるので、これがS T 150 bのプランになる可能性がある。床面からの壁の高さは、20～30cm程度である。カマドは、E L 166、E L 167が伴うと考えられる。E L 166は煙道部分の長さは2.0mに及ぶ。E L 167はE L 166に切られ、煙道部分のみが残る。

両方の住居跡からは、ピットが5基検出されているが、柱穴と考えるものは、E P 175、E P 176の2基で、他は浅く柱穴とは考えられない。住居跡の中央部分には、炭化材と焼土の広がりが認められた。両方の住居跡は、共に西側部分は、基盤の岩盤を掘り込んでいる。

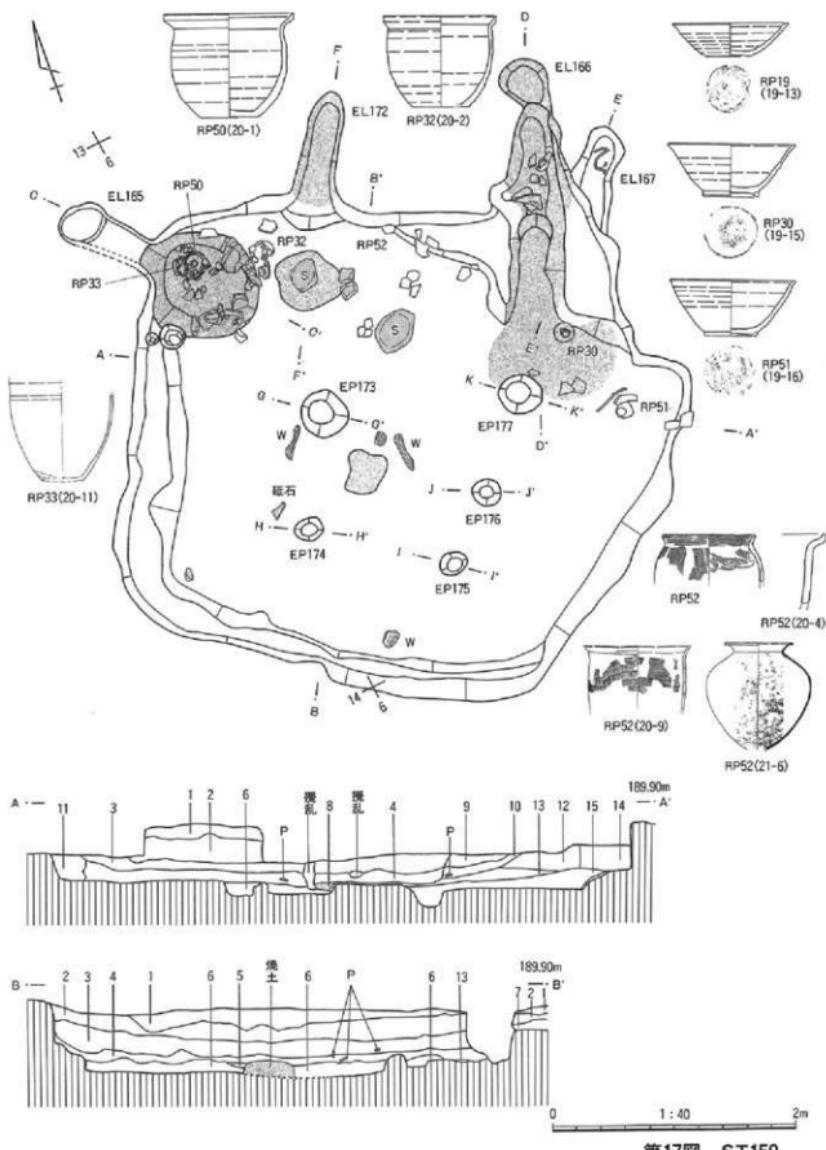
遺物であるが、第19図1～6は須恵器壺である。いずれも底部は回転糸切りである。1はE L 165から出土した。5は底径が小さい。6は、体部から口縁にかけてゆるやかに内湾する。7～9は須恵器高台付壺である。7は、底径が小さく高台は低い。8は器高が高く内湾気味に立ち上がる。9は転用碗である。10は須恵器蓋で、天井は回転糸切りでツマミはなく、内面の縁辺に浅い溝がまわる。11は焼き台と考えられる。内外面に重ね焼きを行った痕跡が認められる。米沢市大神窯跡（手塚：1998）から類似する焼き台が出土している。12～14は赤焼土器壺である。底部はいずれも小さい。12はE L 172からの出土である。15（R P 30）、16（R P 51）は赤焼土器高台付壺で床面出土である。器高が高く、底径は小さく、高台が低い。第20図1～3、5、7は中型の赤焼土器壺である。底部は回転糸切りである。1（R P 50）、2（R P 32）は、E L 165内から出土し、1は二次加熱を受けてもらくなっている。2は加熱の痕跡は認められない。第20図4（R P 52）、6、10～12、第21図1、2は、比較的大型になる赤焼土器壺である。第21図1は口縁が短く外反し体部は丸く膨らむが、他は長胴になる。4（R P 52）は床面出土である。6はE L 166からの出土である。口縁端部が幅広になる。11（R P 33）はE L 165から、ちょうど1の上に重なって出土した。二次加熱を受けてかなり器面が荒れている。体部の下はケズリ調整を受け、底は丸底状になる。12は、ロクロ調整の後に外面の体部下半をケズリ調整している。二次加熱の痕跡が認められる。第20図8（R P 52）、9（R P 52）は土

師器壺である。共に床面からの出土である。内外面にハケメが施される。第21図6（R P 52）、7は須恵器壺であり、E L166から破片が出土している。グリット出土のものとも接合している。外面には平行タタキ目痕が、内面には同心円状アテ痕が認められる。3は赤焼土器壺で、E L172から出土した。4は赤焼土器壺と考えられるが、器面の剥落が激しく調整は不明である。E L165からの出土である。この他石製品として、床面付近から砥石（第21図5）が出土している。

S T151（遺構・第22図 遺物・第23～25図1～4）

8・9・11・12Gで検出された。平面形は、一辺約3.6mの隅丸の歪んだ方形である。壁の立ち上がりは急であり、深さは30～70cmである。柱穴は、E P 178、E P 181の2基が認められた。住居跡内には、E K171、E K184の2つの土壙が認められる。E K171付近からは遺物の出土が多く、貯蔵穴として用いられていた可能性がある。カマドはE L157、E L161の2基が認められた。E L157は煙道の先端部分に赤焼土器壺（R P 24）が埋設される。カマドの袖は、20～30cm大の角礫や円礫を弧状に並べて補強されている。E L161は遺存状態が良くないことから、E L157よりも古い可能性がある。煙道部分から赤焼土器壺（R P 29）が出土している。

出土遺物であるが、第23図1～7は須恵器壺である。いずれも底部は回転糸切りである。1は比較的底径が大きく、形が逆台形に近いものである。2～4、6は、底径はやや小さく、体部は直線的に外反する。4（R P 38）は床面出土である。5、7、9は、底径が小さいものである。5（R P 39）は床面出土である。10（R P 26）、11（R P 26、39）は須恵器高台付壺で、床面出土である。器高が高く、底径が小さく、ロクロ目が目立つ。12（R P 38）は床面出土の赤焼土器高台付壺であるが、作りは須恵器の高台付壺と同じである。13は須恵器壺と考えられるが、口縁端部が外側に屈曲する。14～19は須恵器蓋である。15（R P 25）、16、17、19は天井部は回転ヘラ削り調整である。14は、縁辺が低くつぶれた形になる蓋である。18は天井部が屈曲なく丸くなり、口縁端部が直立する蓋である。ツマミのある蓋は、ツマミの内側がくぼみ、口縁端部は内側に折れる。第24図1、3～5は小～中型の赤焼土器壺である。底部はいづれも回転糸切りである。1、5は床面出土である。3（R P 40）の外面には煤が付着し、二次加熱の痕跡が認められる。5にも二次加熱の痕跡が認められる。4（R P 25）は小型の赤焼土器壺であり、E L161の出土である。第24図2（R P 47）は土師器壺であり、内外面にハケメが施され、底部にはムシロ状の編み物の圧痕が認められる。床面出土である。6は赤焼土器壺で、体部がやや膨らむ器形である。内外面にカキメが認められ、外面はカキメ調整を行った後にケズリを施す。E L157から出土した。第24図7、8、第25図1、2は大型になる赤焼土器の長胴の壺である。第24図7、8（R P 29）は同一個体と考えられ、E L161の煙道部分から出土したものである。二次加熱が認められる。内面にはカキメとハケメが、外面の体部下半にはケズリが施される。第25図1（R P 24）はE L157の煙道部先端から出土した。二次加熱が認められる。第25図2（R P 27、28）はE K171付近の床面から一括出土し、二次加熱の痕跡が認められる。内外面にカキメを施した後、外面にはケズリ調整が施され、内面にはヘラ状工具によるナデが施される。その他、器種は不明であるが、赤焼土器の脚部（第25図3、4）が2点

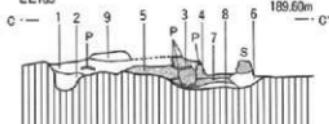


第17図 ST150

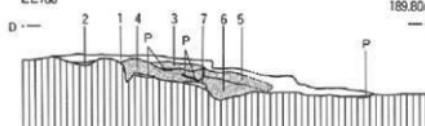
ST 150

1	10 YR 5/4	にじい黄褐色	砂質シルト	炭化粧少量
2	10 YR 5/4	にじい黄褐色	砂質シルト	炭化粧少量、30~70mmの炭化粧含む(埴地層)
3	10 YR 3/3	暗褐色	シルト	炭化粧・土器片・明褐色土塊含む
4	10 YR 3/3	暗褐色	シルト	炭化粧・土器片含む
5	10 YR 3/2	暗褐色	シルト	炭化粧・シルト粘土含む
6	10 YR 5/4	にじい黄褐色	シルト	炭化粧・焼土粒少含む
7	10 YR 5/4	にじい黄褐色	シルト	炭化粧微量・土器片含む(埴地層)
8	10 YR 3/3	暗褐色	シルト	埴地層
9	10 YR 5/4	にじい黄褐色	シルト	炭化粧・焼土粒少含む
10	10 YR 4/4	暗褐色	シルト	炭化粧・焼土塊・土器片含む
11	10 YR 4/3	にじい黄褐色	シルト	炭化粧・焼土塊・土器片含む
12	10 YR 4/3	にじい黄褐色	シルト	炭化粧・焼土塊・土器片含む
13	10 YR 5/3	にじい黄褐色	シルト	炭化粧・焼土粒少含む
14	10 YR 6/4	にじい黄褐色	シルト	5~20mmの黄色羽状含む
15	10 YR 5/4	にじい黄褐色	砂質シルト	5~20mmの炭化粧・焼土粒含む

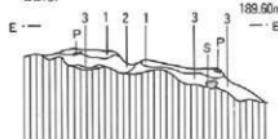
EL 165



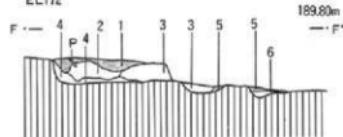
EL 166



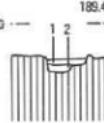
EL 167



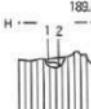
EL 172



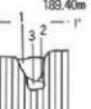
EP 173



EP 174



EP 175



EP 176



EP 177



EL 165

1	7.5 YR 3/3	暗褐色	砂質シルト	炭化物・焼土粒少含む
2	7.5 YR 4/3	褐	砂質シルト	炭化物・焼土粒・土器片含む
3	7.5 YR 4/4	褐	砂質シルト	炭化物・焼土粒・灰少含む
4	5 YR 6/8	褐	シルト	炭化物を微含む焼土層
5	5 YR 4/4	にじい赤褐色	シルト	埴土粒多量・炭化粧少含む
6	7.5 YR 3/4	暗褐色	砂質シルト	炭化物・焼土粒少含む
7	5 YR 3/3	明褐色	シルト	埴土粒多量・炭化粧少含む
8	5 YR 3/3	にじい水褐色	シルト	埴土粒少含む
9	10 YR 6/6	にじい黄褐色	砂質シルト	炭化物微含む

EL 166

1	7.5 YR 4/2	褐	シルト	炭化粧微量・焼土粒少含む
2	7.5 YR 4/6	褐	シルト	炭化粧・焼土粒・土器片含む
3	7.5 YR 4/3	褐	シルト	埴土粒多量・炭化粧微量含む
4	7.5 YR 4/3	褐	シルト	炭化粧・焼土粒少含む
5	7.5 YR 4/6	褐	シルト	炭化粧・焼土粒少含む
6	10 YR 6/6	黄褐色	シルト	炭化粧微量含む・焼土層

EL 167

1	7.5 YR 4/2	灰褐色	シルト	炭化粧・焼土粒少含む
2	10 YR 5/4	にじい黄褐色	シルト	炭化粧・黄褐色岩粉少含む
3	10 YR 5/2	灰褐色	シルト	炭化粧・焼土粒少含む
4	10 YR 4/2	にじい黄褐色	シルト	炭化粈・焼土粒少含む
5	5 YR 5/5	明褐色	砂質シルト	褐色土塊を微含む焼土層
6	10 YR 4/4	褐	砂質シルト	炭化粧微量含む

EL 172

1	10 YR 4/2	褐	シルト	埴土多量・炭化粧少含む
2	10 YR 5/3	にじい黄褐色	砂質シルト	黄褐色土塊含む
3	10 YR 5/3	にじい黄褐色	砂質シルト	炭化粈・黄褐色岩粉少含む
4	10 YR 5/3	にじい黄褐色	シルト	炭化粈・焼土粒少含む
5	5 YR 5/5	明褐色	砂質シルト	褐色土塊を微含む焼土層
6	10 YR 4/4	褐	砂質シルト	炭化粈微量含む

EP 173

1	10 YR 2/3	暗褐色	シルト	炭化粈・焼土粒少含む
2	10 YR 5/3	にじい黄褐色	砂質シルト	黄褐色土塊含む
3	10 YR 5/3	にじい黄褐色	砂質シルト	炭化粈・黄褐色土塊含む

EP 174

1	10 YR 4/3	にじい黄褐色	砂質シルト	炭化粈・焼土粒少含む
2	10 YR 4/3	にじい黄褐色	砂質シルト	炭化粈・黄褐色土塊含む
3	10 YR 5/3	にじい黄褐色	シルト	炭化粈・焼土粒少含む

EP 175

1	10 YR 5/4	にじい黄褐色	シルト	炭化粈・焼土粒少含む
2	10 YR 4/3	にじい黄褐色	シルト	炭化粈・黄褐色岩粉少含む
3	10 YR 5/3	にじい黄褐色	シルト	炭化粈・焼土粒少含む

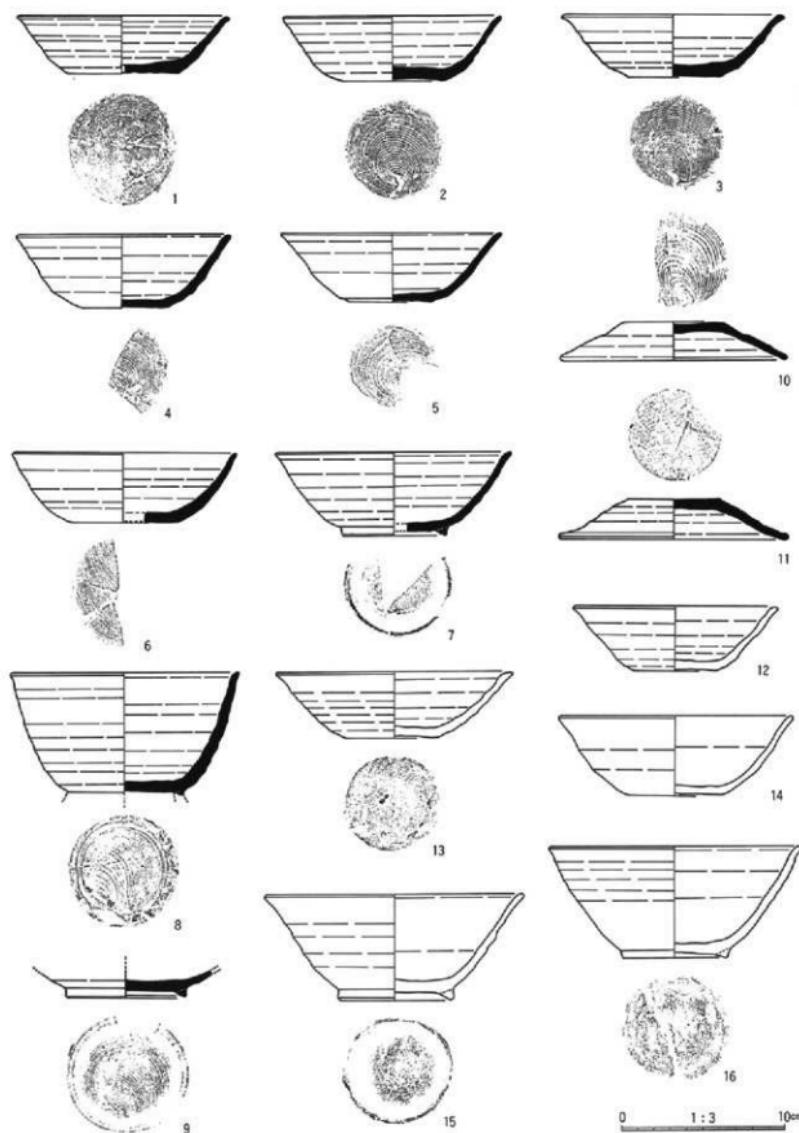
EP 176

1	10 YR 4/2	にじい黄褐色	砂質シルト	炭化粈・焼土粒少含む
2	10 YR 5/3	にじい黄褐色	シルト	炭化粈・土器片含む
3	10 YR 5/3	にじい黄褐色	シルト	炭化粈・土器片含む

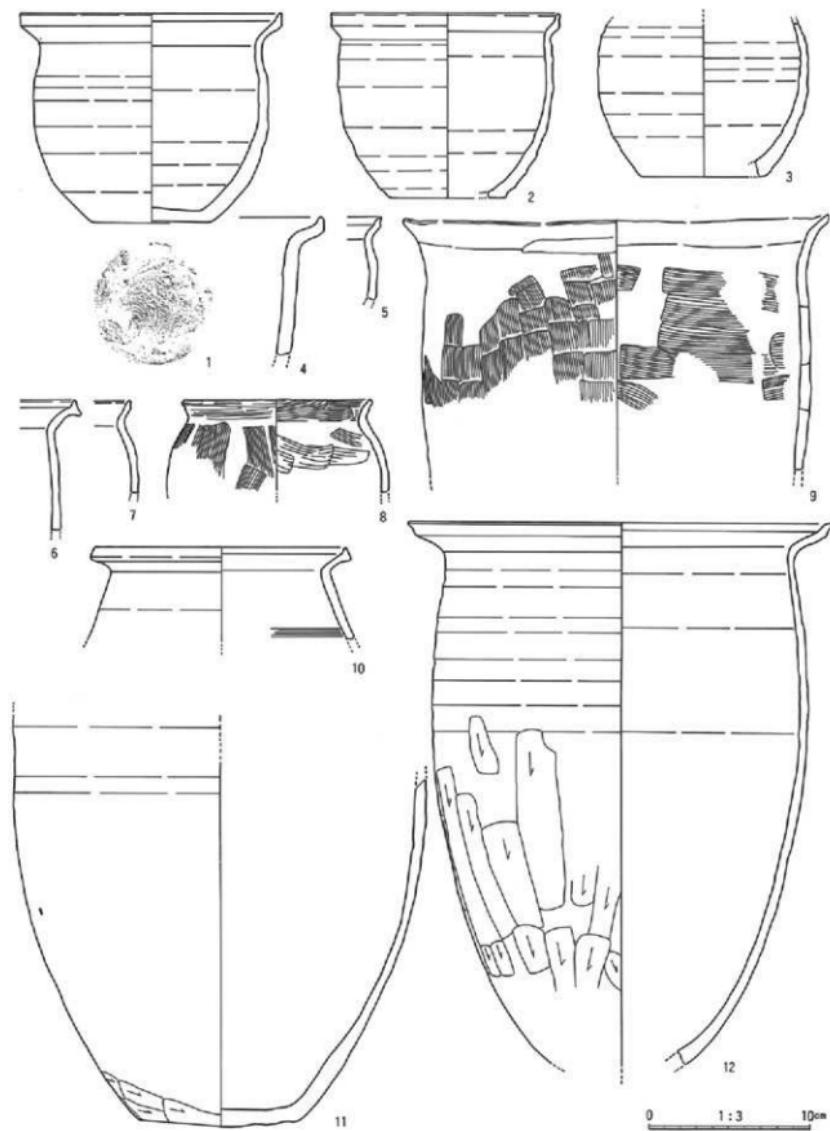
EP 177

1	10 YR 3/2	黑褐色	シルト	炭化粈・焼土粒少含む
2	10 YR 4/2	灰褐色	シルト	炭化粈・土器片含む

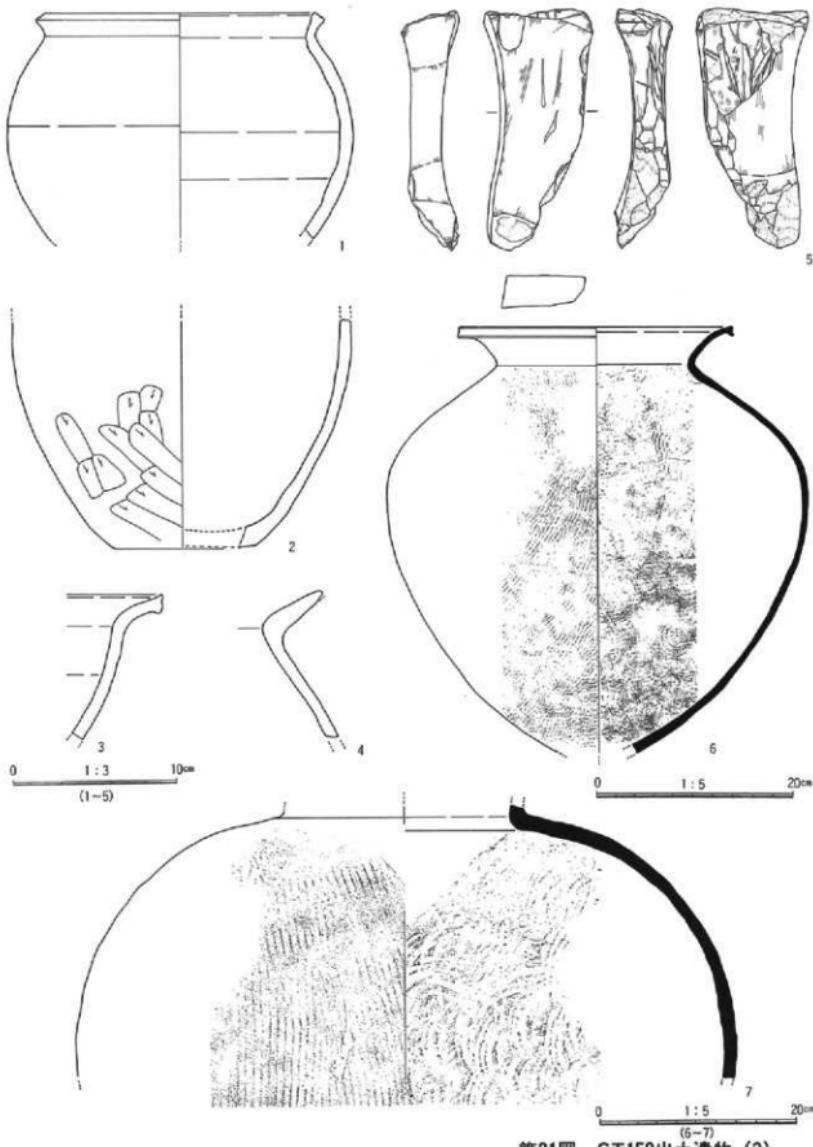
第18図 ST150土層断面図



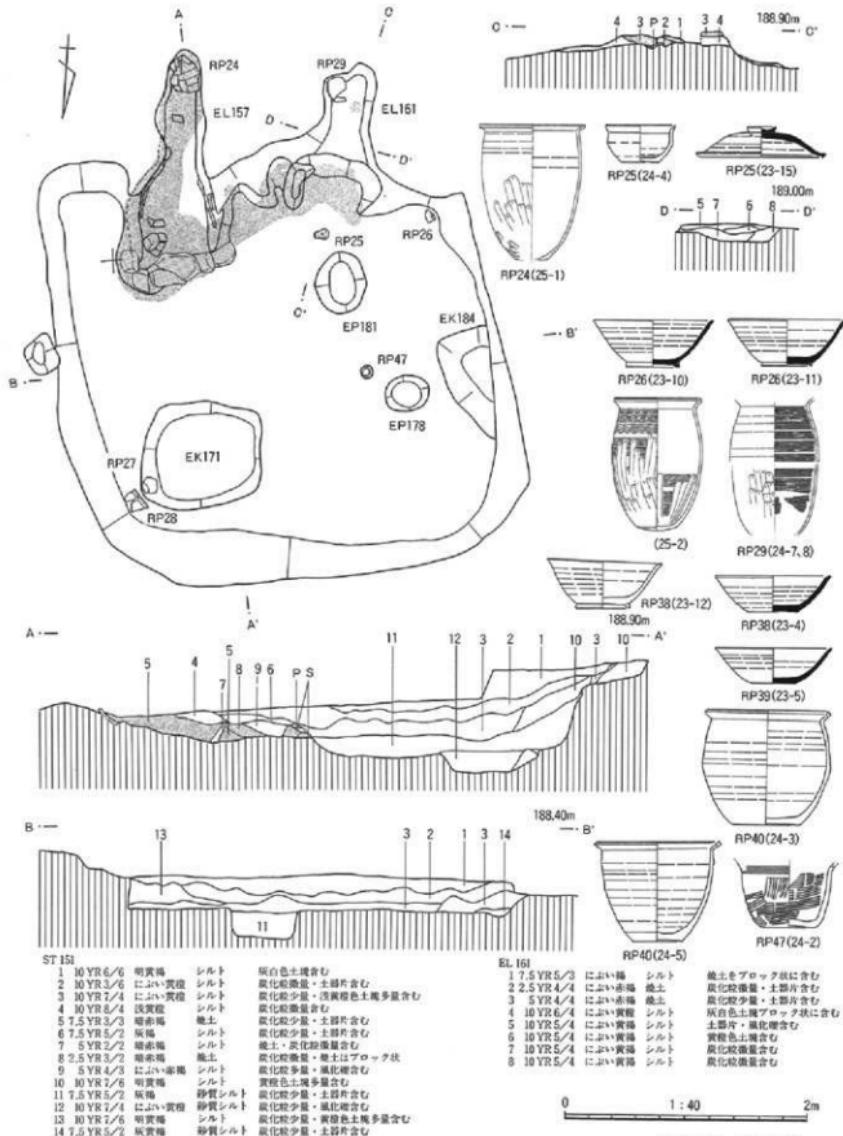
第19図 ST150出土遺物 (1)



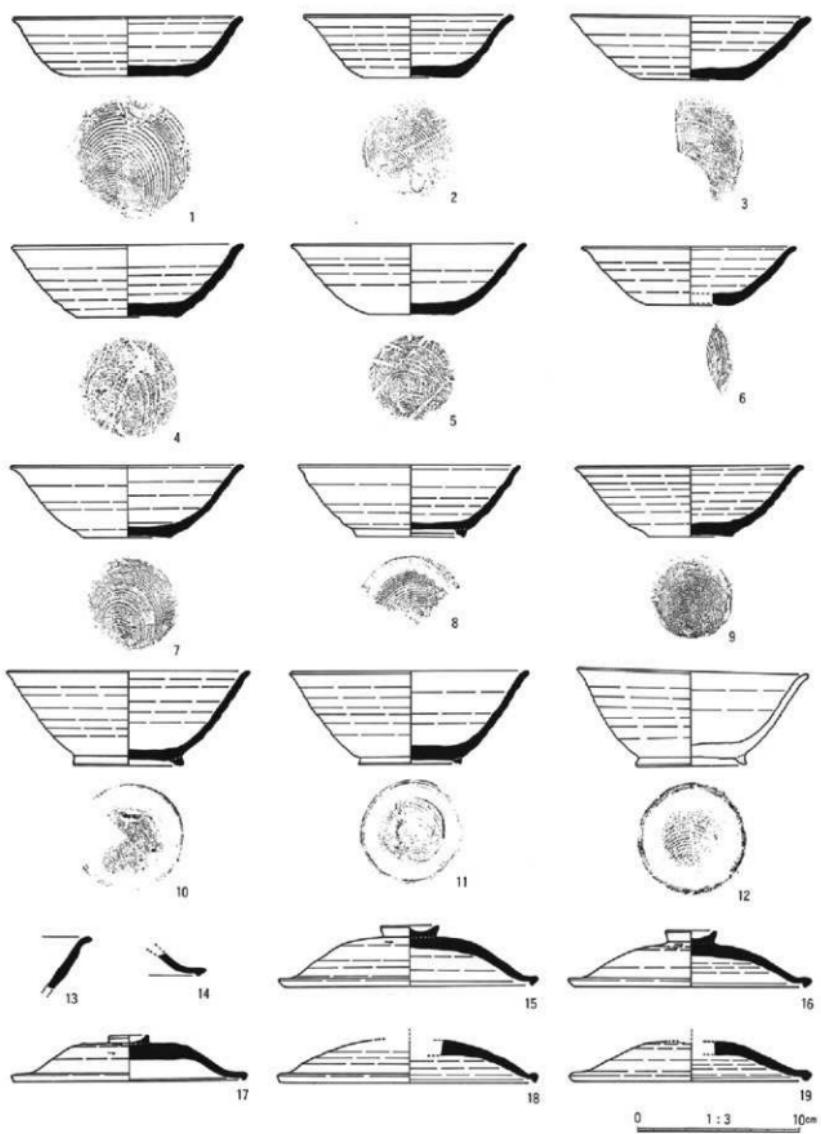
第20図 ST150出土遺物（2）



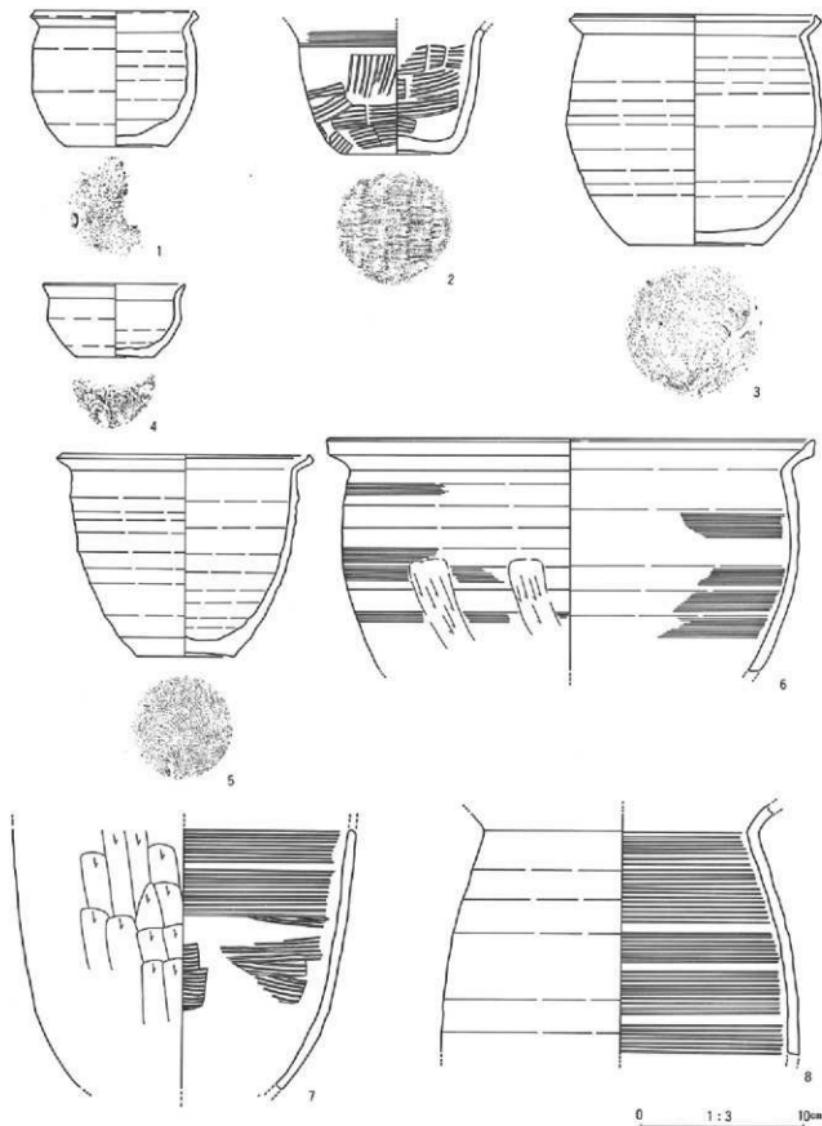
第21図 ST150出土遺物 (3)



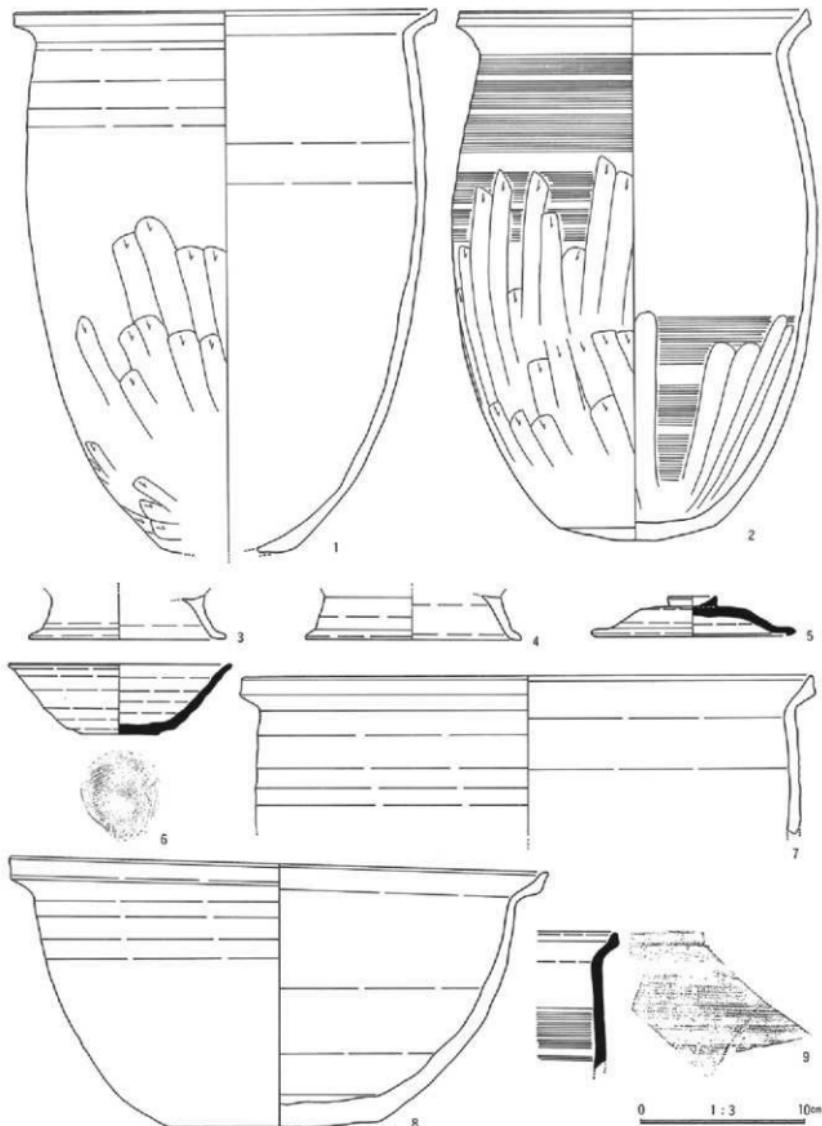
第22図 ST151



第23図 ST151出土遺物（1）



第24図 ST151出土遺物 (2)



第25図 ST151出土遺物(3)・SK155出土遺物

出土している。3は床面からの出土である。

3 土坑

平安時代と考えられる土坑は、S T150の周囲に3基、S T151の周囲に1基、さらに南に10mほど離れた位置に1基の、合計5基検出されている。

S K155（遺構・第26図 遺物・第25図5～9）

6・7・13Gで検出された。一辺160cm程度の隅丸方形で、深さは30cm程度である。土坑には、下層に廃棄されたものと考えられる焼土や炭化物の層が認められた。覆土からは、須恵器蓋（第25図5）と甕（同図9）が出土している。蓋は転用窯である。甕は、体部の内外面にカキメが施される。底面近くからは、須恵器壺（6）が、底面からは赤焼土器甕（7）、堀（8）が一括出土している。堀は二次加熱を受けている。

S K156（遺構・第26図 遺物・第29図6）

5・13Gで検出された。長軸58cm、短軸46cmの梢円形である。深さは17cmを計る。覆土1層中には、焼土や炭化物が含まれる。遺物では、第29図6の赤焼土器甕が出土している。

S K159（遺構・第26図）

6・13・14Gで検出された。長軸110cm、短軸84cmの不整梢円形である。深さは26cmを測る。壁の立ち上がりは急である。遺物は出土していない。

S K162（遺構・第26図 遺物・第29図1～5、7）

9・11Gで検出された。長軸302cm、短軸226cmの不整円形である。深さは60cm程度である。覆土4、5層からは遺物が多く出土した。須恵器蓋（第29図1）は天井部が回転糸切りである。2は須恵器壺である。3～5は赤焼土器甕である。3、4についてはロクロ調整の後に、外面の体部下間にケズリ調整が施される。5は、内外面にカキメが施される。7は赤焼土器堀である。外面にカキメを施した後にケズリを施す。3、7には二次加熱の痕跡が認められる。

S K163（遺構・第26図 遺物・第30図1～4）

8・9・9Gで検出された。長軸176cm、短軸160cmの隅丸方形である。深さは、70cm程度であり、壁の立ち上がりは急である。土坑底面に厚さ約8cmの炭化物の層がびっしりと認められ、内面の壁面には焼けた形跡が認められるが、程度は軽い。遺物は、須恵器蓋（第30図1）、壺（同図2）、甕（3、4）が出土している。甕（4）は、外面をタタキ成型した後にロクロ調整を行い、最後に体部下間にケズリ調整を施している。ゆがみがあり、肩部に焼成時に生じたと考えられる割れが入る。1と3は土坑底面から出土している。

4 溝 跡

S D154（遺構・第27図 遺物・第30図5～13、第31図1～6）

4・5・12・13Gで確認された。長さ約9.4m、幅36～120cm、深さ8～31cmである。南東へと下る谷沿いに流れゆくが、溝の末端は不明瞭である。覆土は自然堆積である。須恵器の出土が多く、中でも壺類が多い。第30図5～10は須恵器壺である。いずれも底部は回転糸切りであ

る。5は器高が低く、底径はやや小さめである。6、8は、底径がやや大きく、直線的に立ち上がる。6は器高が高い。7は底径が小さめで直線的に外反する。9、10は底径は小さい。11、12は須恵器高台付壺である。11は、器高がやや高く底径はやや大きい。12は、体部がやや内湾気味に立ち上がる。13は双耳壺である。底部は回転糸切りである。第31図1～4は須恵器蓋である。1、3は転用硯である。1、2は天井部は回転ヘラケズリ調整、3、4は回転糸切り調整の後、周囲をヘラケズリ調整している。5は須恵器甕である。口縁が短く外反し、体部は丸く膨らむ。カキメを施した後にケズリ調整を行う。6は須恵器の小型の壺である。

5 性格不明遺構

S X 158（遺構・第27図 遺物・第31図9、10）

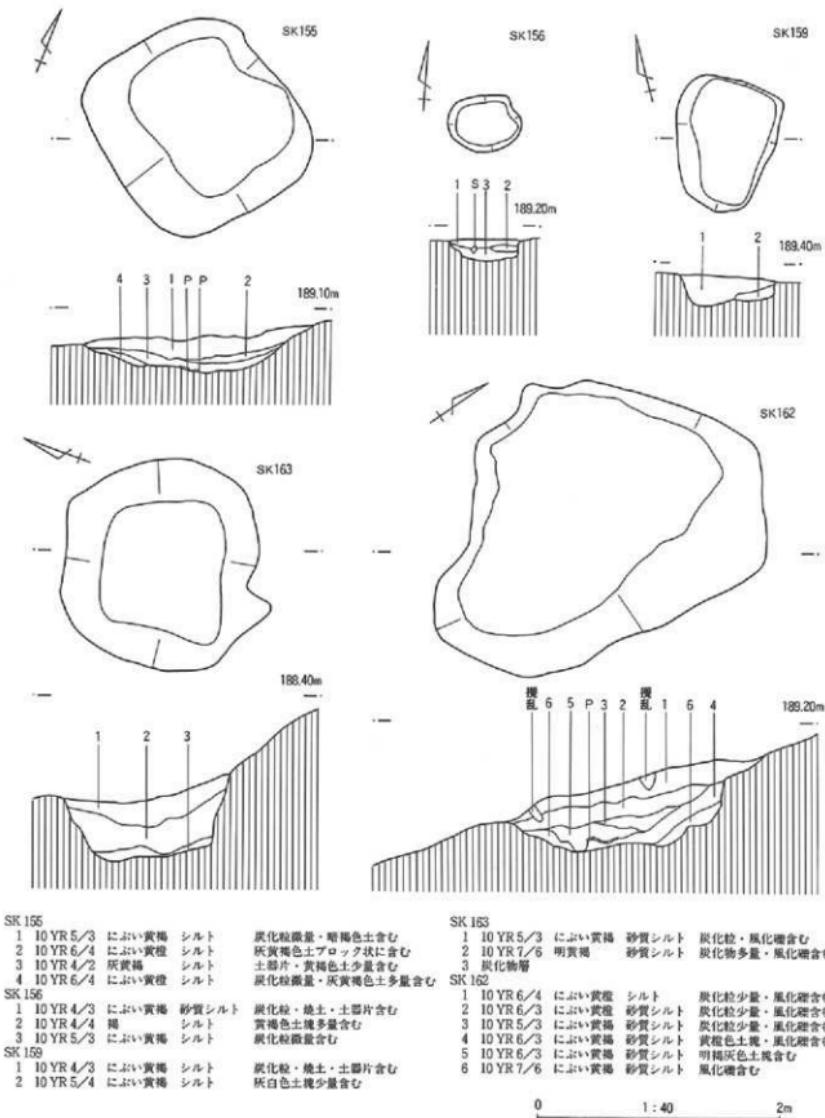
5・6・13Gで検出された。長辺約3.3m、短辺3.0mの隅丸の歪んだ方形である。深さは10～26cmであるが、全体的に上部を削平されており、斜面下側の南側にかけて徐々に浅くなる。北辺部分には、長軸100cm、短軸76cm、深さ26cmの、梢円形の土坑状の落ち込みが認められる。この中からは、須恵器、第31図9、10の赤焼土器甕などが出土している。

S X 160（遺構・第28図）

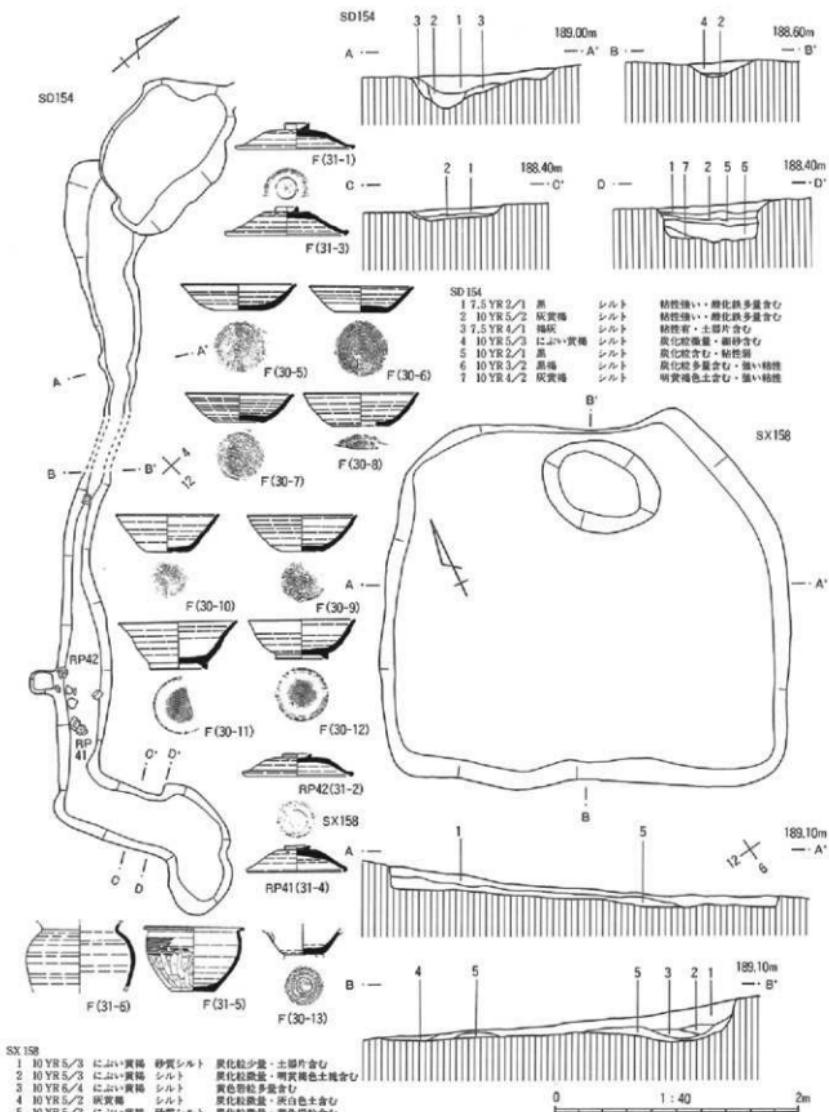
3・4・12・13Gで検出された。長辺328cm、短辺240cmの隅丸長方形である。深さは24cmを測るが、東側にかけて浅くなる。東隅に、直径約50cmのピット状の落ち込みが認められる。須恵器壺、赤焼土器片、内黒土師器壺が出土しているが、図化できるものはない。

6 グリット出土の遺物（第31図11～22、第32～37図）

遺物の出土が多いグリットとして、S D 154、S X 160周辺の、3-12、4-12・13、5-12Gがあげられる。特にS D 154の周囲に集中する。もう一つのまとまりとして、S T 151、S K 162、S K 163の分布する場所の斜面下側の場所、7-8・11、8-10G周囲から遺物が比較的出土している。また、S T 149周囲のグリットからも少量ながら遺物の出土が認められる。遺物であるが、第31図11～22、第32図1～4は須恵器蓋である。器形やつまみ、天井部の調整、口縁端部の形態にバリエーションがある。第31図11と13は、つまみが擬宝珠状で、天井部が丸味をもつ。第31図12、16、19、第32図3は、天井部と体部の境が不明瞭で、口縁端部が屈曲する。第32図2は器高が低く、天井部は平坦である。第31図14、15、第32図1は器高が低く、天井部と体部の境が不明瞭である。第31図17は天井部が平坦で器高が低く、偏平なつまみが付き、端部は直立する。第32図4は、天井の縁辺に環状の大きなつまみがつく。蓋の口縁端部の多くは内側に折れるが、端部が稜状になるもの（第31図16）や、幅広になり両端がとがるもの（第31図21）、丸くなるもの（第32図1）などもある。また天井部の調整は、ほとんどが回転ヘラケズリ調整であるが、第32図1、3は回転糸切りの後に、天井部の縁辺をヘラケズリ調整する。第32図2、4については回転糸切りである。また、第31図の13、15は転用硯である。第32図5～15、第33図、第34図1～6、8、9は須恵器壺である。第32図5は、底径が大きく底部は回転ヘラ切りである。同図10は底径がやや大きく、形が逆台形状に近い。第32図6、12、14は底



第26図 SK155・156・159・162・163



第27図 SD154・SX158

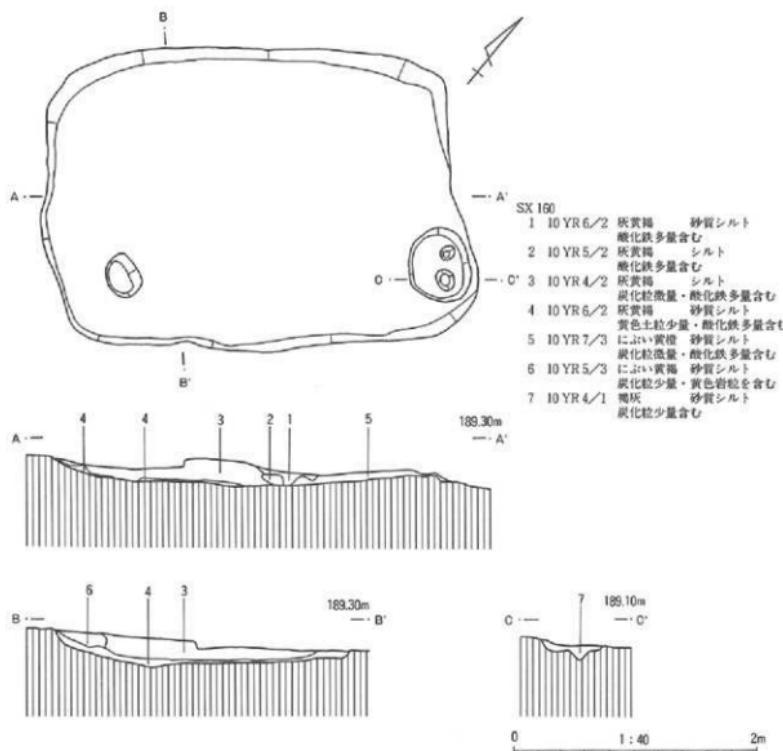
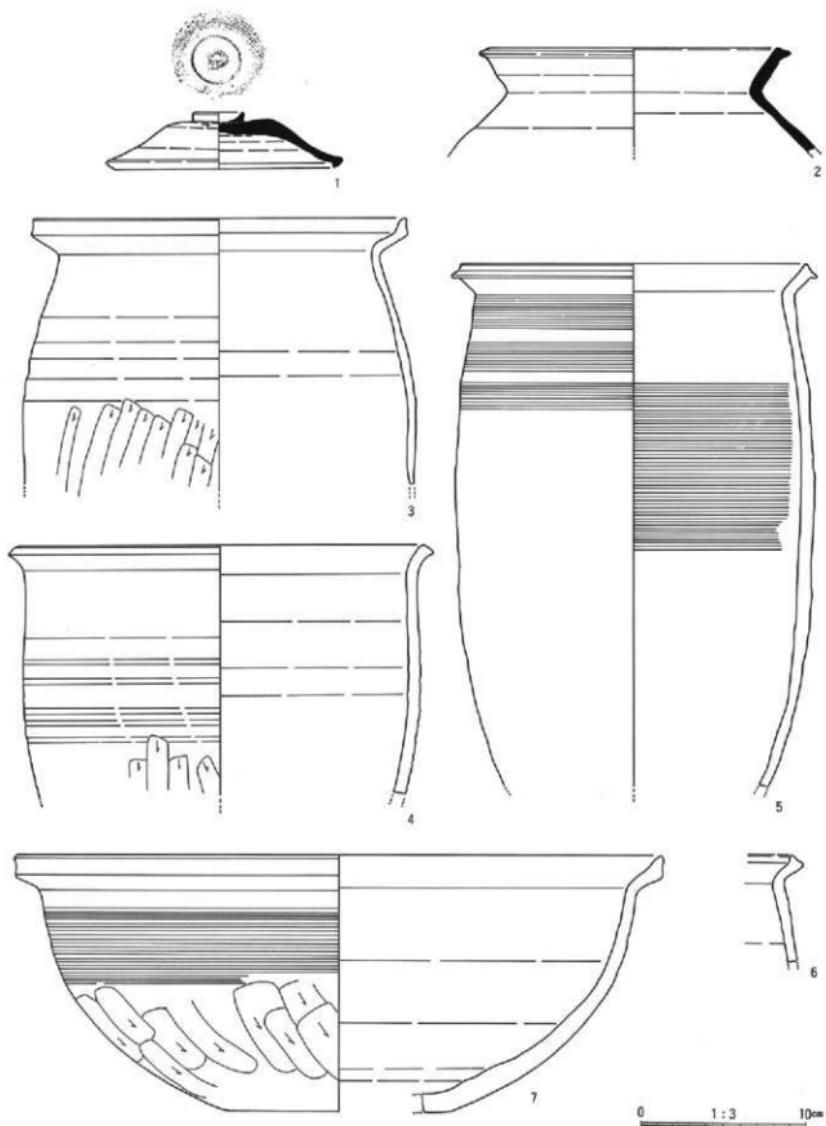


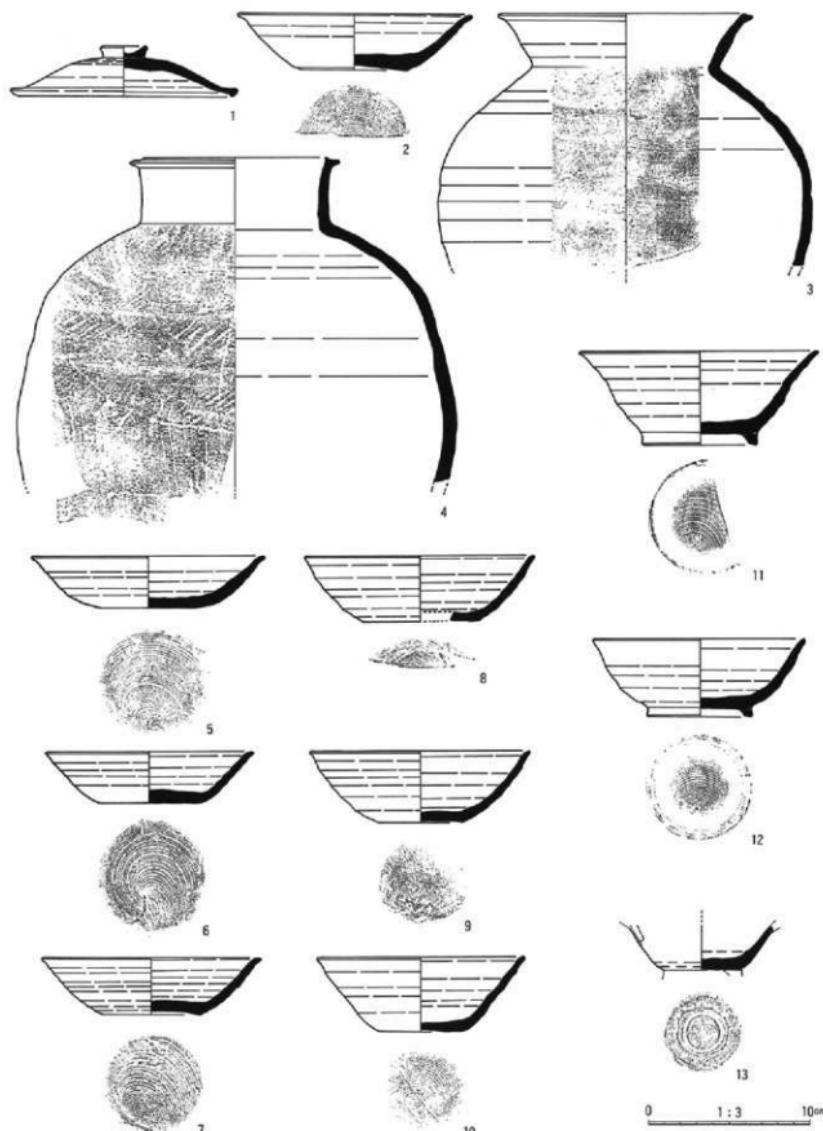
表-3 遺構観察表 (SK・SD・SX)

構造番号	位置 (グリッド)	規模(cm)			平面形	測量 堆積層	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ				
26	SK155 6-7-13	166	152	31	楕円方形	4	須恵器蓋・環・壺 赤燒土器壠	床面に焼土と炭化物
26	SK156 5-13	58	46	17	椭円形	3	赤燒土器壠	覆土に焼土と炭化物
26	SK159 6-13+14	110	84	26	不整椭円形	2		
26	SK162 9-11	302	226	63	不整椭円形	6	須恵器蓋・壺 赤燒土器壠・壙 土師器壠	
26	SK163 8-9-9	174	156	58	不整椭円形	3	須恵器蓋・壺・壺	床面に厚さ8cmの炭化物層
27	SK158 5-6-13	330	300	26	楕円の歪んだ方形	5	赤燒土器壠	北辺壁際に土坑状の落ち込み
28	SK160 3-4-12+13	340	250	24	楕円長方形	6		東隅と北隅に柱穴状の落ち込み
		長さ(m)	幅(cm)					
27	SD154 4-5-12+13	9.4	27-102	8-31		7	須恵器蓋・壺・高台壺 ・双耳壺・壺・壺	

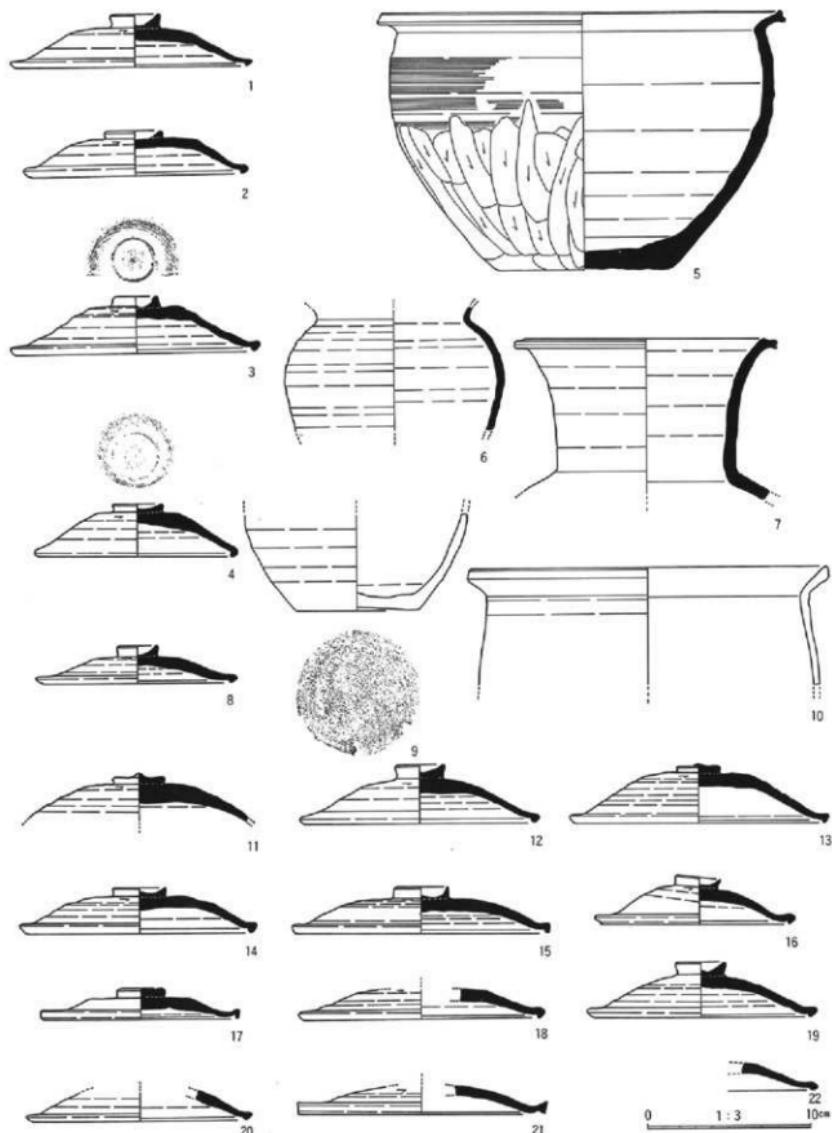
第28図 SX160



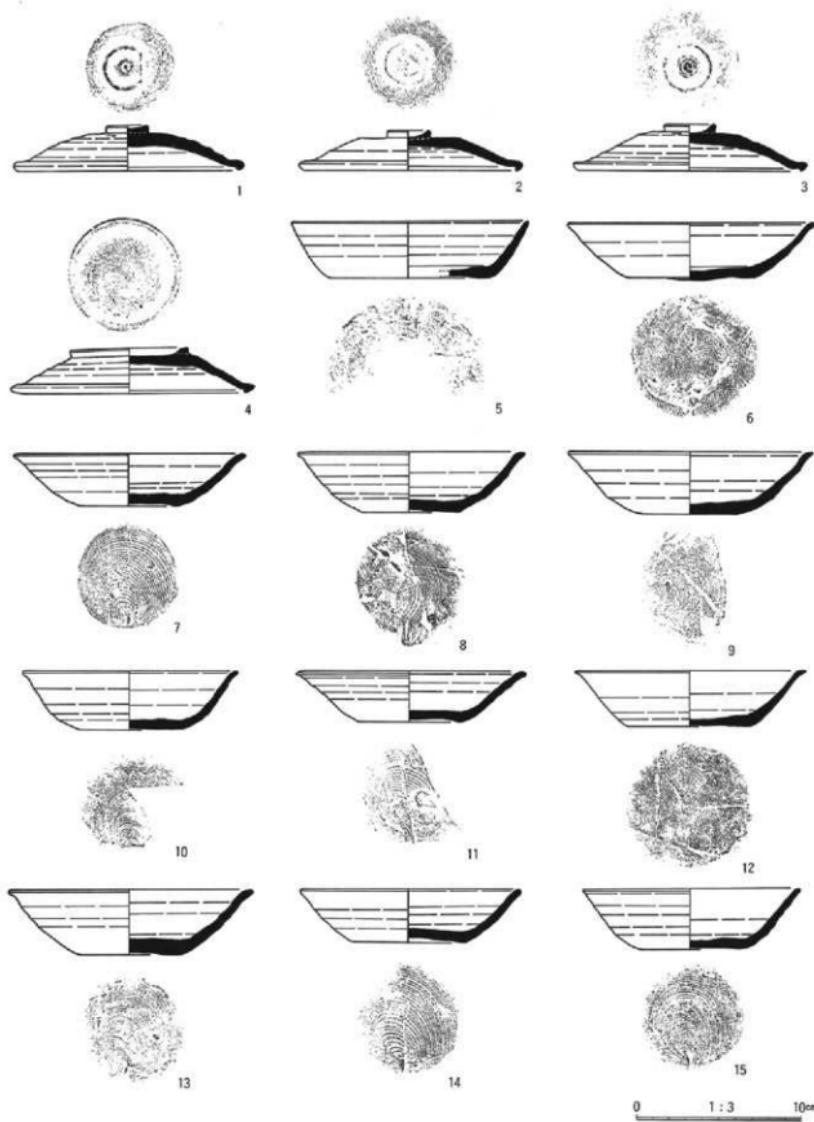
第29図 SK156・SK162出土遺物



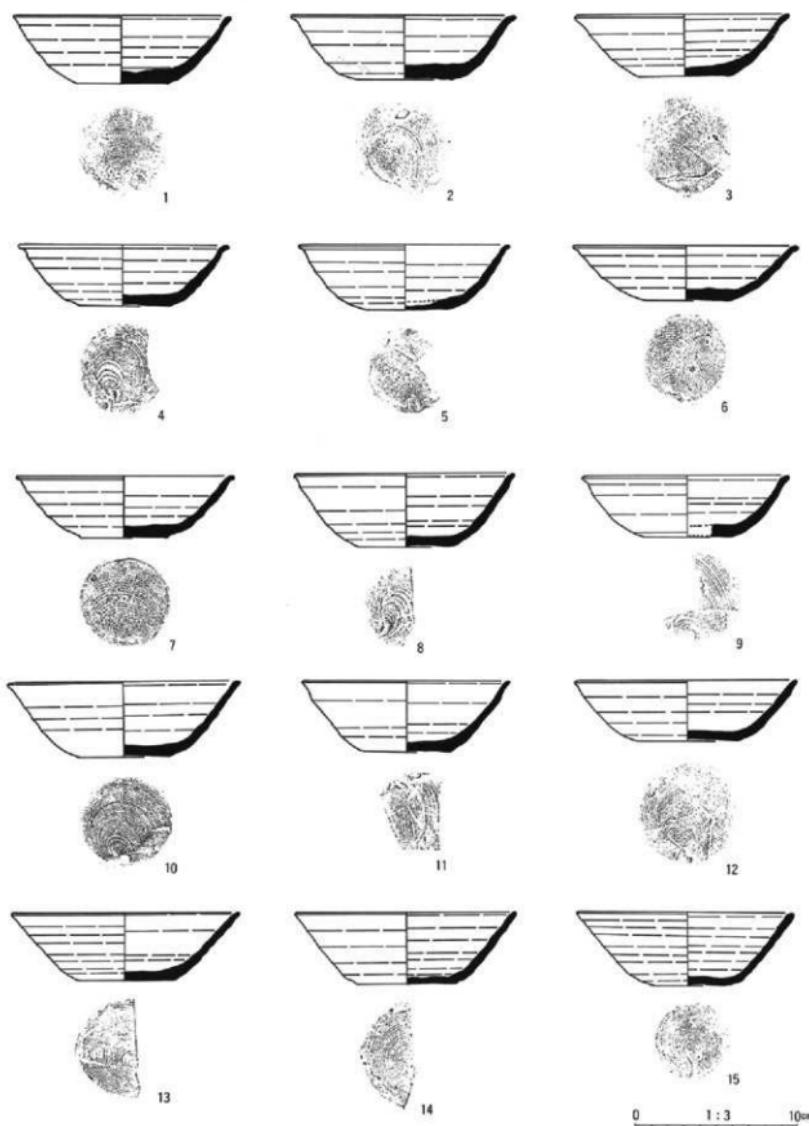
第30図 SK163・SD154出土遺物



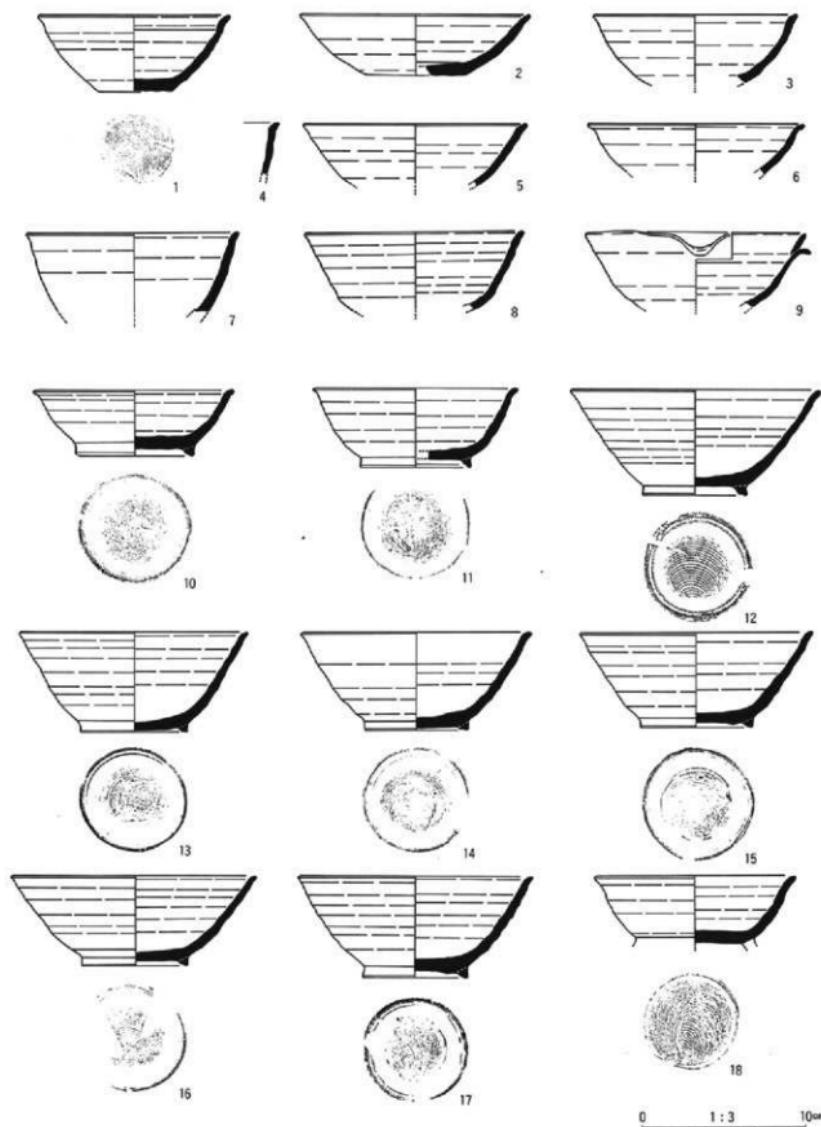
第31図 SD154・SG164・SG27・SX158・グリッド出土遺物（1）



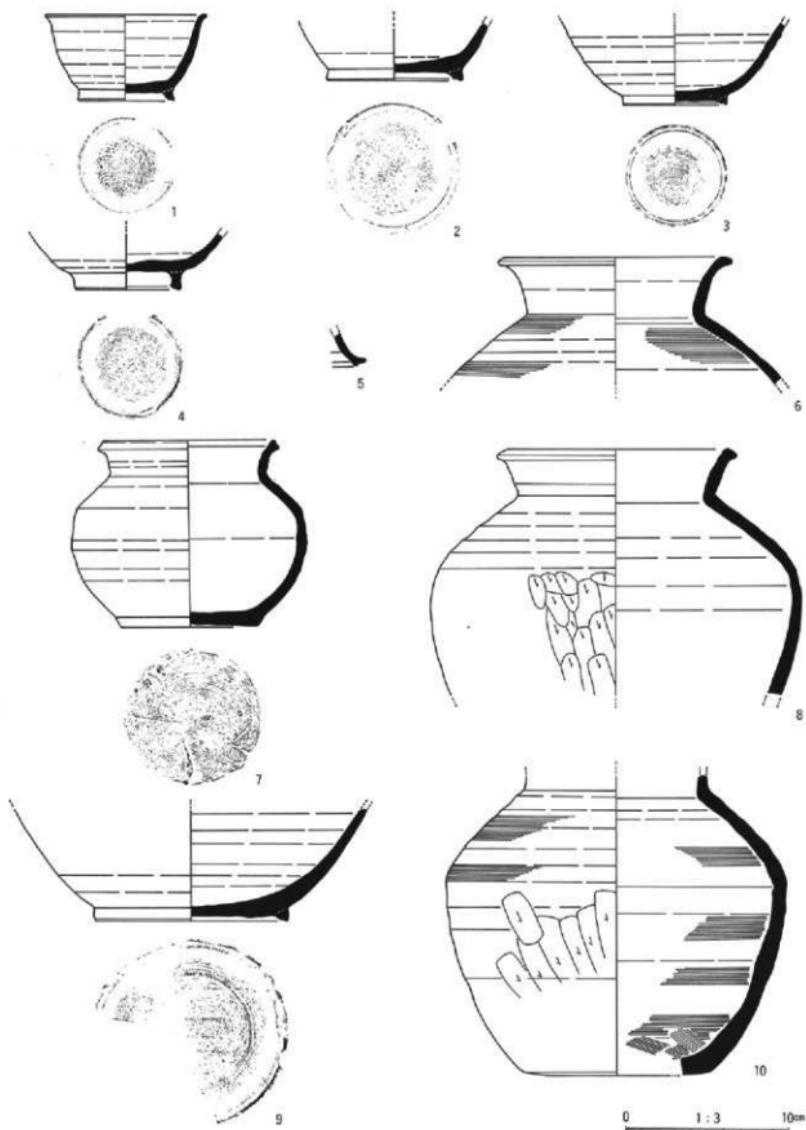
第32図 グリッド出土遺物（2）



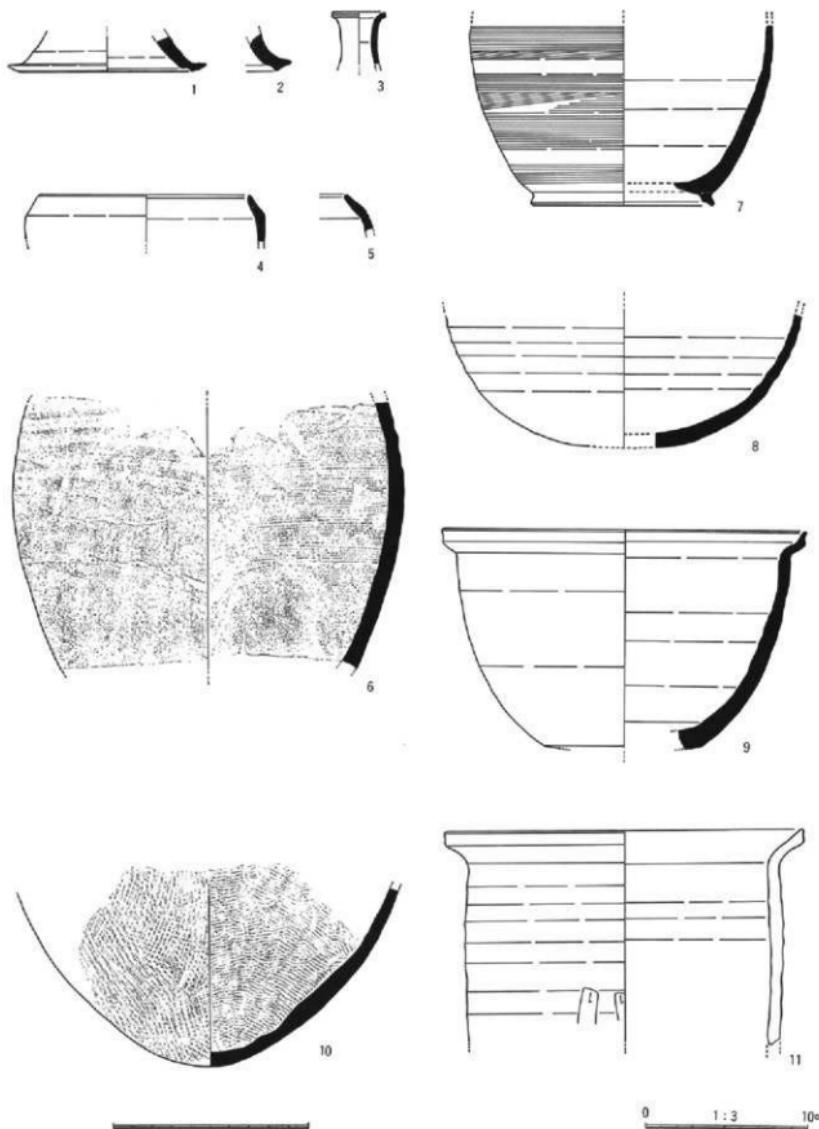
第33図 グリッド出土遺物 (3)



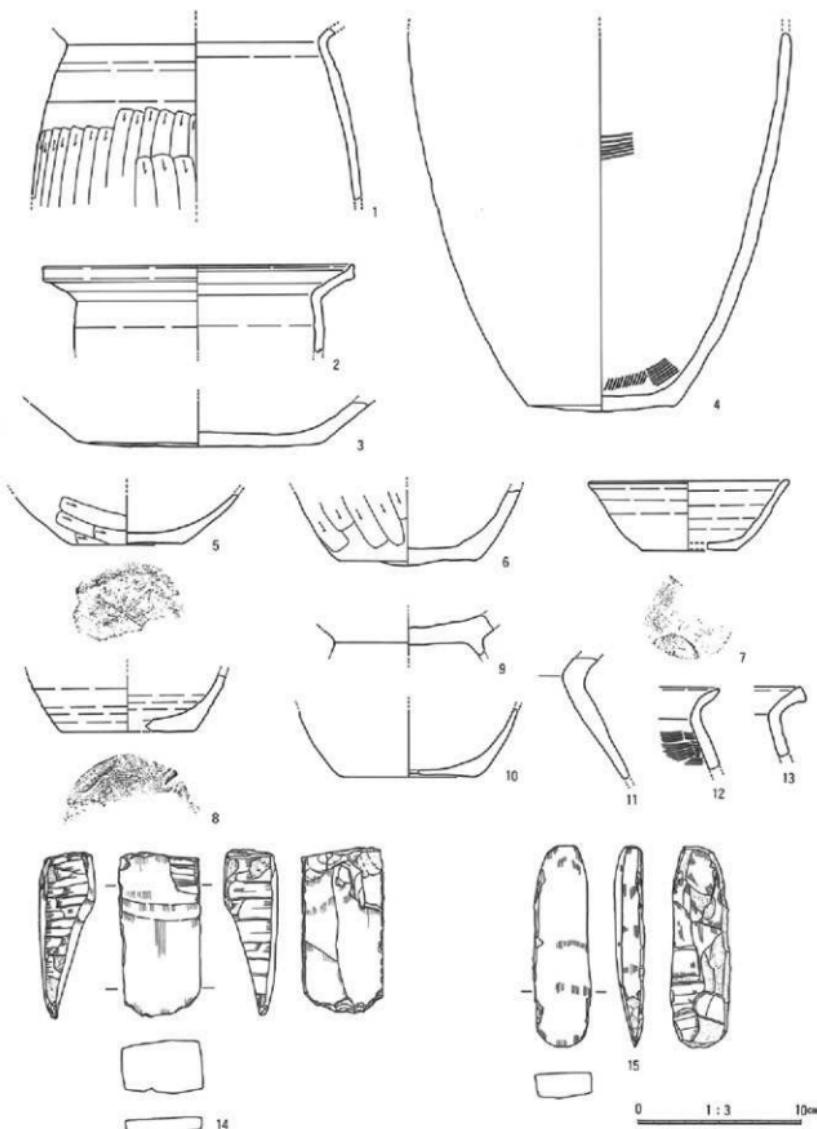
第34図 グリッド出土遺物 (4)



第35図 グリッド出土遺物 (5)



第36図 グリッド出土遺物 (6)

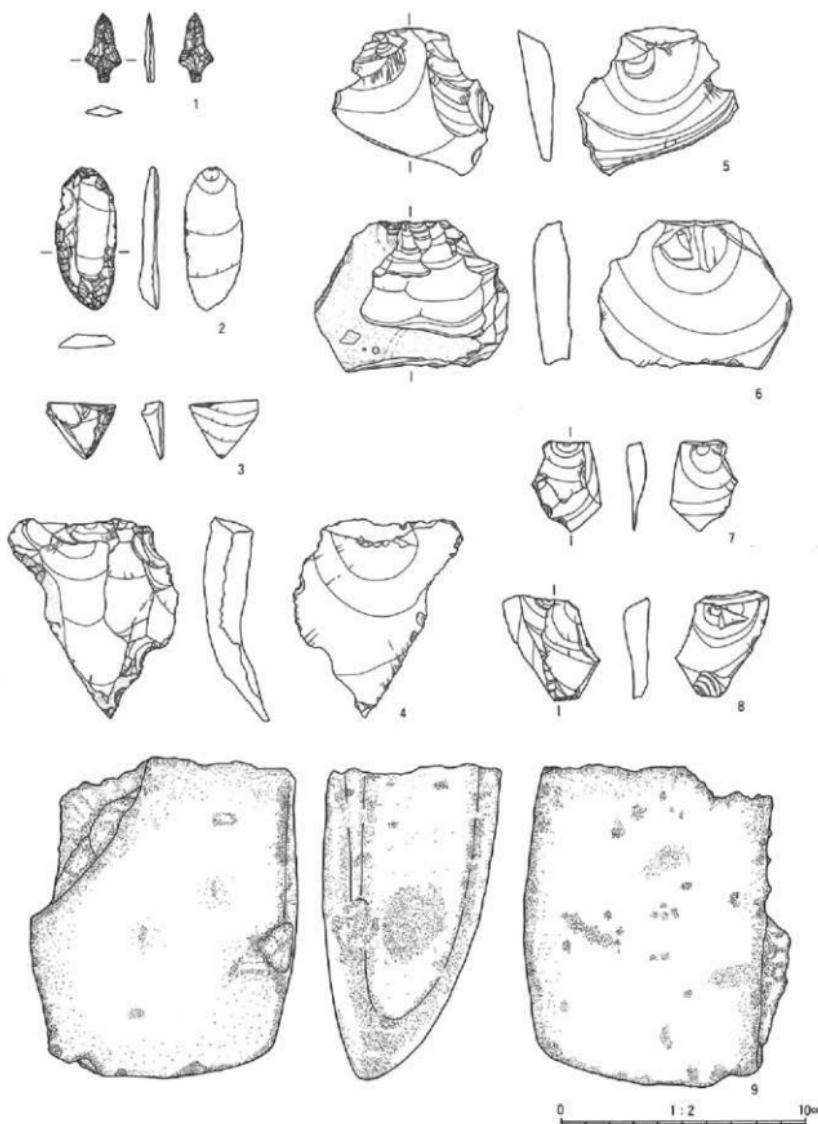


第37図 グリッド出土遺物 (7)

径がやや大きく器高が低い。第32図7、11、14、第33図6は、器高が低く底径がやや小さい。第32図8、13、15、第33図2～4、7、9、11～14、第34図2は、底径がやや小さく体部が直線的に外反する。第33図1は底部がやや小さく、体部から口縁にかけて内湾する。第32図9、第33図5、8、10は底径が小さく、体部が直線的に外反する。第33図14、15、第34図1は器高がやや高い。第34図9は、片口が付く壊である。片口は指で押して作り出している。第34図7、10～18、第35図1～4は須恵器高台付壊である。いずれも底部は回転糸切り調整である。第34図10、18は、底径がやや大きく器高が低い。11は体部が内湾する。第34図12～15、17、第34図1は、やや器高が高く、体部が直線的に外反し底径が小さい。第34図16は底径がやや小さく、体部は直線的に外反する。第35図1は小型でやや深い。第35図4は高い高台が付く。第35図5～10、第36図1～7は須恵器壺である。第35図6～8、10はやや短い頸部が外反し、体部が丸く膨らむ。7は小型で底部は回転糸切りである。6、10には、外面にカキメ調整が認められる。第35図9、第36図7は高台が付く。第35図9は、底部にヘラ状工具による平行な調整痕が認められる。第35図5、第36図1、2は壺の脚部と考えられる。第36図3は長頸壺、4、5は無頸壺である。第36図8は須恵器鉢と考えられ、丸底で底部に摩滅が認められる。9、10は須恵器壺である。9は口縁が大きく開き、短く外反した後、上端が直立する。10は大型の壺である、底部は丸底で外面には格子タキ目が、内面には平行のアテ痕が認められる。第36図11、第37図1～3、5～11、13は赤焼土器である。第36図11、第37図1、2、13は長胴の壺である。第37図3は壺の底部で、二次加熱を受け、外面はかなり摩滅している。5、6は壺の底部である。5の底面にはヘラ記号「×」が認められる。6は底部の中央部がやや張り出す。7は壊である。8は小型の壺で底部は回転糸切りである。9は壺の高台部分と考えられる。10も壺の底部であるが、器面の剥落が激しく調整は不明である。11は壺と考えられる。体部の外面にケズリ調整が施される。第37図4は土師器壺で、内面には部分的にハケメが施される。外面は二次加熱を受けて器面が剥落し、調整は不明である。12も土師器壺の口縁部である。内面は黒色でハケメが施される。

V 縄文時代の遺物

石器等の遺物は出土したが、遺構は確認されていない。第38図1は、有茎の石鎌である。基部の先端がわずかに折れている。2は搔器である。縦長剥片の背面側の両側縁に二次加工を施して刃部を作りだしている。3は削器と考えられるが、破損している。縦長と考えられる剥片の右側縁にかけて、背面側に二次加工を施している。4は二次加工のある剥片である。剥片の背面の先端部の右縁と、腹面の右上の縁辺に二次加工が施されている。5～8は剥片である。5、6は横長の剥片であり、6には自然面が一部残る。剥片については、遺跡内からは十数点確認されている。第38図1～8については全て頁岩製である。9は磨製石斧としたが、実用的なものとは考えられない。残存部分では、長さ131mm、幅は109mmであるが、完形時には、長さ30cm近くあったと推定される。刃部付近の両面と、側面に製作時の擦痕が認められるが、実際に使用するための刃部が作り出されていない。祭祀的な用途のものと考えられる。石材は安山岩である。柄の主郭部から出土したことから、主郭の葺石として持ち込まれた可能性がある。



第38図 石器・石製品

表-4 出土遺物観察表 1

件番号	種別	器種	計測値 (mm)			地土	焼成	色調	成形			出土地點	備考
			口径	底径	高さ				内面	外面	底部		
1	かわらけ					砂密	良	SYR6/4に赤い縁	ヨコナデ	ナデ		6-8	
	中世陶器	片口鉢	9	砂粒混入	良	N6/灰		ロクロナデ	ロクロナデ			4-7	□緑褐色焼き波状
	中世陶器	片口鉢	10	砂粒混入	良	N6/灰		ロクロナデ	ロクロナデ			4-7	□緑褐色焼き波状
	中世陶器	片口鉢	11	砂粒混入	良	N6/灰		ロクロナデ	ロクロナデ			4-7	□緑褐色焼き波状
	中世陶器	片口鉢	(150)	砂粒混入	良	N6/灰		御目	ナデ	静止無効		4-7	2.5mm以下の細目
	青磁	瓶		微密	良	SYL6/瓶オーバー						EA29	RIP# 白面 貫入
	青磁	瓶		微密	良	SYL6/瓶オーバー						EDH13	RIP# 白面 貫入
	青磁	瓶		微密	良	SYL6/瓶オーバー		網文	網文			E-13	RIP# 大きい少なめの貫入
	青磁	香炉		微密	良	T.G.Y6/1縦状						10-11	RIP# 入貫
	青磁	瓶		微密	良	T.G.Y6/1縦状						11-11	RIP#
2	青磁	瓶		微密	良	T.G.Y6/瓶オーバー						14-10	RIP# 白面 細かい貫入
	青磁	瓶		微密	良	T.G.Y6/瓶オーバー		網文	網文			9-14	RIP# 大きく少なめの貫入
	青磁	瓶		微密	良	IPY6/1モルタル		道文(施)				14-10	RIP# わざかに合意大きめの貫入
	青磁	瓶		微密	良	SYL6/瓶オーバー		道文(施)				14-10	わずかに白面 細かい貫入
	青磁	瓶		微密	良	SYL6/瓶オーバー		道文(施)				14-10	RIP# わざかに白面 細かい貫入
	青磁	瓶		微密	良	SYL6/瓶オーバー		道文(施)				14-10	RIP# わざかに白面 細かい貫入
	青磁	瓶		微密	良	SYL6/瓶オーバー		道文(施)				14-10	RIP# 狹幅
	青磁	瓶		微密	良	SYL6/瓶オーバー		網文	網文			12-9	RIP# 狹幅
	青磁	瓶		微密	良	SYL6/瓶オーバー		網文	網文			12-9	RIP# 狹幅
	青磁	瓶		微密	良	SYL6/瓶オーバー		網文	網文			12-9	RIP# 狹幅
3	土師器	壺	124	92	125	6	砂粒混入	良	SYR6/6縫	ハケメ	ハケメ	ST128	RIP#
	土師器	壺		砂粒混入	良	SYR6/6縫		ロクロナデ	ロクロナデ			ST128	EL168内
	土師器	壺		砂粒混入	良	SYR6/6縫		テテ	テテ			ST128	EL168内
	土師器	壺	116	6	粗砂混入	良	SYR6/6縫		タタキ	タタキ		ST128	EL168内
	土師器	壺		粗砂混入	良	SYR6/6縫		タタキ	タタキ			ST128	EL168内
	土師器	壺		粗砂混入	良	SYR6/6縫		タタキ	タタキ			ST128	EL168内
	土師器	壺	(152)	100	40	4	砂粒混入	良	SYR7/3浅黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切	ST149
	土師器	壺	(137)	(65)	26	4.5	粗砂混入	不良	SYR6/6縫			ST149	RIP# EL168内
	土師器	壺	128	60	36	6	粗砂混入	良	SYR6/6縫	ナデ	ナデ	ST149	RIP#
	土師器	壺	(171)	20	40	5	粗砂混入	良	SYR5/6明赤	ミガキ	ミガキ	ST149	木脂痕
4	土師器	壺	(142)	50	36	7	粗砂混入	良	SYR6/6縫	ナデ	ナデ	ST149	RIP#
	土師器	壺	(130)	50	50	4	微密	良	SYR7/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST149
	土師器	壺	(220)				粗砂混入	良	SYR5/6明赤	マツツ	マツツ	ST149	RIP#
	土師器	壺		粗砂混入	良	SYR5/6明赤		ハケメ	ハケメ			ST149	RIP#
	土師器	壺		粗砂混入	良	SYR5/6明赤		マツツ	マツツ			ST149	RIP#
	土師器	壺		粗砂混入	良	SYR5/6明赤		ナデ	ナデ			ST149	RIP#
	土師器	壺		粗砂混入	良	SYR5/6明赤		ロクロナデ	ロクロナデ			ST149	EL168内
	土師器	壺		粗砂混入	良	SYR5/6明赤		ロクロナデ	ロクロナデ			ST149	RIP# EL168内
	土師器	壺		粗砂混入	良	SYR5/6明赤		ロクロナデ	ロクロナデ			ST149	RIP#
	土師器	壺		粗砂混入	良	SYR5/6明赤		ロクロナデ	ロクロナデ			ST149	RIP#
5	須恵器	环	(131)	68	35	4	海螺骨付	良	SY6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(135)	52	40	3	海螺骨付	良	SYT6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(137)	56	39	5	粗砂混入	良	SYR6/3に赤い縁	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(130)	54	45	4	微密	良	SY5/4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(136)	50	42	4	微密	良	SYG6/1モリテ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(138)	66	45	4	微密	良	SY5/7/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(146)	64	51	4	微密	良	NS/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(142)	5	5	微密	良	NS/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150	
	須恵器	环	(144)	56	49	5	微密	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(160)	66	65	4	微密	良	SYR5/6明赤	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
6	須恵器	环	(133)	64	68	5.5	海螺骨付	良	SYT7/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	軸用環	ST150
	須恵器	环	(140)	22	4	4	微密	良	NS/4	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	須恵器	环	(143)	(56)	25	5	微密	良	SY6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(126)	50	40	4	微密	良	SYR5/6明赤	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(146)	58	40	5	微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(144)	56	49	5	微密	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(162)	60	65	4	微密	良	SYR5/6明赤	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(133)	64	68	5.5	海螺骨付	良	SYT7/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(160)	70	130	5	微密	良	SYR5/6明赤	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	环	(140)	70	116	5	微密	良	SYR6/4に赤い縁	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
7	須恵器	要	(76)				粗砂混入	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	要					粗砂混入	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	要					粗砂混入	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	要					粗砂混入	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	要					粗砂混入	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	要					粗砂混入	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	要					粗砂混入	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	要					粗砂混入	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	要					粗砂混入	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
	須恵器	要					粗砂混入	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切	ST150
8	赤陶土器	壺	(114)				微密	良	SYR6/6縫	ハケメ	ナデ	ST150	RIP# EL168内
	赤陶土器	壺	(263)				粗砂混入	良	SYR6/6縫	ハケメ	ナデ	ST150	RIP#
	赤陶土器	壺	(185)				微密	良	SYR5/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺	100				粗砂混入	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺	(260)				粗砂混入	良	SYR7/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	RIP# EL168内
	赤陶土器	壺	(164)				微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺	(88)				粗砂混入	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺	9.8				粗砂混入	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	EL172内
	赤陶土器	壺	6.5				粗砂混入	不良	IPYR6/4に赤い縁			ST150	EL165内
	赤陶土器	壺	(274)				微密	良	SYR6/2縫	ロクロナデ	タタキ	ST150	RIP# EL168内
9	須恵器	要	(164)				微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	土師器	要					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	須恵器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	須恵器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
10	須恵器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	丸底	ST150
	赤陶土器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	RIP# EL168内
	赤陶土器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	
	赤陶土器	壺					微密	良	SYR6/6縫	ロクロナデ	ロクロナデ	ST150	

表-5 出土遺物観察表 2

件番号	器 制	器種	計測値 (mm)	縦 口径 底径 高さ 厚さ	胎 土	焼成	色 調	成 形			出土 地点	備 考
								内 面	外 面	底 部		
1	須恵器	环	(142)	72	36	6	砂粒混入	良 N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151
2	須恵器	环	(130)	58	35.5	3	海綿骨針	良 10YR8/3に青斑	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151
3	須恵器	环	(148)	64	49	5	海綿骨針	良 5YT7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151
4	須恵器	环	(143)	62	44	5	粗砂混入	良 7.5YT7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151 RP68
5	須恵器	环	(144)	64	43	4	微密	良 7.5YT7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151 RP69
6	須恵器	环	(132)	(56)	36	4	砂粒混入	良 7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151
7	須恵器	环	(145)	86	44	4	微密	良 2.5YT7/2灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151
8	須恵器	高台环	(136)	(68)	44	4	微密	良 N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151
9	須恵器	环	(142)	52	43	4	微密	良 7.5YT7/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151
10	須恵器	高台环	(160)	(69)	58	4	微密	良 7.5YT7/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151 RP26
11	須恵器	高台环	(146)	63	57	4	微密	良 10YG5/3に1.5灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151 RP26 39
12	赤陶土器	高台环	143	68	59	4	海綿骨針	良 7.5YT7/6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151 RP26 ゆがみ
13	須恵器	环			5		砂粒混入	良 N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ST151
14	須恵器	直			3.5		微密	良 7.5YT7/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ST151
15	須恵器	直	(160)	37	6		微密	良 10Y8/1灰	ロクロナデ	ケズリ		ST151 RP25 EL151内
16	須恵器	直	150	34	5		微密	良 7.5YT7/1灰	ロクロナデ	ケズリ		ST151
17	須恵器	直	146	28	5		微密	良 N4/灰	ロクロナデ	ケズリ		ST151
18	須恵器	直	(160)	5			微密	良 N4/灰	ロクロナデ	ケズリ		ST151
19	須恵器	直	(150)	5			微密	良 5YT7/2灰モリーブ	ロクロナデ	ケズリ		ST151
1	赤陶土器	要	(96)	84	4.5		砂粒混入	良 10YR8/4に4.5灰	ナデ	ナデ	回転糸切	ST151
2	土師器	要		88	6.5		細砂混入	良 10YR8/3に1.5灰	ハメテ	ハメテ	動物痕	ST151 RP47
3	赤陶土器	要	(146)	82	143	5	粗砂混入	良 2.5YT7/4灰場	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151 RP46
4	赤陶土器	直	84	46	46.5	3.5	砂粒混入	良 5YT7/6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ST151 RP25
5	赤陶土器	要	149	62	126	5	細砂混入	良 7.5YT7/6	ロクロナデ	ケズリ	回転糸切	ST151 RP46 SD154
6	赤陶土器	場	(300)		5		細砂混入	良 5YT7/6	カキメ ナデ	カキメ ケズリ		ST151
7	赤陶土器	要			6		細砂混入	良 5YT7/6	カキメ ナデ	ケズリ		ST151 RP26 EL151内
8	赤陶土器	直			7		細砂混入	良 5YR8/4に1.5灰	カキメ ハケテ	ロクロナデ		ST151 RP26 EL151内
9	赤陶土器	直	(260)	(82)	7.5		砂粒混入	良 5YR8/8	ロクロナデ	ケズリ		ST151 RP24 EL157内
10	赤陶土器	直	(208)	96	338	7.5	砂粒混入	良 5YR8/6	カキメ ナデ	カキメ ケズリ	丸底	ST151 RP27 28
11	赤陶土器	直	(130)	4			砂粒混入	良 5YR7/6	ロクロナデ			ST151
12	須恵器	直	(130)	6			細砂混入	良 5YR7/6	ロクロナデ	ロクロナデ		ST151
13	須恵器	直	(126)	24.5	43	4	微密	良 7.5YT7/2灰モリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SK155 転用器
14	須恵器	場	(348)	7			砂粒混入	良 7.5YT7/2	ロクロナデ	ロクロナデ		SK155
15	須恵器	場	(332)	132	160	8	砂粒混入	良 1.5YT7/6	ナデ	ナデ ケズリ		SK155 RP48
16	須恵器	直		6			微密	良 N3/薄灰	カキメ	カキメ		SK155
17	須恵器	直	(146)	35	4.5		細砂混入	良 7.5YT7/1灰	ロクロナデ	ケズリ		SK162 RP37 天井部回転糸切 ゆがみ
18	須恵器	直	(188)	7			微密	良 10YR8/1灰斑	ロクロナデ	ロクロナデ		SK162
19	赤陶土器	要	(300)	5			細砂混入	良 7.5YT7/2	ロクロナデ	ケズリ		SK162
20	土師器	要	(350)	7.5			細砂混入	良 10YR7/4に1.5灰	ロクロナデ	ケズリ		SK162
21	赤陶土器	要	(208)	9			細砂混入	良 7.5YT7/2	カキメ	カキメ		SK162 RP26
22	赤陶土器	直		6.5			砂粒混入	良 7.5YT7/6	ロクロナデ	ロクロナデ		SK156
23	赤陶土器	場	(395) (140)	156	9		砂粒混入	良 7.5YT7/6	ナデ	ケズリ カキメ		SK162
1	須恵器	直	(140)	31	5		細砂混入	良 N6/灰	ロクロナデ	タキメ ケズリ		SK163
2	須恵器	直	(144)	(65)	35	5	微密	良 5V6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SK163
3	須恵器	直	(154)	5			微密	良 N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		SK163
4	須恵器	直	(111)	6			微密	良 N6/灰	ロクロナデ	ケズリ		SK163
5	須恵器	直	(142)	32	6.5		微密	良 8YT7/4灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SK164
6	須恵器	直	(126)	32	4		微密	良 N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SD154
7	須恵器	直	(136)	36	4		微密	良 N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SD154
8	須恵器	直	(142)	41	5		微密	良 5YT7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SD154
9	須恵器	直	(136)	52	44	4	微密	良 N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SD154
10	須恵器	直	(128)	49	35	3.5	微密	良 7.5YT7/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SD154
11	須恵器	高台环	(148)	(71)	58	4	微密	良 N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SD154
12	須恵器	高台环	(132)	86	48	4	微密	良 N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SD154
13	須恵器	双耳环			4		微密	良 N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SD154
1	須恵器	直	(149)	33	5		粗砂混入	良 N5/灰	ロクロナデ	ケズリ		SD154
2	須恵器	直	(138)	38	4.5		微密	良 5B5/1青灰	ロクロナデ	ケズリ		SD154 RP42
3	須恵器	直	154	35	4		微密	良 N6/灰	ロクロナデ	ケズリ		SD154 転用器 天井部回転糸切
4	須恵器	直	(125)	32.5	5.5		微密	良 N5/灰	ロクロナデ	ケズリ		SD154 RP41 天井部回転糸切
5	須恵器	直	(342)	110	160	6	粗砂混入	良 N6/灰	ロクロナデ	カキメ ケズリ		SD154
6	須恵器	直		4			微密	良 N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SD154
7	須恵器	直		6			微密	良 5C5Y2/1黑	ロクロナデ	ロクロナデ		SD154
8	須恵器	直	60	23	5		微密	良 N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		SG164
9	須恵器	直	124	74	5		微密	良 5B5/1青灰	ロクロナデ	ケズリ		SG27 転用器
10	赤陶土器	直	(230)	4			粗砂混入	良 7.5YT7/6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SX156
	赤陶土器	直			4		粗砂混入	良 7.5YT7/6	ロクロナデ	ロクロナデ		SX158

表-6 出土遺物観察表3

件名番号	種別	器種	計測値 (mm)			胎土	焼成	色調	成形形			出土地點	備考	
			口径	底径	高さ				厚さ	内面	外面	底部		
第1段	瓦	蓋				5	海綿骨針	良	7.5Y4/1灰	ロクロナデ	ケズリ		8-10	
	瓦	(148)	38	5	砂炒混入	良	10Y5/1灰	ロクロナデ	ケズリ				7-9	
	瓦	(160)	36	5	砂炒混入	良	10Y6/1灰	ロクロナデ	ケズリ				7-8	転用便
	瓦	裏	146	28	5	海綿骨針	良	10GY6/1オーリーブ	ロクロナデ	ケズリ			8-10	
	瓦	(158)	29	6	織密	良	NS/灰	ロクロナデ	ケズリ				4-12	転用便
	瓦	裏	124	30	5	織密	良	NS/灰	ロクロナデ	ケズリ			7-10	HIPS
	瓦	(122)	19	5	砂炒混入	良	10GY6/1オーリーブ	ロクロナデ	ケズリ				7-10	
	瓦	(162)		4.5	織密	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ケズリ				8-10	
	瓦	(142)	34	5	砂炒混入	良	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ				7-9	天井部回転ヘラクゼリ
	瓦	(140)		8	織密	良	10Y8/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ				7-11	
	瓦	(152)		5	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ケズリ				4-12	
	瓦	裏		4	織密	良	NS/灰	ロクロナデ	ケズリ				7-11	
第2段	瓦	蓋	(142)	28	6	海綿骨針	良	10Y5R/1褐色	ロクロナデ	ケズリ			2-12	
	瓦	裏	136	24.8	7	砂炒混入	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ			7-9	天井部回転糸切り
	瓦	(146)	36	5	砂炒混入	良	10Y5/1灰	ロクロナデ	ケズリ				7-9	
	瓦	裏	144	28.5	5	砂炒混入	良	NA/灰	ロクロナデ	ケズリ			5-11	中央部瓦用、天井部糸切り
	瓦	(150)	28	4	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ				5-14	天井部回転糸切り
	瓦	(146)	35	5	砂炒混入	良	2.5YT/2灰黒	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラチ	4-4			
	瓦	(132)	(76)	35	5	織密	良	NA/暗緑	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	8-12		
	瓦	(144)	62	32	4	織密	良	2.5YT/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	3-12		
	瓦	(140)	60	37	5	織密	不良	2.5YT/2灰黒	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12		
	瓦	(152)	58	39	5	砂炒混入	良	5Y6/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	7-9		
	瓦	(134)	(66)	36	4.5	織密	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-6		
	瓦	(144)	(64)	51	4	織密	良	7.5YT/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-10		
	瓦	(142)	76	34	4	織密	不良	9YT/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	3-12		
	瓦	(152)	62	40	5	砂炒混入	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	3-12		
	瓦	(136)	(66)	32	5	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12		
	瓦	(134)	62	37	5	織密	良	10Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12		
第3段	瓦	蓋	(134)	87	42	5	織密	良	10Y7G/4C灰青い青緑	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	2-12	
	瓦	裏	(140)	99	39.5	5	織密	良	2.5YT/2灰黒	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	7-11	
	瓦	(131)	(58)	38	4	織密	良	NA/暗緑	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12		
	瓦	(130)	56	37	4.5	海綿骨針	良	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	7-11		
	瓦	(130)	56	40	4	砂炒混入	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12		
	瓦	(140)	52	34	5	海綿骨針	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	3-14		
	瓦	(135)	58	38	5	海綿骨針	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	3-13	内面に墨色付着	
	瓦	(144)	45	4	織密	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	7-9			
	瓦	(128)	(52)	36	5	海綿骨針	良	10Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-9		
	瓦	(144)	88	46	4	織密	良	5Y7/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	3-14		
	瓦	(128)	(54)	43	4	織密	良	5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12		
	瓦	(138)	62	37	4	海綿骨針	良	5.5YT/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12		
	瓦	(141)	50	41	4.5	織密	良	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	7-6		
	瓦	(136)	(62)	44	4	織密	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	3-12		
	瓦	(135)	44	46.5	4	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-11		
第4段	瓦	蓋	(116)	46	47	4	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	5-12	
	瓦	(140)	(58)	38	5	砂炒混入	不良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	7-11		
	瓦	(124)		3	粗砂混入	良	NA/暗緑	ロクロナデ	ロクロナデ				4-13	
	瓦	(138)		4	織密	良	10Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ				7-11	
	瓦	(131)		3	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ				4-13	
	瓦	(130)		4	織密	良	NA/暗緑	ロクロナデ	ロクロナデ				7-11	
	瓦	(138)		4	織密	良	10Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ				4-12	
	瓦	(131)		3	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ				4-13	
	瓦	(136)		4	織密	良	NA/暗緑	ロクロナデ	ロクロナデ				7-13	
	瓦	(135)		3.5	織密	良	7.5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ				5-11	
	瓦	(124)		4.5	織密	良	5Y7/1オーリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ				3-12	
	瓦	(124)	(70)	40.5	4	織密	良	NA/2星	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	3-12		
	瓦	(126)	68	48.5	4	織密	良	NA/暗緑	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	5-12		
	瓦	(154)	66	64.5	4	織密	良	10GY6/1オーリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	7-9		
	瓦	(142)	67	61.5	3.5	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	3-12		
	瓦	(143)	65	60	4	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12		
	瓦	(144)	70	58	4	織密	良	7.5Y4/1オーリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	6-12		
	瓦	(152)	(68)	55	3	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12		
	瓦	(144)	(64)	62	5	織密	良	NA/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12		
第5段	瓦	高台瓦	(124)	58	42	4	海綿骨針	良	NA/暗緑	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	7-12	
	瓦	(100)	60	53	4	織密	良	NA/暗緑	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	2-9		
	瓦		83	6	砂炒混入	良	5Y6/2灰オーリー	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	5-9			
	瓦		64	4	織密	良	NA/5灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	4-12			
	瓦		65	5	織密	良	10Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	X-0			

表-7 出土遺物観察表4

件名番号	種別	器種	計測値 (mm)			地 土	焼成	色 調	成 形			出 土 地 点	備 考
			口径	底径	高さ				内面	外面	底部		
35 36 37 38 39	須恵器	壺			4	織密	良	NB/灰	カキメ	カキメ		8-9	
	須恵器	壺	(142)		5	織密	良	NB/灰	ロクロナダ	カキメ		8-8	
	須恵器	壺	94	82	116	織密	良	NB/灰	ロクロナダ	ロクロナダ	回転赤切	5-12	
	須恵器	壺	(146)		7	織密	良	NB/灰	ロクロナダ	ケズリ		7-8	
	須恵器	壺			11.6	織密	良	NB/灰	ロクロナダ	ロクロナダ		3-12	
	須恵器	壺			6.5	織密	良	NB/灰	ロクロナダ	ロクロナダ		8-9	
	須恵器	壺	(114)		8	砂粒混入	良	10YR7/1灰	カキメ	ケズリ カキメ		8-9	
	須恵器	壺	(104)		8	陶面骨付	良	NB/暗灰	ロクロナダ	ロクロナダ		4-12	
	須恵器	壺			8	織密	良	NB/暗灰	ロクロナダ	ロクロナダ		4-12	
	須恵器	壺	(31)		3	織密	良	NB/灰白	ロクロナダ	ロクロナダ		4-12	
40 41 42 43 44 45 46 47 48 49	須恵器	壺	(129)		5	織密	良	NB/暗灰	ロクロナダ	ロクロナダ		4-12	
	須恵器	壺			4.5	織密	良	NB/暗灰	ロクロナダ	ロクロナダ		4-12	
	須恵器	壺			10	砂粒混入	良	NB/灰白	カキメ	ケズリ カキメ		5-12	
	須恵器	壺	(116)		7	織密	良	7.5YR7/1灰	ロクロナダ	カキメ		4-10	
	須恵器	壺			5	織密	良	NB/灰	ロクロナダ	ロクロナダ		4-12	
	須恵器	壺	(220) (96)	136	6.5	砂粒混入	良	NB/灰	ロクロナダ	ロクロナダ		7-11	
	須恵器	壺			16	砂粒混入	良	NB/灰	ナデ	タクキ	丸底	X-0	
	赤陶土器	壺	(222)		8	砂粒混入	良	7.5YR7/1灰黄鐵	ロクロナダ	ロクロナダ		3-11	
	赤陶土器	壺			6	砂粒混入	良	7.5YR7/1灰黃鐵	ロクロナダ	ケズリ		4-12	
	赤陶土器	壺	(188)		6	砂粒混入	良	5YR7/5赤赤鐵	ロクロナダ	ロクロナダ		6-10	
50 51 52 53 54 55 56 57 58 59	赤陶土器	壺	(180)		8	砂粒混入	良	10YR7/3K灰黃鐵	ナデ			3-12	
	土師器	壺	90		7	砂粒混入	良	5YR7/6灰	ハケメ	ケズリ	丸底	3-13	RH'53
	赤陶土器	壺	70		4	砂粒混入	良	7.5YR7/6灰	ケズリ			3-13	RH'53 底部へ記号「X」
	赤陶土器	壺	84		8	砂粒混入	良	7.5YR7/6灰	ケズリ			5-12	
	赤陶土器	壺	(124) (56)	43	4	織密	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ	回転赤切	4-11	
	赤陶土器	壺	(283)		5	海面骨付	良	10YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ	回転赤切	7-9	
	赤陶土器	壺			16	砂粒混入	良	7.5YR7/6灰				7-9	
	赤陶土器	壺	80		5	砂粒混入	良	7.5YR7/6灰	ナデ	ケズリ		7-9	
	赤陶土器	壺			8	砂粒混入	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ナデ	ケズリ		4-12	
	赤陶土器	壺			8	砂粒混入	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ		5-12	
60 61 62 63 64 65 66 67 68	土師器	壺			8	砂粒混入	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ハケメ			4-13	
	赤陶土器	壺			7.5	海面骨付	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ			
	赤陶土器	壺			7.5	海面骨付	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ			
	赤陶土器	壺			7.5	海面骨付	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ			
	赤陶土器	壺			7.5	海面骨付	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ			
	赤陶土器	壺			7.5	海面骨付	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ			
	赤陶土器	壺			7.5	海面骨付	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ			
	赤陶土器	壺			7.5	海面骨付	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ			
	赤陶土器	壺			7.5	海面骨付	良	7.5YR7/4K灰黃鐵	ロクロナダ	ロクロナダ			

表-8 石器・石製品観察表

件名番号	種別	器種	計測値			表面の 特徴	断面の 特徴	出土地点	備 考	
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)					
12-19	石製品	石臼	直径(192)		高さ(114)	4.140	有	破損部に転用による刃形跡	E889	上白
21-5	石製品	砥石	149	66	20	247.3	無	4面に研ぎ跡、ノミ状工具による加工痕	ST150	側灰岩
27-14	石製品	砥石	102	50	33	194.8	無	側面に研ぎ跡、削面にノミ状工具による加工痕	X-7	側灰岩
37-15	石製品	砥石	124	36	16	93.8	無	2面に研ぎ跡、ノミ状工具による加工痕	X-0	側灰岩
38-1	石器	石礫	(28)	14.5	4	0.8	有			真岩・片側磨
38-2	石器	器器	59	24	5.5	9.3	無	片面加工、刃部は背面側の両側縁	S-12	真岩
38-3	石器	器器	(24)	(27.5)	9	3.9	有	片面加工、刃部は右側縁	T-11	真岩
38-4	石器	二次加工の有刺片	82	69	18	79.8	無	左側縁両面の一辺に二次加工	S-5	真岩
38-5	石器	刮削片	61	66	11	42.6	無			8-7
38-6	石器	刮削片	55	79	15	91.9	無			X-0
38-7	石器	刮削片	37.5	27	7.5	6.3	無			X-0
38-8	石器	刮削片	(42)	37	19	12.6	有			7-8
38-9	石製品	磨製石斧	(131)	(109)	72	1,425	有	四面・側面弧削痕	X-0	玄武岩

表-9 出土錢貨計測表

件名番号	銭種	計測値			出土 地 点	初 銭 年	備 考
		直径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)			
19	永楽通寳	24.5	0.8	3.48	376	14-6	1408 明 RM12
20	永楽通寳	24.5	1.0	3.45	471	14-6	1408 明 RM12
21	永楽通寳	24.5	0.8	3.20	376	14-6	1408 明 RM12
22	永楽通寳	26.0	0.8	5.93	392	14-6	1408 明 RM12
23	永楽通寳	25.0	0.8	3.92	376	14-6	1408 明 RM12 23と番号
24	永楽通寳	24.5	0.8	3.99	376	14-6	1408 明 RM12
25	永楽通寳	24.5	0.8	2.80	376	14-6	1408 明 RM12
26	永楽通寳	24.5	0.8	2.71	376	14-6	1408 明 RM12
27	天元元寶	24.5	1.0	3.15	471-X-0	1022 宋	
28	大通寶	23.0	1.5	2.50	522	13B66 1310 元	RM20
29	洪武通寳	23.0	1.0	3.14	415	X-6	1408 明
30	元開通寳	23.5	0.8	2.54	346	7tr	E21 唐
31	天慶元寶	23.5	0.8	2.40	408	6tr	1022 宋
32	元口貞	24.5	0.8	2.67	376	第3	
33	洪武通寳	20.5	1.5	2.86	494	X-0	1368 明
34	聖宋元寶	23.5	1.0	1.61	433	7-9	1017 宋
35	不夷錢	24.5	1.0	2.94	471	X-0	
36	無文錢	23.0	0.8	1.90	332	X-0	
37	洪武通寳	24.5	0.8	2.42	376	X-0	1368 明 破損
38	元口貞	25.0	0.8	2.48	392	X-0	
39	永樂通寳	24.5	0.8	2.70	376	第3	1408 明 破損
40	永樂通寳	24.5	1.0	1.96	353	X-0	1408 明 破損

VII 調査のまとめ

1 中世の遺構と遺物の年代

本遺跡で検出された遺構は、郭3を除けば遺構間の重複はあまり認められず、長期間に渡り利用されてきたものではないと考えられる。また、掘立柱建物跡やそれに伴うと考えられる柱列、溝跡などの共通性から、これらの遺構はほぼ同時間の中で構築されたものと推測される。一方、遺跡全体の構造からは、単独では長期的な戦闘に耐えるだけの規模や強度を持ち合わせているとは考えにくく、支城網の一環としてとらえるのが妥当であろう。

次に、出土遺物からみた遺跡の年代であるが、本調査で出土した中世の遺物は、第12図に示したものがそのほとんどで、調査面積に比して極めて少ないと見える。遺構に伴う遺物の出土は特に少なく、青磁碗2点、石臼1点の3点を数えるのみである。個別に見ていくと、S B 30の周囲で出土した2個体の須恵器系陶器片口鉢は、直線的に開く体部、肥厚した口縁端部に櫛描波状文が加飾される点など、珠洲編年V期の特徴を示している。また、瀬戸の筒形容器は、古瀬戸後期様式のIII期に比定されるものと考えられる。青磁に関しては、無文碗、盤、香炉の3器種のみである。碗の底部は、全面に施釉された後、高台内ののみ釉を搔き取る手法から14世紀中葉以降の所産としてとらえられる。古銭は、永楽通寶が最も多く10枚、次いで洪武通寶3枚の出土である。これらの遺物からは、15世紀中頃から後半までの極めて短い時間しか見い出すことができない。

木ノ沢橋跡に関する文献は無く、その機能年代や築城者については定かではない。ただ第Ⅲ章で述べた木ノ沢羽黒神社には「大永六丙戌天 橋間伯耆守菅朝臣高成公、造営此堂 本地正觀音金像、御長七寸餘鑄之、以相伝候所伝伝」の記録が残り、室町時代の作と言われる懸仏が伝わる。この羽黒神社が郭1にあったことを想定すれば、大永六年(1526)には山城の機能は失われ、聖域になっていたと考えられる。なお、羽黒神社は大江氏の庇護があったことが伝えられており、橋間氏は大江氏の一族で、木ノ沢橋跡から約2.5km東の柴橋櫓を構えたと言われる。

木ノ沢橋跡から谷を隔てて西約1kmには、大江元時が南北朝期に築城した左沢櫓山城がある。左沢櫓山城は、大江氏滅亡後、最上氏の手に移り、最上氏が改易されると寛永年間まで酒井氏により機能し続けてきた。その間幾度か手が加えられ、より強固な山城に移る過程で木ノ沢橋が設けられたものと考えられる。15世紀における城館と村落の画期が指摘されているように、本遺跡も15世紀後半にはその機能を終え、村落と共に再編されたものと考えられる。

2 奈良・平安時代の遺構と遺物の時期について

土器の分類については、須恵器をI、赤焼土器をII、土師器をIIIとし、器種は、A-壺、B-高台付壺、C-双耳壺、D-蓋、E-鉢、F-壺、G-甕、H-壠、I-瓶、J-焼き台に分類した。底部の切り離しは、回転ヘラ切りをa、回転糸切りをbとした。器種と分類の詳細は、表10、11の土器分類表と第39、40図の土器分類図に示した。赤焼土器と土師器の区分については、製作過程でロクロによる調整をほとんど受けていないものを土師器、ロクロや叩きなどに

よる整形など技術的に須恵器の技法を用い、酸化焰焼成を行っているものを赤焼土器とした。ただし壺には、ロクロ整形に加えて部分的にハケメを施したり、体部下半にケズリを施すなど赤焼土器と土師器の技法の折衷が認められるものがあるが、これらは赤焼土器に含めた。

次に主な遺構について、出土した土器をもとに、平野山古窯跡群第12地点遺跡の報告（佐藤・須賀井：1998）を基準として年代を考えたい。

S T 28では、カマドから赤焼土器の壺や瓶が出土している。年代は9世紀代と考えられる。

S T 149では、底径が小さく体部が直線的に外反する赤焼土器の壺A 3類や長胴の壺G 7類がカマドから出土している。赤焼土器壺A 3類は、平野山古窯跡群第12地点遺跡のC群土器よりも新しく、D群土器に類似した様相を示す。C群土器は9世紀第2四半期に、D群土器は9世紀第4四半期に位置づけられているため、住居跡の年代は9世紀後半と捉えたい。また、底部が回転ヘラ切りの須恵器壺A 1類が出土しているが、これは8世紀第3四半期から同第4四半期にかけての年代と考えられる。また、器高が低く口縁にかけて内湾し底部が丸底風の土師器壺A 1類は、河北町熊野台遺跡（佐藤・安部：1980）に類似する形態のものがあり、須恵器壺A 1類の時期に伴う可能性がある。S T 149では、このような古い時期の遺物が混入している。

S T 150出土の須恵器壺では、底径がやや小さく直線的に外反するA 5類を中心で、他に、内湾するA 4類、底径が小さいA 7類がある。赤焼土器壺では、底径がやや小さ目で直線的に外反するものがある。須恵器高台付壺では、底径がやや小さく直線的に外反するB 4類、身の深いB 7類、赤焼土器高台付壺では、器高がやや高めのB 1類がある。須恵器蓋では、つまみが無いD 8類がある。S T 151出土の土器はS T 150のものと内容が類似する。壺類はほぼ内容が類似し、須恵器高台付壺では、器高がやや低いB 3類、器高が高く底径が小さめのB 6類がある。須恵器蓋では、口縁端部が内側に屈曲し、つまみの内側がくぼむ。また天井部分は、回転糸切りの後に回転ヘラケズリを施す特徴がある。赤焼土器壺では、中型で底部が回転糸切りのG 3類と、長胴で底部が丸底風でロクロ調整の後に体部下半にケズリを施すG 7類の、主に二つのタイプがある。S T 150、151出土のカマド及び床面の須恵器壺は、平野山のC群土器の範疇で捉えられる。しかし床面出土の高台付壺は、C群土器より新しく、D群土器より古い様相を示すため、S T 150、151の年代は9世紀第2四半期から第3四半期にかけてと考えたい。

木ノ沢の集落は、8世紀第3四半期以降に営まれ始めると推測されるが、この時期の遺物は少量認められるものの、遺構は確認されていない。壠の造成の際に、破壊された可能性がある。その後、断続的に集落が営まれたと考えられるが、最も利用されていたのは、9世紀第2～3四半期にかけてと考えられる。この時期の遺物量が最も多い。また、集落の立地する場所は、比高差が大きく、水の便が悪いなど立地条件が良いとは言えず、集落周囲の土地を耕作地として利用することも難しいと考えられる。集落の性格は、一時的に使用する作業場的な性格と考えたい。あえて推定するなら、近接する平野山古窯跡群で、窯業に従事していた工人集団に関連する集落と考えられる。根廻として、焼き台などの窯業に関連する遺物や、製品化できない焼成時に割れた須恵器などの出土があげられる。しかし集落の性格については、隣接地の窯跡の発見や窯業関連の集落の分析など、今後の慎重な検討が必要である。

表-10 土器分類表(1)

(注) 底部切り離し、aは回転ヘラ切り、bは回転糸切りを示す。

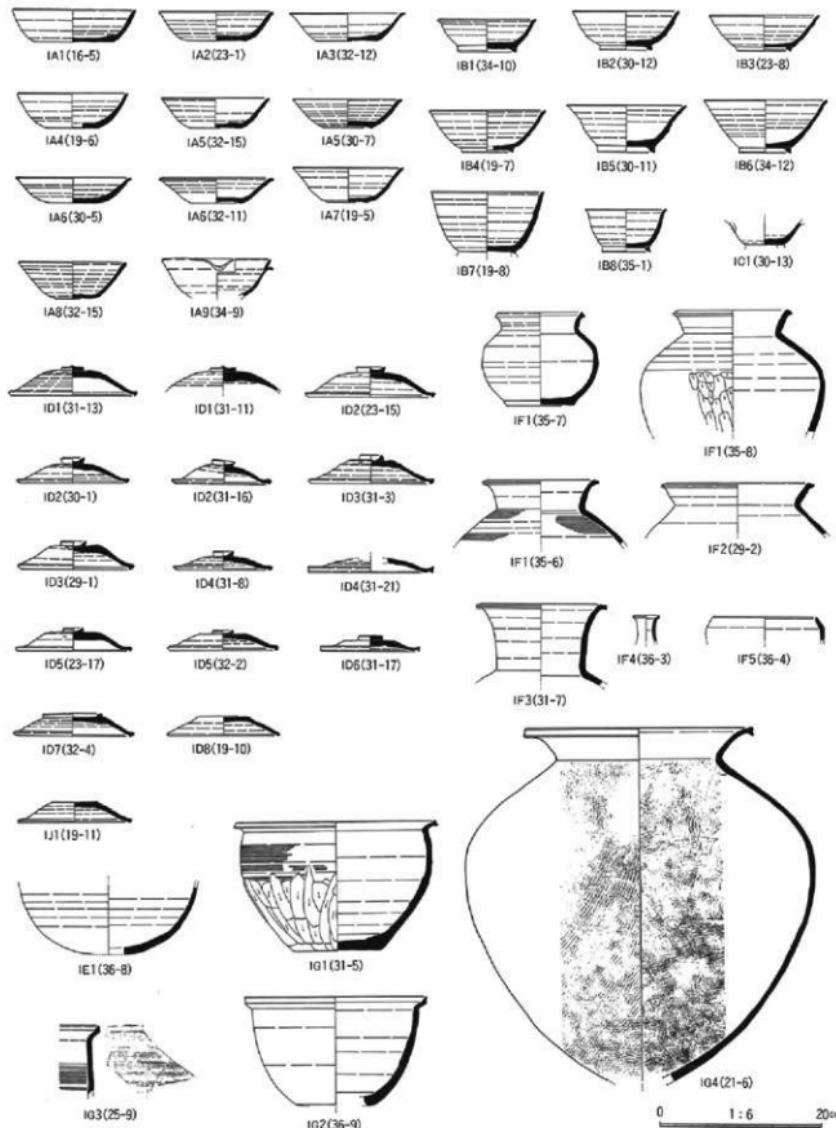
種別	器種	分類	ロクロ 使 用	口縁部～体部形態	外面調整	内面調整	底部 形態	切り 離し
A 环	1	使用		底径が大きく、器形が逆台形状になる	ロクロ	ロクロ	平底	a
	2	使用		底径がやや大きく、器形が逆台形状になる	ロクロ	ロクロ	平底	b
	3	使用		器高が低く、底径がやや大きく、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	b
	4	使用		底径がやや小さく、体部から口縁にかけてゆるやかに内湾する	ロクロ	ロクロ	平底	b
	5	使用		底径がやや小さく、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	b
	6	使用		器高が低く、底径がやや小さく、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	b
	7	使用		底径が小さく、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	b
	8	使用		器高がやや高く、底径が小さく、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	b
	9	使用		片口がつく	ロクロ	ロクロ	不明	不明
B 高 台 付 环	1	使用		器高が低く、底径がやや大きく、体部が内湾し、口縁端部が外反する	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	2	使用		器高と底径がやや小さく、体部がやや内湾しながら立ち上がる	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	3	使用		器高と底径がやや小さく、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	4	使用		底径がやや小さく、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	5	使用		器高が高く、底径がやや大きく、体部から口縁にかけて外反する	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	6	使用		器高が高く、底径が小さく、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	7	使用		器高が高く、底径がやや小さく、体部が内湾しながら立ち上がる	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	8	使用		口径が小さく、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部が外反する	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	C 盆 环	1	使用	口径が小さく、高台がつき、両側に把手がつく	ロクロ	ロクロ	付高台	b
D 須 恵 器	1	使用		天井部が丸みをもち、擬宝珠状のつまみをもつ	ロクロ、ケズリ	ロクロ		不明
	2	使用		天井と体部の境が不明瞭で口縁端部が屈曲する	ロクロ、ケズリ	ロクロ		不明
	3	使用		平らな天井部をもち、口縁端部が屈曲する	ロクロ、ケズリ	ロクロ		b
	4	使用		器高が低く、天井と体部の境が不明瞭で口縁端部が屈曲する	ロクロ、ケズリ	ロクロ		不明
	5	使用		器高が低く、平坦な天井部をもち、口縁端部が屈曲する	ロクロ、ケズリ	ロクロ		b
	6	使用		器高が低く、偏平なつまみをもち、口縁端部が直立する	ロクロ、ケズリ	ロクロ		不明
	7	使用		平らな天井部の縁に低い高台状のつまみがつく	ロクロ	ロクロ		b
	8	使用		平らな天井部でつまみをもたない	ロクロ	ロクロ		b
E 鉢	1	使用		底部が丸底で、体部が内湾しながら立ち上がる	ロクロ	ロクロ	丸底	不明
F 壺	1	使用		やや短い口縁部が外反し、体部が丸く膨らむ	ロクロ	ロクロ	平底	b
	2	使用		口径が大きく、短い口縁部が外反し、体部が丸く膨らむ	ロクロ	ロクロ	不明	不明
	3	使用		口縁部が長く外反する	ロクロ	ロクロ	不明	不明
	4	使用		小型で長い口縁部が直立し外反する	ロクロ	ロクロ	不明	不明
	5	使用		無頬	ロクロ	ロクロ	不明	不明
G 甕	1	使用		口径が大きく、口縁部が短く外反し、体部が丸く膨らむ	ロクロ、ケズリ	ロクロ	平底	不明
	2	使用		口径が大きく、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が短く外反したのち、上端が立つ	ロクロ	ロクロ	平底	不明
	3	使用		体部が直線的に立ち上がり、口縁部が短く外反したのち、上端が立つ	ロクロ、カキメ タタキメ	ロクロ、カキメ アテメ	不明 丸底	不明
	4	使用		大型で、口縁部が外反し、体部上位に最大径をもつ				
I 瓶	1	不明		体部下半がややすぼまる無底式の瓶	ナデ、 タタキメ	ナデ	無底	
J 壺	1	使用		平らな天井部をもち、つまみをもたない壺に類似する	ロクロ	ロクロ		b
II 赤 燒 土 器	A 坏	1	使用	底径がやや小さく、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	b
	2	使用		底径が小さく、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	b
	3	使用		底径が小さく、器高がやや高く、体部が直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	b
J 壺	高 坏	1	使用	器高がやや高く、底径が小さく、体部が内湾しながら立ち上がり口縁が外反	ロクロ	ロクロ	付高台	b

表-11 土器分類表(2)

種別	器種	分類	クロ 使 用	口縁部～体部形態	外面調整	内面調整	底部 形態	切り 離し
II 赤 燒 土 器	G 甌	1	使用?	口縁部が外反し、体部が丸く膨らむ	クロ	ナデ	不明	不明
		1	使用	中型で口縁部が短く外反し、体部が丸く膨らむ	クロ	クロ	不明	不明
		2	使用	小型で器高が低く、口縁部が短く外反し、体部が丸く膨らむ	クロ	クロ	平底	b
		3	使用	中型で体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反したのち、上端が立つ	クロ	クロ	平底	b
		4	使用	やや大型で、短く外反する口縁部をもち、体部が丸く膨らむ	クロ	クロ	不明	不明
		5	使用	大型で、体部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反する	クロ、ケズリ	クロ	不明	不明
		6	使用	大型で、器高が高く、口縁部が短く外反する	クロ、カキメ	クロ、カキメ	不明	不明
		7	使用	大型で、器高が高く、口縁部が外反したのち、上端が立つ	クロ、ケズリ	クロ	丸底風	不明
		8	使用?	高台をもつ	不明	不明	付高台	不明
III 土 師 器	H 壺	1	使用	器高がやや高く、口縁部が外反したのち、上端が立ち、体部が丸く膨らむ	クロ、カキメ	クロ、カキメ	不明	不明
		2	使用	口縁部が外反したのち、上端が立ち、体部が内湾気味に立ち上がる	クロ	クロ	不明	不明
		3	使用	口縁部が外反し、内湾気味に立ち上がる	クロ	クロ	不明	不明
III 土 師 器	A 环	1	不使用	器高が低く、底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がる	ナデ	ナデ	丸底風	
		2	不使用	底盤がやや小さく、体部が直線的に立ち上がる	ケズリ	ナデ	平底	
		3	不使用	器高が低く、体部から口縁にかけて直線的に外傾する	ナデ	ナデ	上げ底	
III 土 師 器	E 鉢	1	不使用	体部から口縁にかけて内湾しながら立ち上がる	ナデ、ケズリ	ナデ、ケズリ	平底	
		1	不使用	中～小型で、口縁部が短く外反し、体部が丸く膨らむ	ハケメ	ハケメ	平底	
		2	不使用	口縁部が強く外反し、体部が直線的に立ち上がる	ハケメ	不明	不明	
		3	不使用	口縁部がゆるやかに外反し、体部が丸く膨らむ	不明	ハケメ	不明	
		4	不使用	口縁部がゆるやかに外反し、体部が直線的に立ち上がる	ハケメ	ハケメ	不明	不明

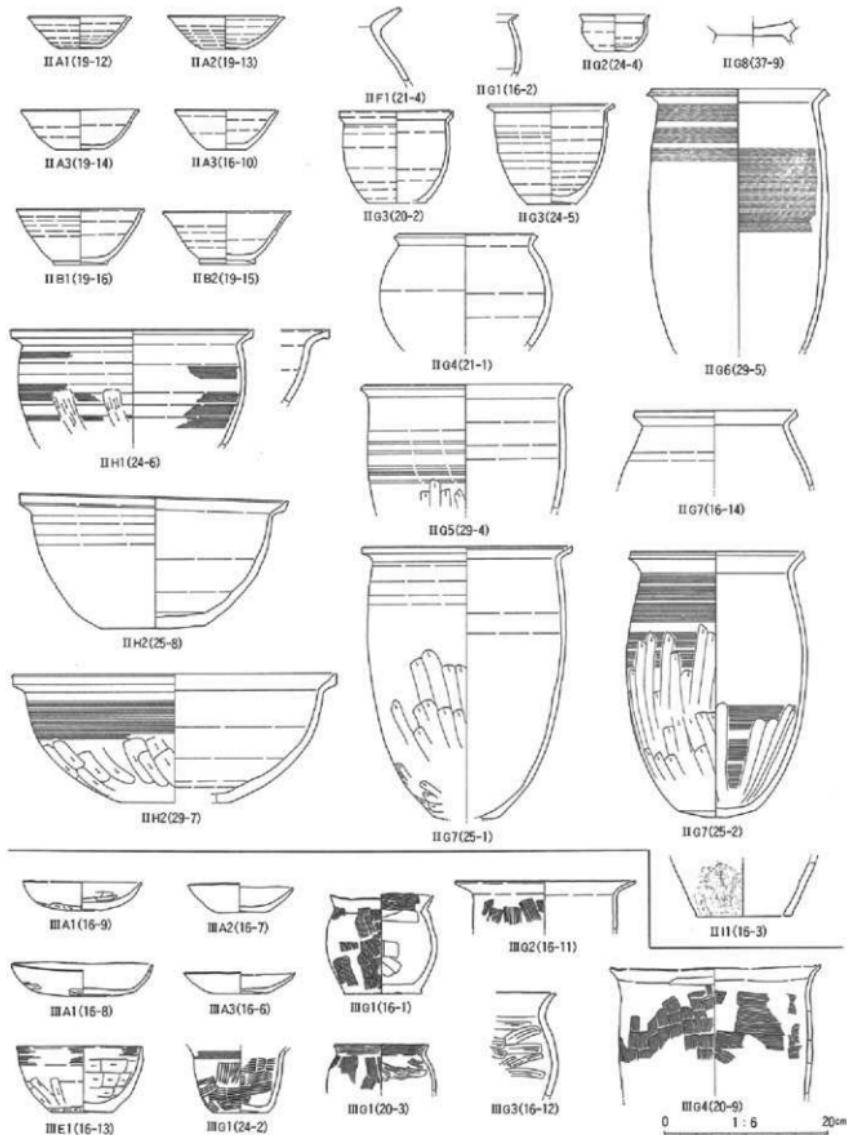
表-12 出土遺物点数表

土 師 器	須 恵 器						青 銅 土 器						合計					
	环	小計	董	环	高台环	董	董	小计	环	高台环	董	董	不明	小计				
ST28		27									84		12	96	123			
ST148	3	18	21		1						56		4	61	83			
ST150	5	31	36	5	43	3		3	54	152	1	819	3	975	1,065			
ST151					14	54	3		6	77	10	1	235	1	247	324		
小計	8	76	84	19	98	6		9	122	163	2	1,194	4	12	4,1379	1,595		
SB30								1							1			
SB50					6			6							6			
SB	6	6									4	97		101	107			
小計	6	6	6	1	6			7	4		97			101	114			
SK155				1	1		1		3				2	2	5			
SK156															4			
SK158								1							1			
SK162	1	1	1					1	2			3	1		4			
SK163				3	10			6	19						19			
SK	4	45	49								25	280		305	354			
小計	4	46	50	5	16		8		29	25	283	3		311	360			
SD154				10	7	2	11	3	33						33			
SD										5	55			60	60			
小計				10	7	2	11	3	33	5	55			60	93			
SG27				1	2					3					3			
SG164				1			1			2					2			
SG											2				11			
小計				2	2		1		5	2	9			11	16			
SX158											2				2			
SX160				1				1							1			
SX	2	4	6							2	23			25	31			
小計	2	4	6		1			1	2	23				27	34			
SP											35			35	35			
EA											6			6	6			
XO	1	8	9	11	73		28	1	113	15	150		49	214	336			
Grid	47	114	161	116	715	13	1	112	50	1,007	115	5,311	6	1	5,433	6,801		
Trench					1	8		13		22					10	32		
小計	48	122	170	128	796	13	1	153	51	1,142	130	5,512	6	1	5,688	7,010		
合計	62	254	316	165	926	21	1	173	63	1,349	331	2	7,175	13	13	53	7,587	9,252



第39図 遺物分類図（1）

調査のまとめ



第40図 遺物分類図 (2)

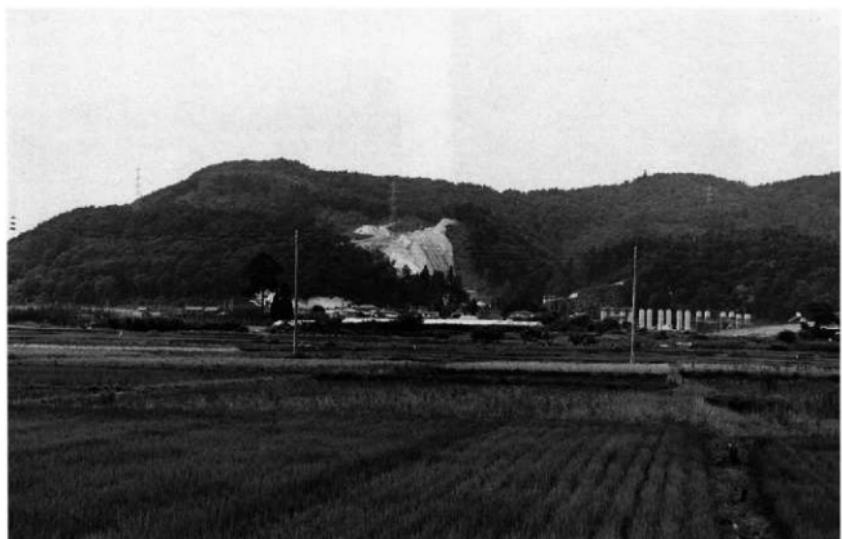
参考文献

- 『寒河江市史年表』 寒河江市教育委員会1985
『寒河江市史 上巻』寒河江市教育委員会1994
『山形県中世城館遺跡調査報告書 第2集（村山地区）』山形県教育委員会1996
柴田龍司：「中世城館の画期一館と城から館城へー」『中世の城と考古学』新人物往来社1991
佐藤庄一・安部 実：『熊野台遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第31集1980
岩見誠夫・能登谷宣康：「山形県の須恵器及び須恵器窯の編年」山形考古第4巻第2号 山形
船木義勝 考古学会1988
鈴木良仁・須賀井明子：『富山2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書
第41集 財団法人山形県埋蔵文化財センター1996
佐藤庄一・須賀井明子：『平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次調査報告書』山形県埋蔵文化財
センター調査報告書第52集 財団法人山形県埋蔵文化財センター1998
手塚 孝：『大神遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第57集 米沢市教育委員
会1998

報告書抄録

ふりがな	きのさわたてあとはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	木ノ沢標跡発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第62集						
編著者名	伊藤邦弘・菅原哲文						
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
発行年月日	西暦1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
木ノ沢標	山形県 寒河江市 大字柴橋 字木ノ沢	06 206	平成 7年度 登録	38度 22分 45秒	140度 14分	19960508 ~ 19960726	4100 東北横断自動車道酒田線(寒河江~西川間) 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
木ノ沢標	集落跡	奈良時代	竪穴住居 5棟	土師器、須恵器	標高約190mの山上に作られた城館。整地された、4つの郭が設けられており、3棟の掘立柱建物跡が検出された。		
		平安時代	土坑 溝跡 柱穴	赤焼土器、石製品			
	城館跡	中世	掘立柱建物跡4棟	中世陶器、青磁	また、下層には奈良・平安時代の竪穴住居跡4棟を検出した。		
			柵(柱)列 土壘 堀 溝跡 柱穴	石臼、錢貨			
(総出土箱数: 35)							

図 版



遺跡遠景（南東から）



調査区近景（東から）

図版2



表土除去（東から）



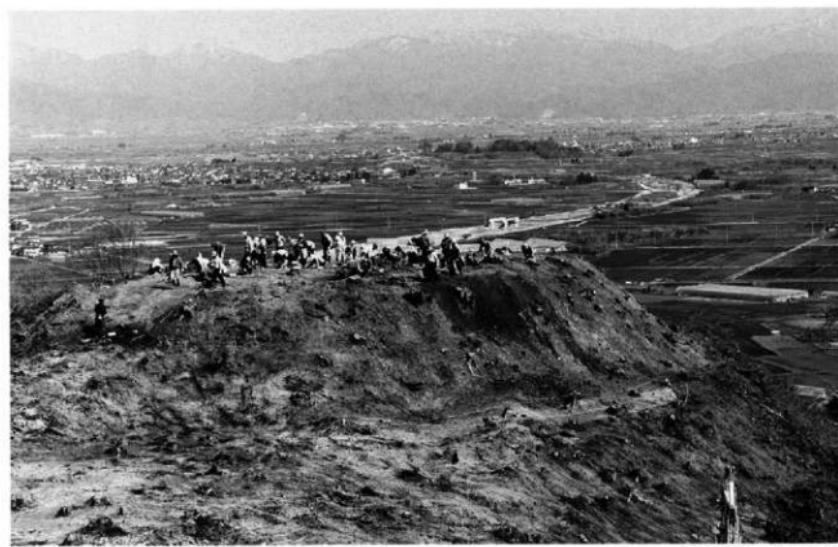
郭1の測量（西から）



平安時代造構の精査（南西から）



調査説明会



面整理作業（西から）



郭1造構・SB1検出状況（南から）



郭2造構検出状況（北西から）



郭3遺構検出状況（南から）



郭3遺構検出状況（南東から）



郭4遺構検出状況（南から）



郭4遺構検出状況（西から）

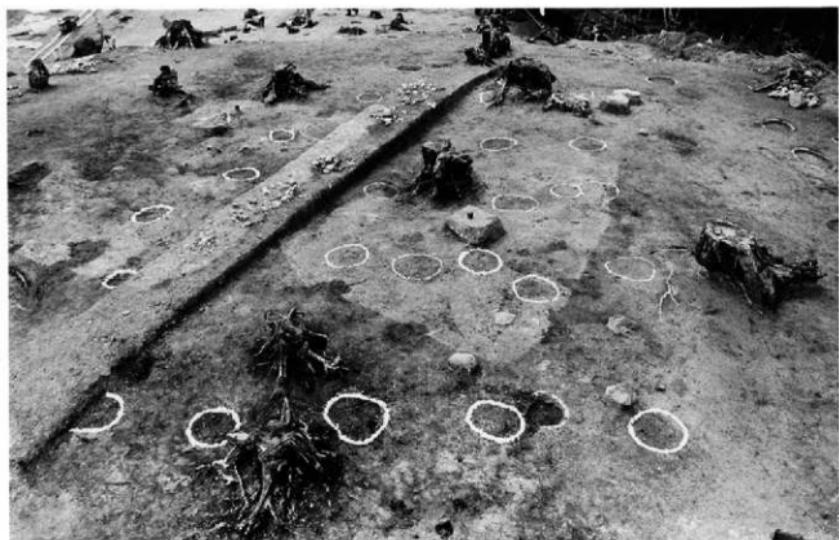
図版6



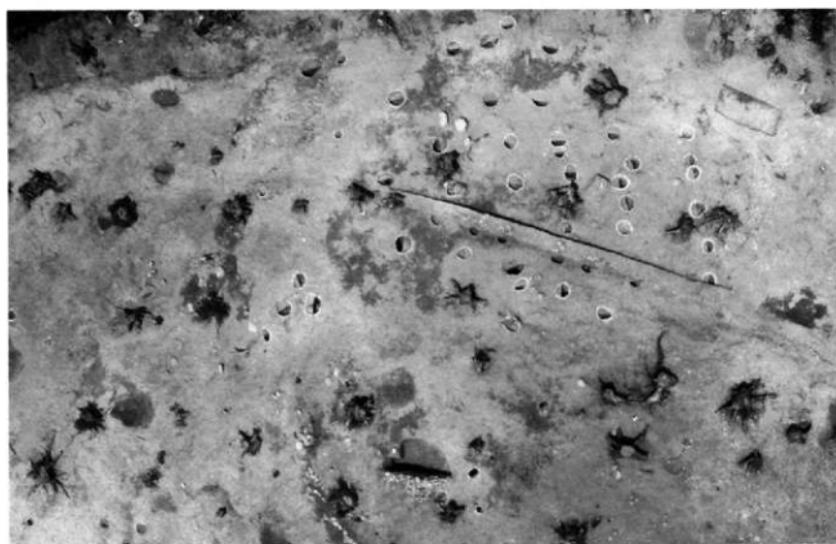
調査区全景（北西から）



調査区空中写真



SB272検出状況（南東から）



SB272空中写真

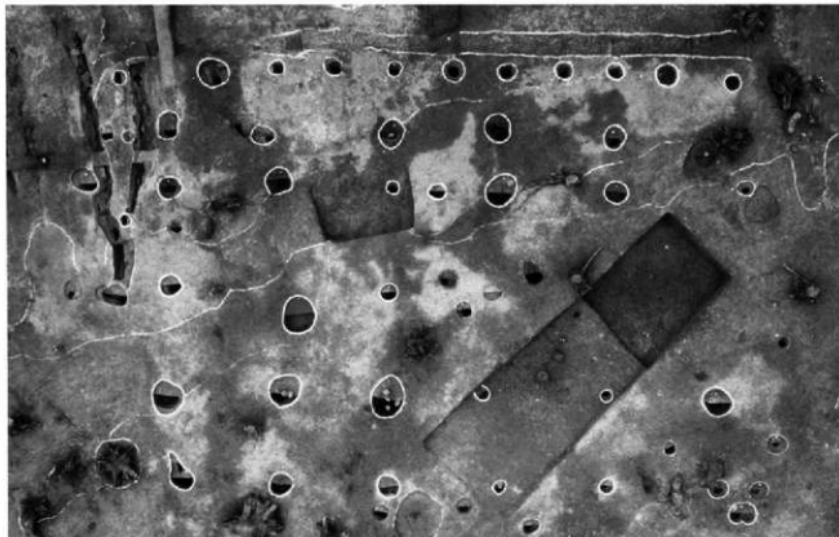
図版8



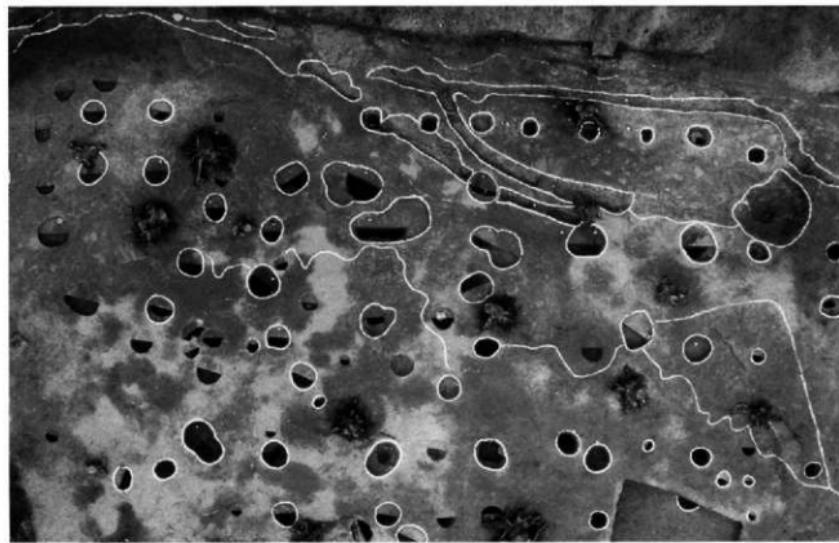
郭3遺構掘り下げ状況（南東から）



郭4遺構掘り下げ状況（北から）

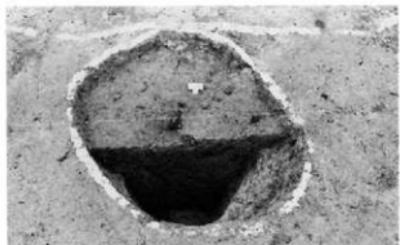


SB30空中写真



SB50空中写真

図版10



EB66 (南から)



EB73 (南から)



EA108 (南から)



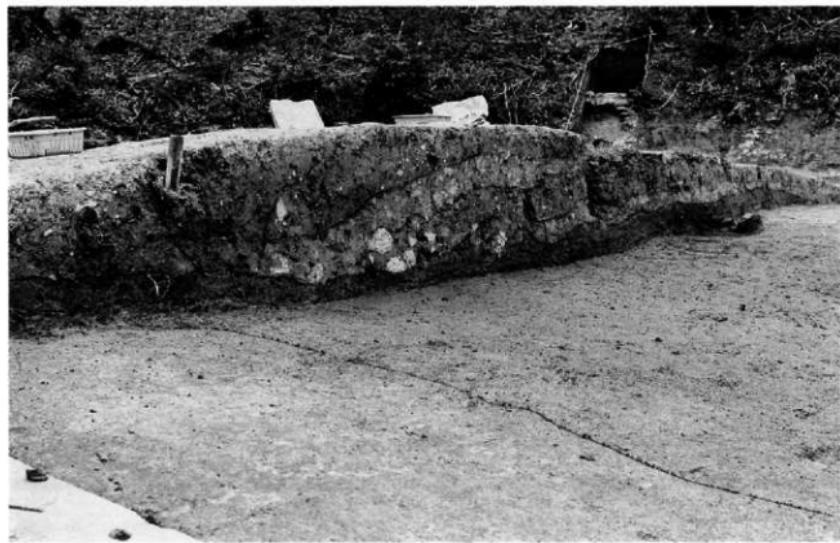
EA113 (南から)



EB99石臼出土状況 (東から)



SF239土層断面（西から）



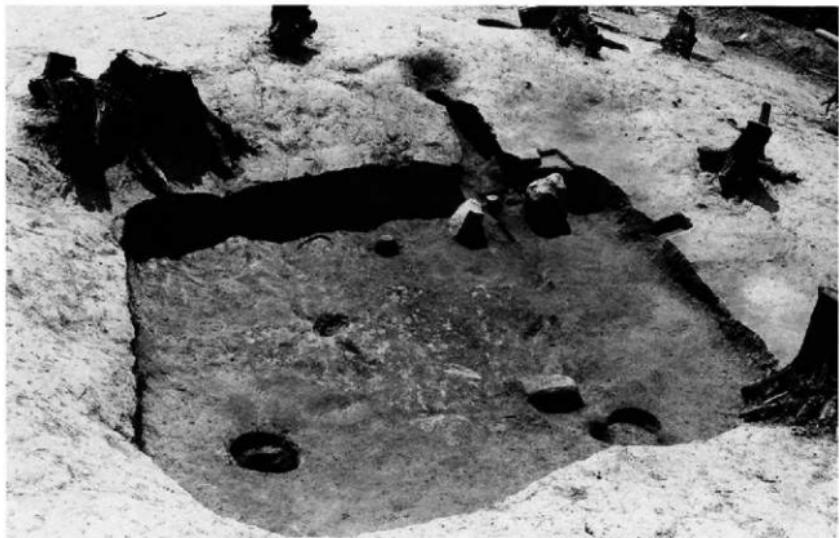
郭3整地層土層断面（南東から）



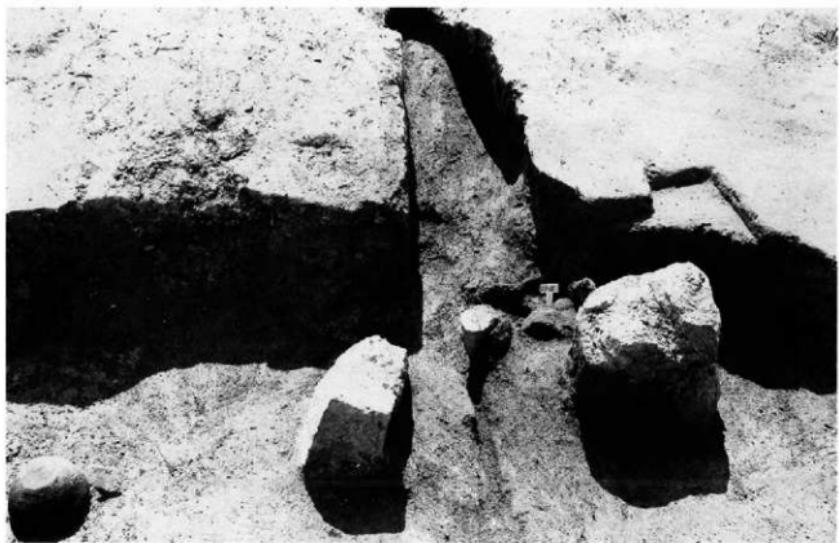
平安時代遺構検出状況（西から）



ST28（北西から）



ST149 (北西から)



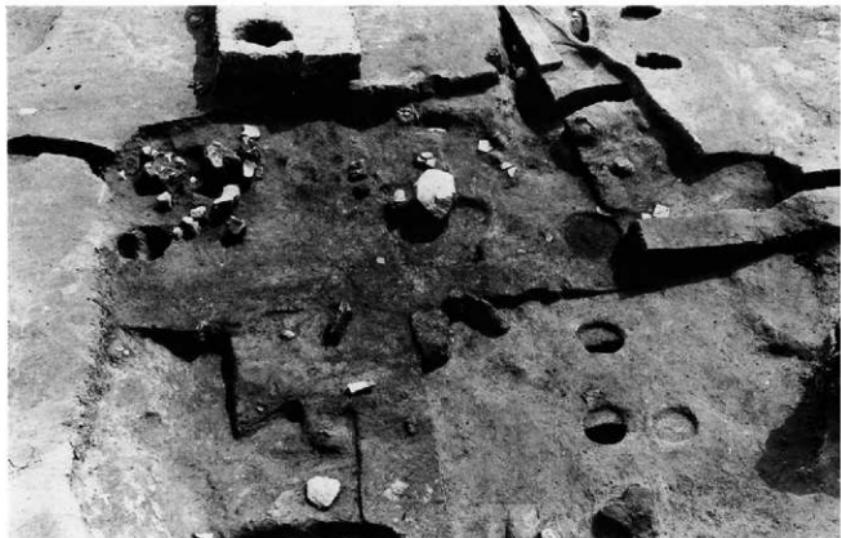
EL169 (北西から)



ST150検出状況（北から）



ST150土層断面（北西から）



ST150掘り下げ状況（北から）



EL165（北西から）



ST151検出状況（北から）



ST151土層断面（北から）



ST151掘り下げ状況（北東から）



EL157（北から）

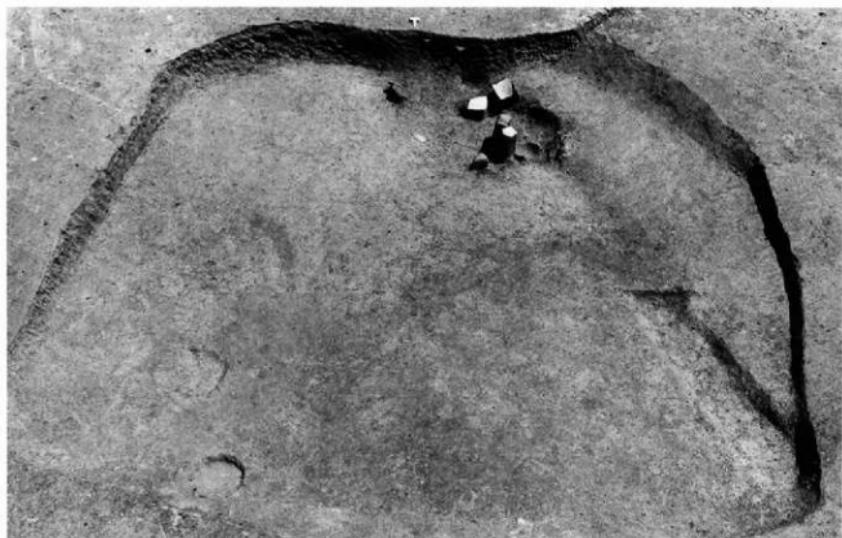
図版18



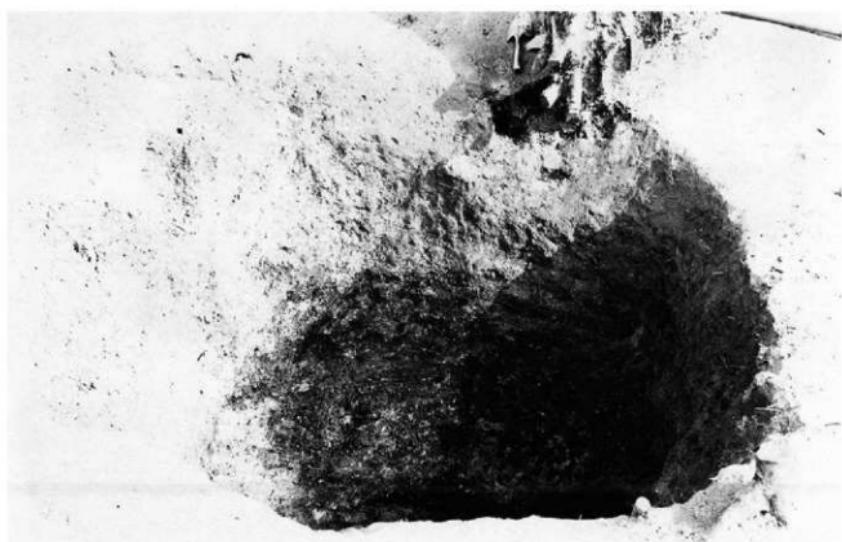
SK155 (北から)



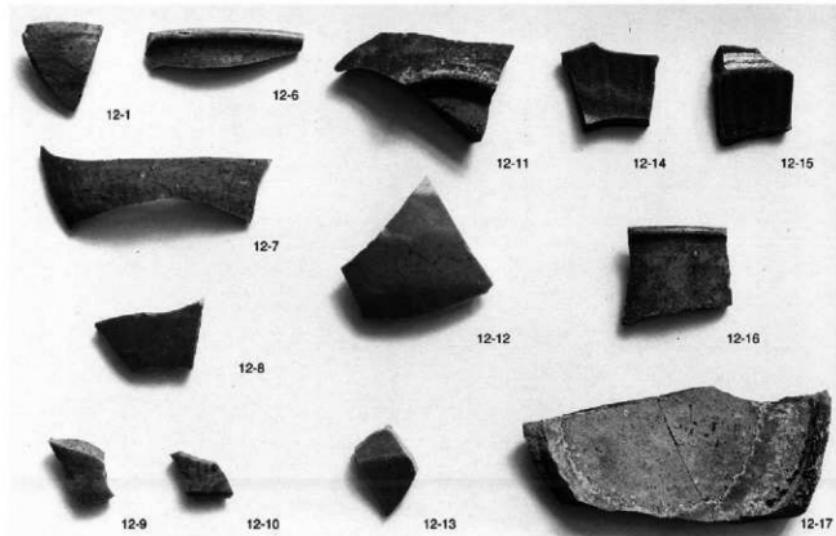
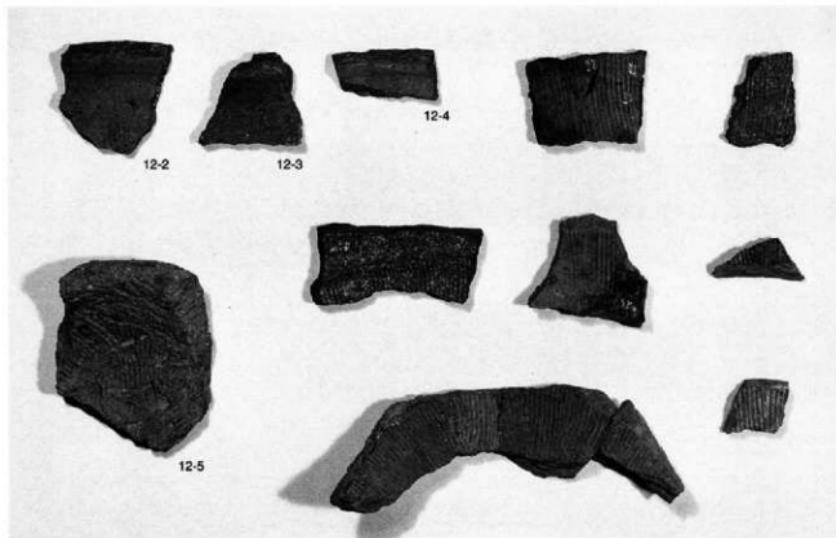
SK156 (東から)



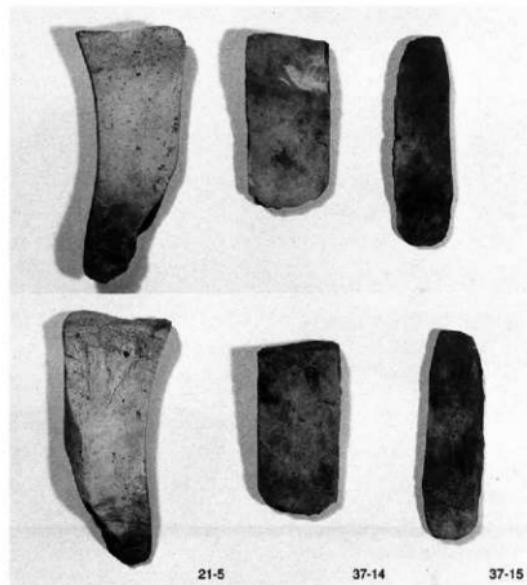
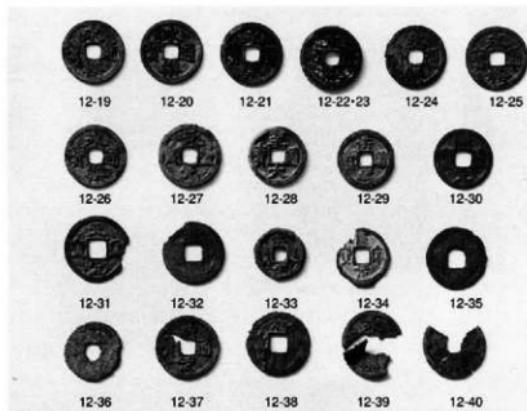
SX158 (南から)

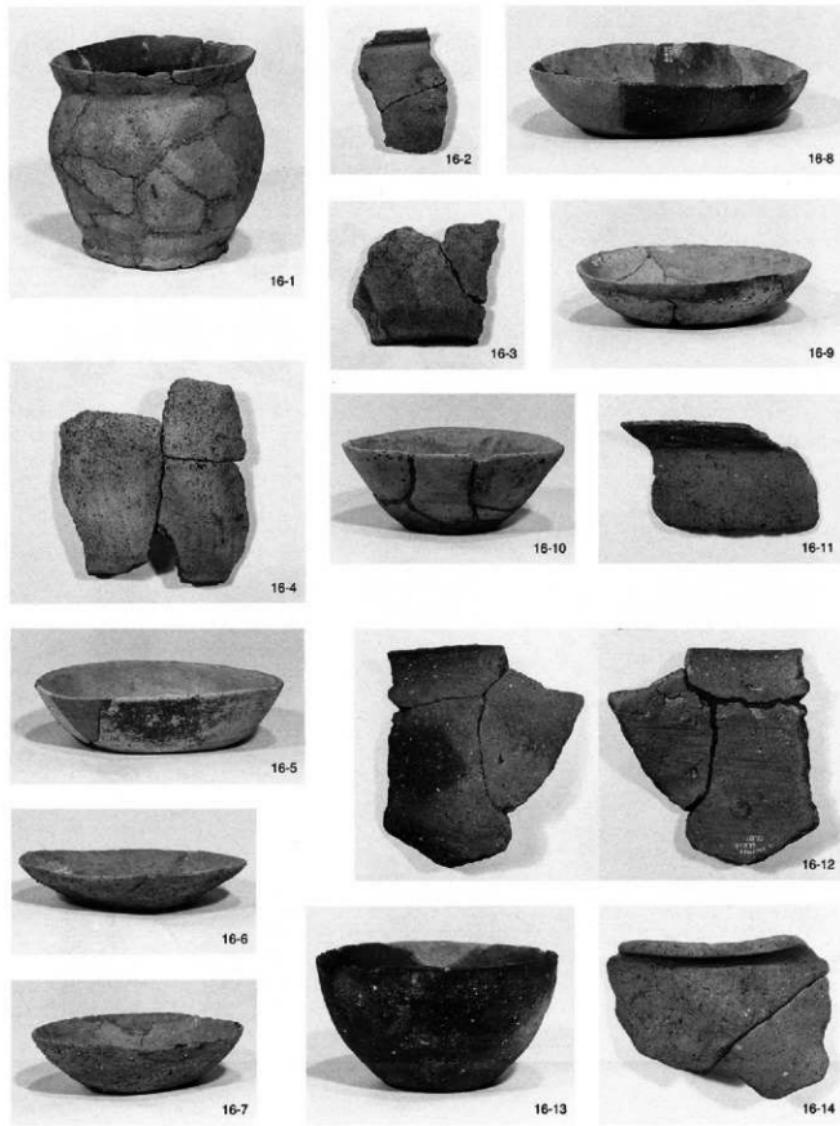


SX163 (北から)

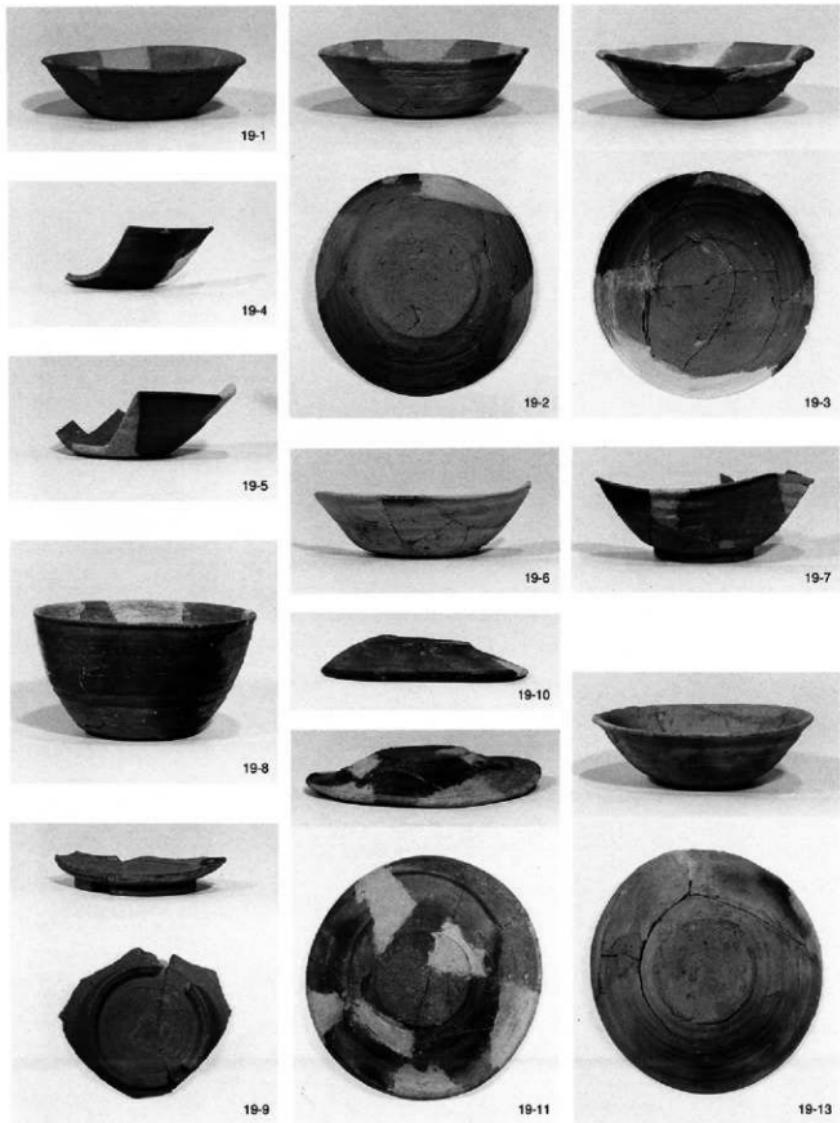


中世陶磁器



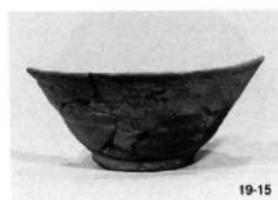


ST28・149出土遺物



ST150出土遺物(1)

圖版24





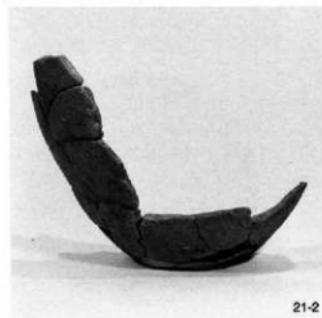
20-9



20-11



21-1

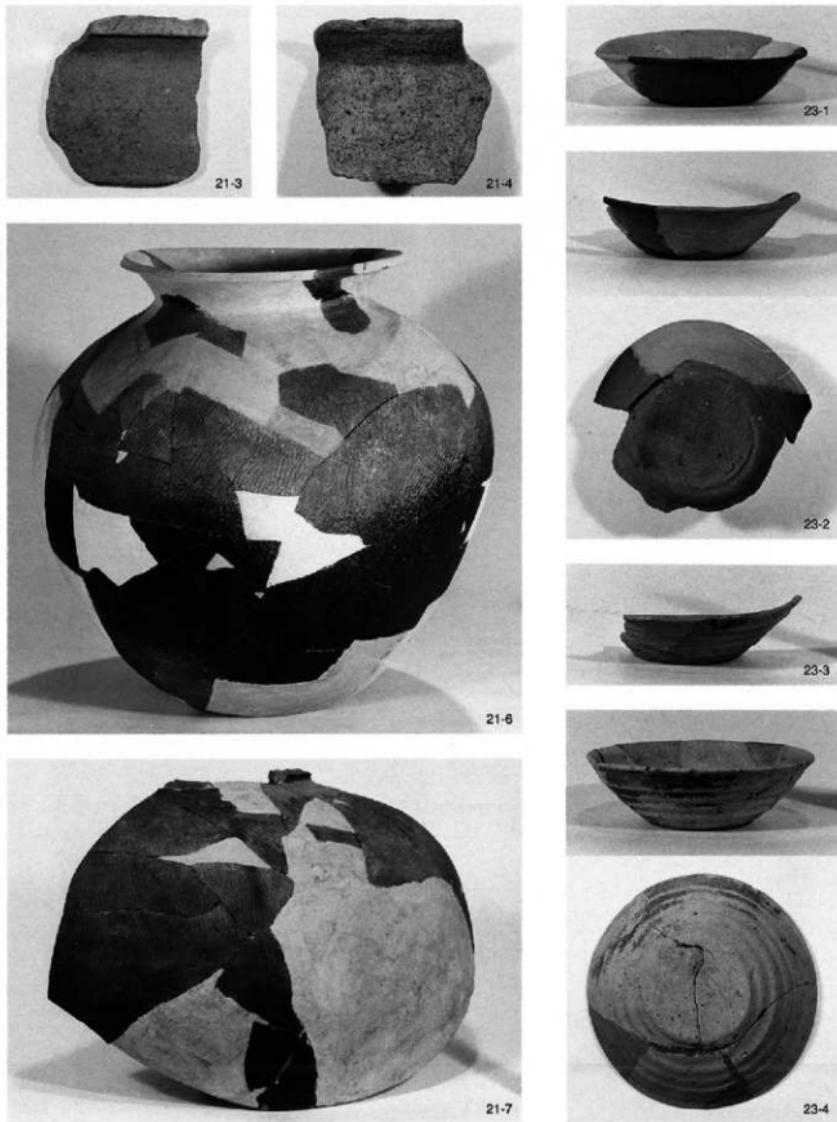


21-2

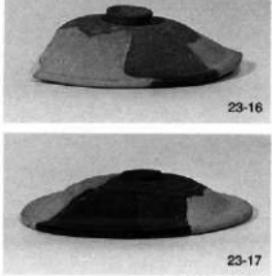
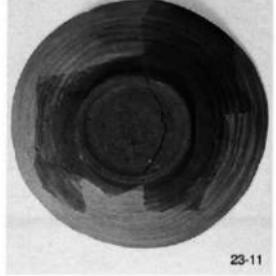
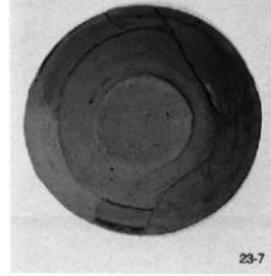
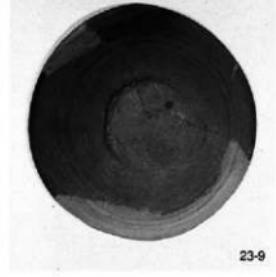
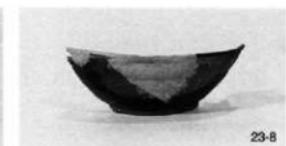


20-12

ST150出土遺物(3)



ST150出土遺物(4)・ST151出土遺物(1)

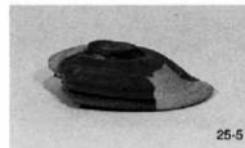
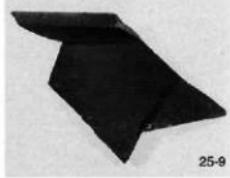
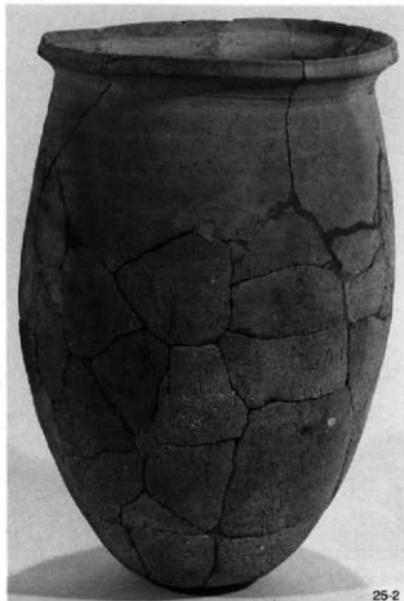


ST151出土遺物(2)

図版28



ST151出土遺物(3)



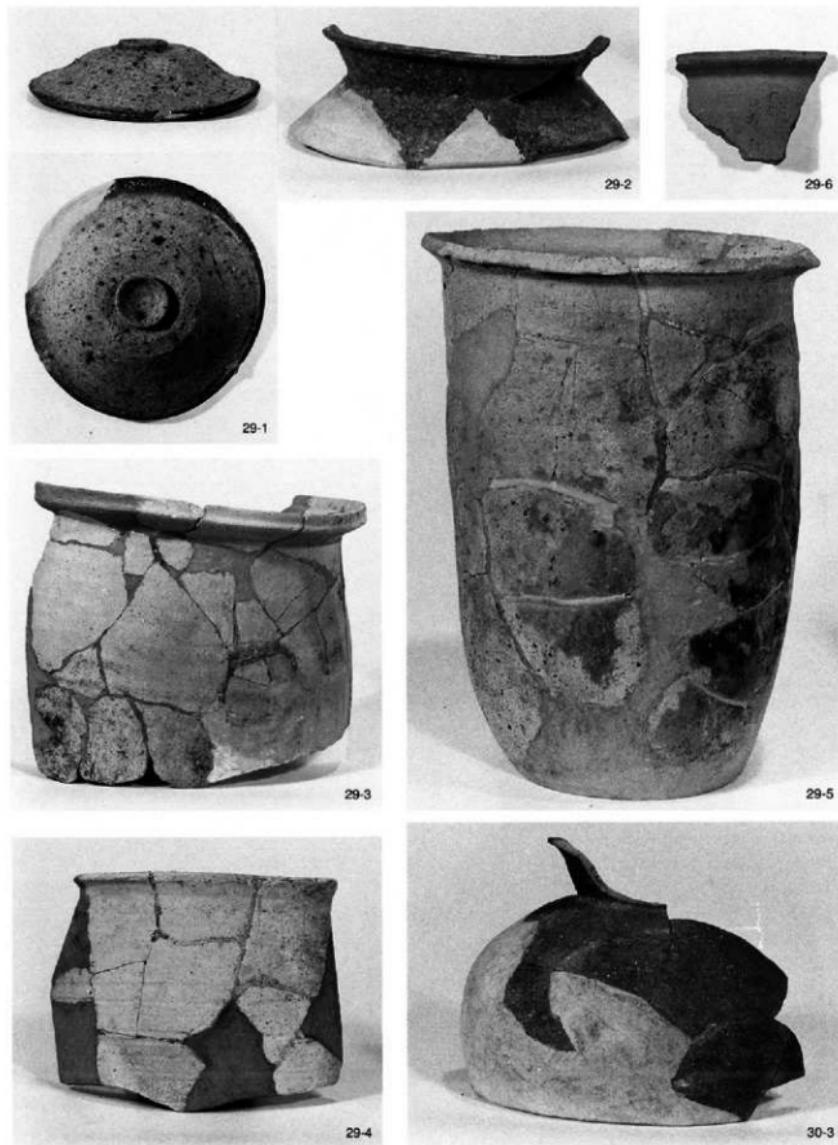
ST151出土遺物(4)・SK155出土遺物



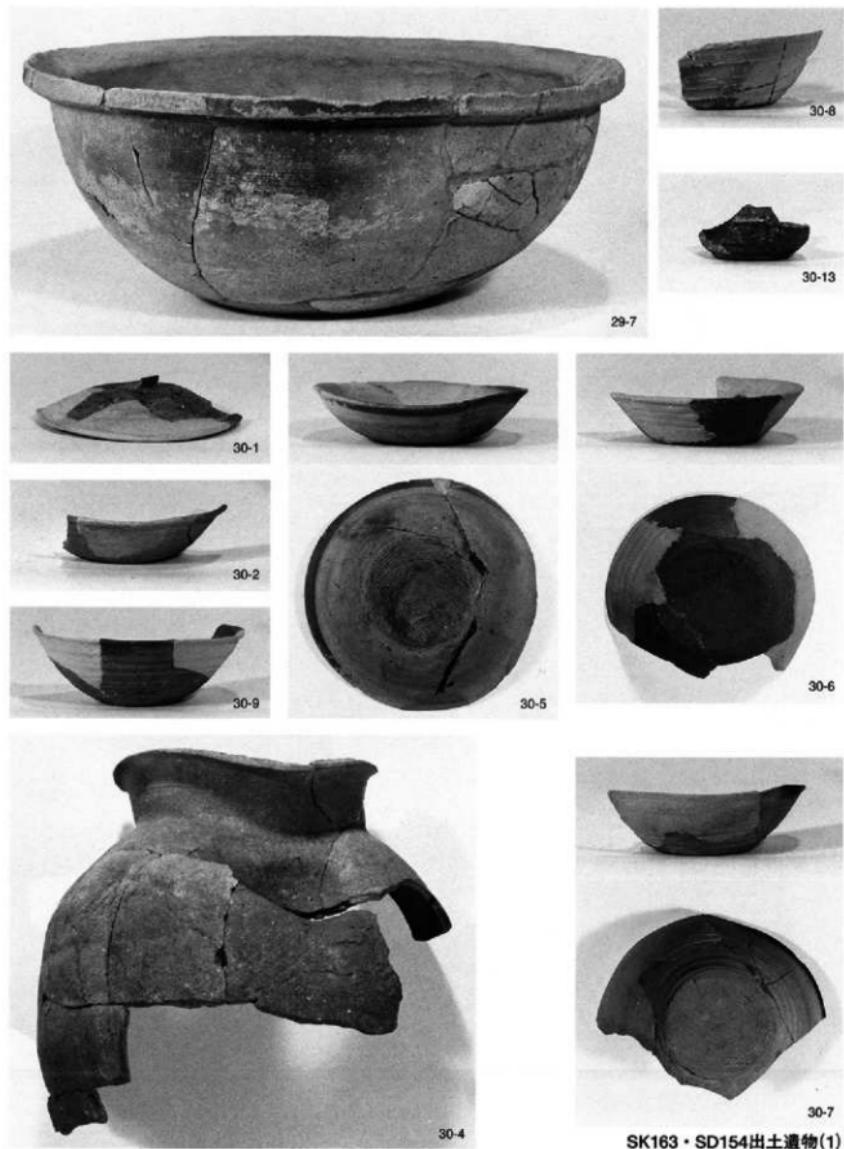
ST150出土遺物



ST151出土遺物

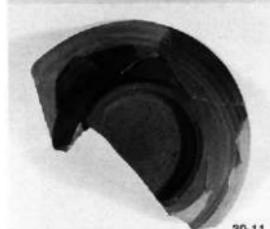


SK162・163出土遺物





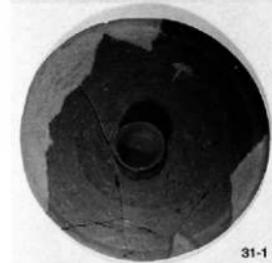
30-10



30-11



30-12



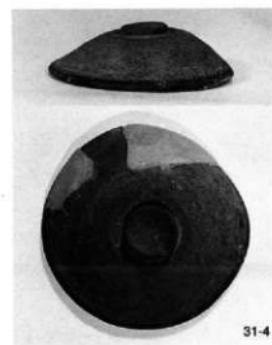
31-1



31-2



31-3

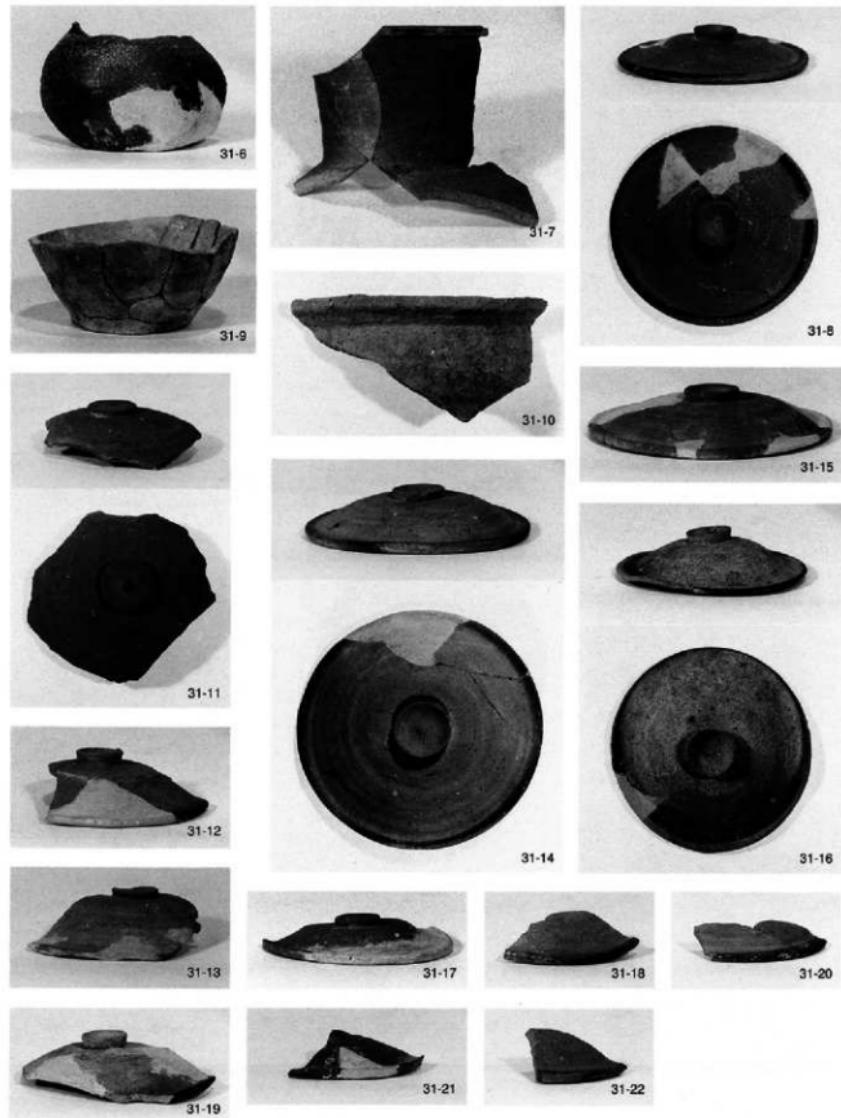


31-4



31-5

SD154出土遺物(2)



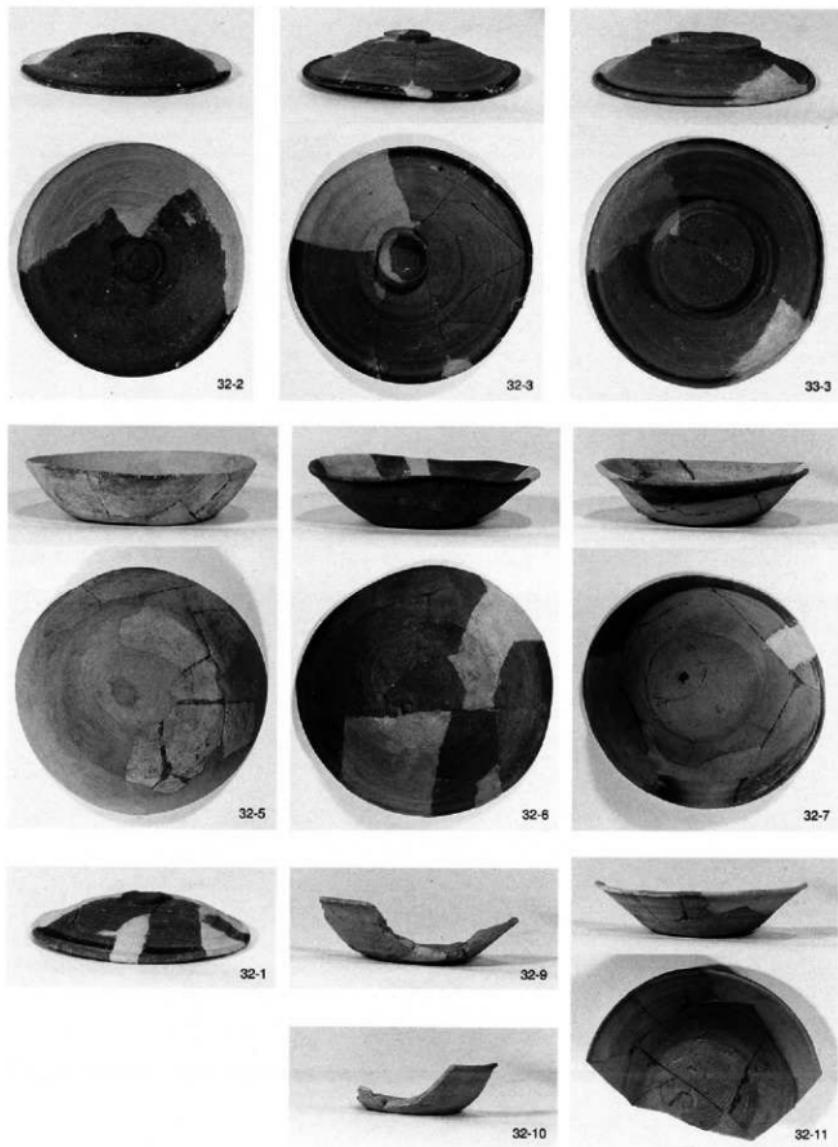
SD154出土遺物(3)



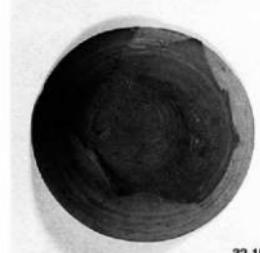
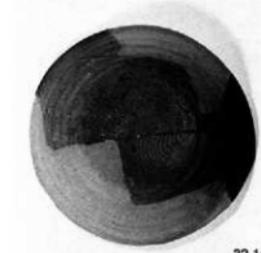
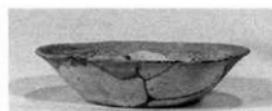
SK162出土遺物



SK154出土遺物



グリッド出土遺物(1)

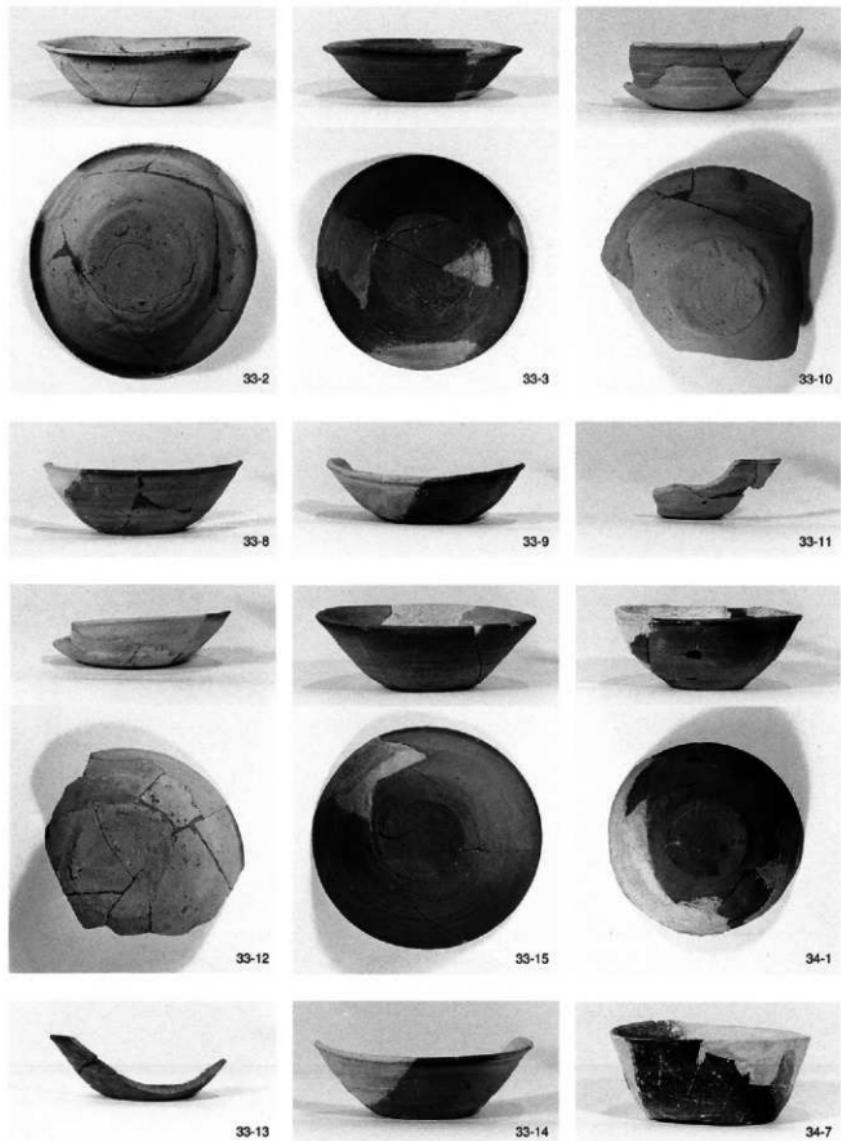


33-4

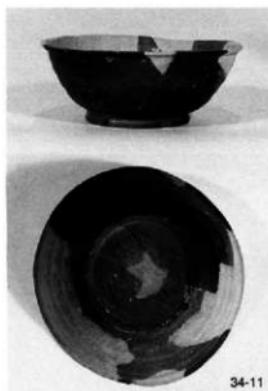
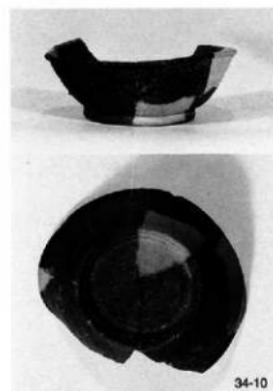
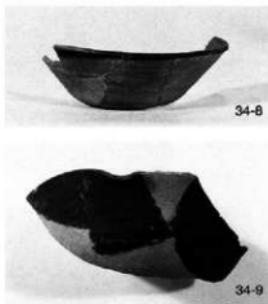
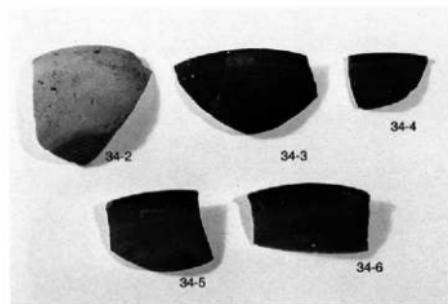
33-6

33-7

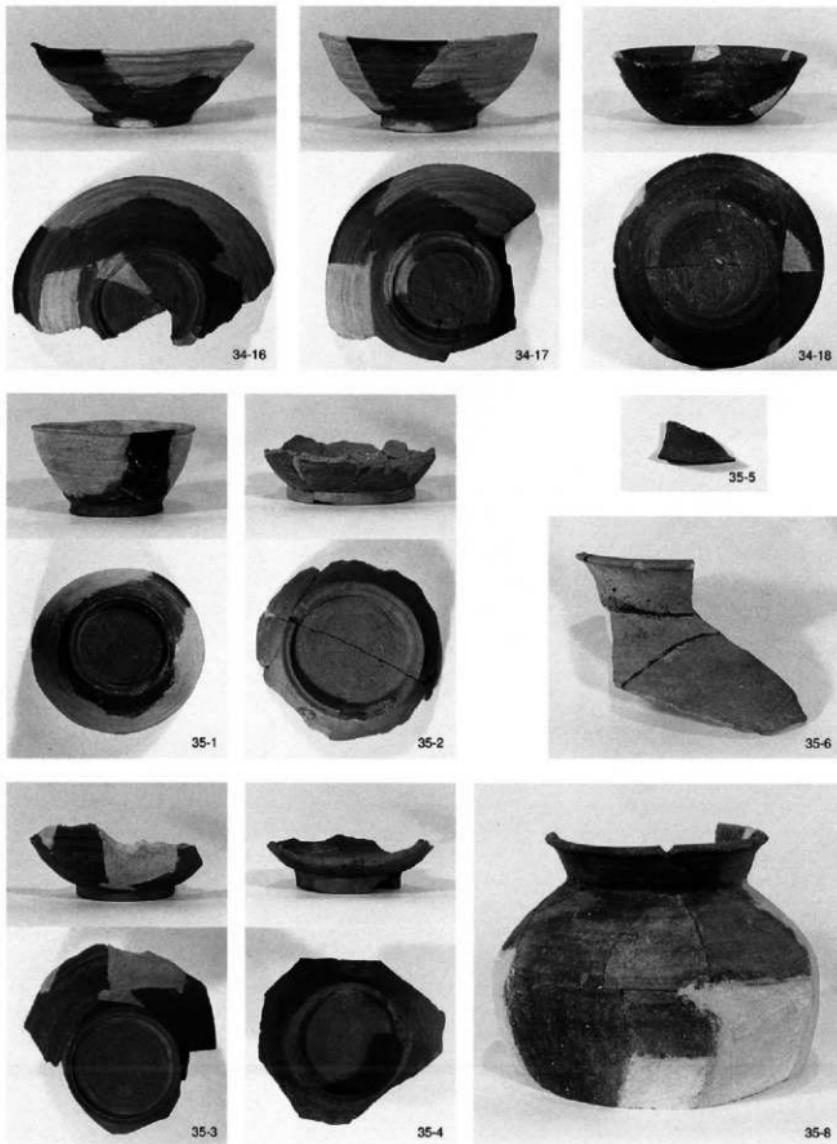
グリッド出土遺物(2)



グリッド出土遺物(3)



グリッド出土遺物(4)



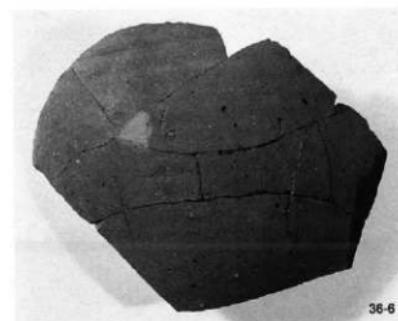
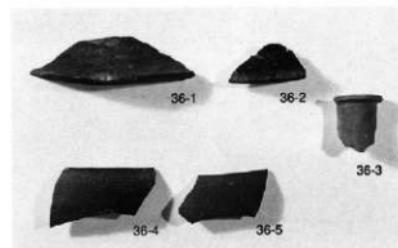
グリッド出土遺物(5)



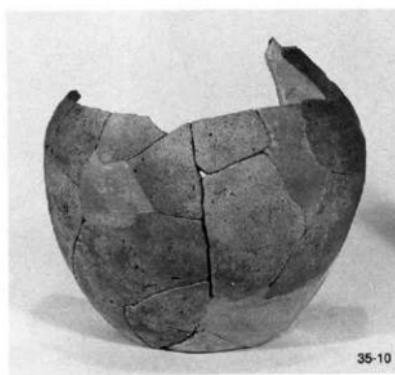
35-7



35-9



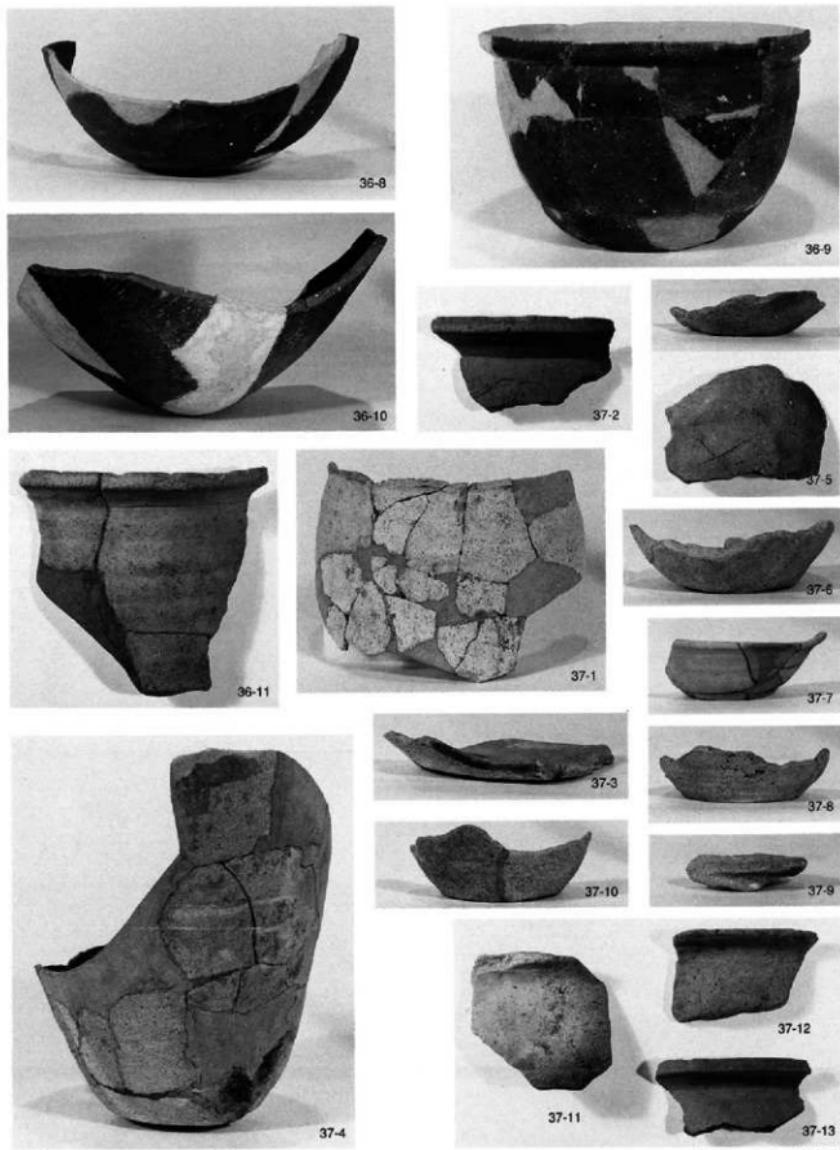
36-6



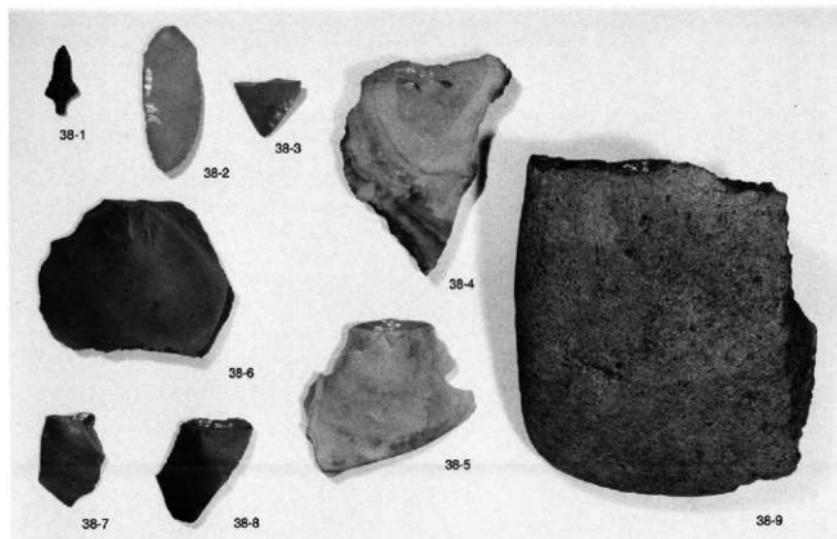
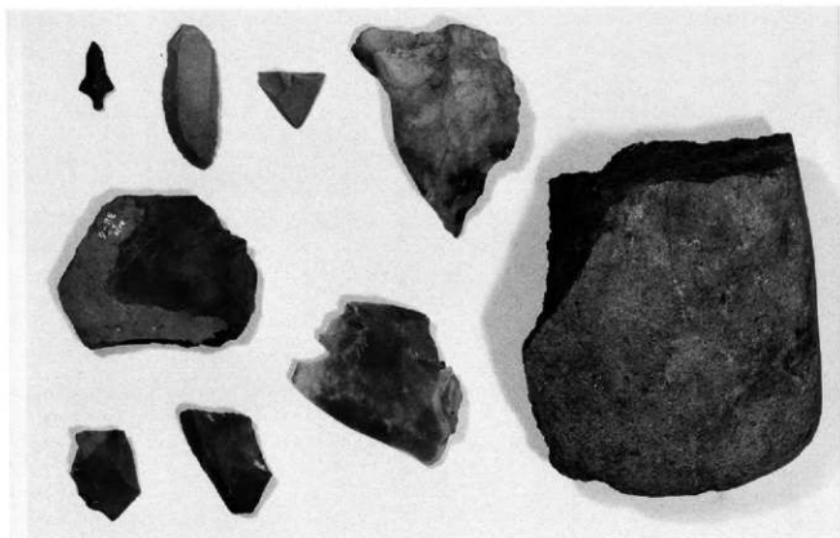
35-10



グリッド出土遺物(6)



グリッド出土遺物(7)



出土石器

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第62集

木ノ沢掘跡発掘調査報告書

1999年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 田宮印刷株式会社
